熊取町埋蔵文化財調査報告第24集

東円寺跡発掘調査概要・IX

熊取町立中央小学校における東円寺跡の調査

1996年　3月

熊取町教育委員会

はしがき

熊取町内には38ヶ所の埋蔵文化財包蔵地（遺跡）があります。地面を掘ることによって初めて知ることのできる埋蔵文化財は、私達の祖先が営んだ生活の一部分そのものであり、その存在に触れる折には、過去の重みを感じ、現在の私達の繁栄と歴史とが結ばれていることを実感します。私達は貴重な文化財を守り続け、開発で壊さなくてはならない時には必ず発掘調査を行い、資料を後世に伝えていかなくてなりません。いずれ現在の私達の暮らしも地面に刻まれて、後世の発掘調査によって知られることになるわけであります。

泉州地域は平成６年度に関西国際空港が開港される等急速に変化しています。本町におきましても様々な土地開発は行われ、数多くの遺跡が破壊される状況に直面しています。こうした社会状況の中で本町教育委員会では、私達の文化遺産である遺跡の記録保存をするために、土地所有者をはじめ関係者各位のご理解とご協力を得て発掘調査を実施してまいりました。

今回報告される東円寺跡は熊取町役場一帯に広がる遺跡であり、町内の遺跡の中では最も広い面積を有しています。東円寺という寺院は、これまでの調査等で平安時代末頃に建立されたものと推定されており、役場の南側の水田に伝えられる小字名には寺院に関わる名称が残されています。

本書は平成２年度から６年度までの期間、東円寺跡内の熊取町立中央小学校において行われた一連の大規模工事に伴う緊急発掘調査の成果を概要報告書としてまとめたもので、泉州地域の歴史解明のための資料となり文化財保護活動の一端を担うことができればと念願し発刊するものです。

最後になりましたが、発掘調査とその整理作業にあたって多大なるご協力とご理解を頂きました関係者各位に厚くお礼申し上げますとともに、文化財保護に対するより一層のご協力とご理解をお願いする次第であります。

平成８年　３月

熊取町教育委員会

教育長　七里　弘

例　　言

1　本書は熊取町教育委員会が公共事業として平成２年度から平成６年度までに実施した東円寺跡における発掘調査の概要報告書である。

東円寺跡90-4区　給食調理室改築　　教育委員会学校教育課
東円寺跡91-4区　下足室新設　　教育委員会学校教育課
東円寺跡93-2区　プール新設　　教育委員会学校教育課
東円寺跡94-1区　流域貯留浸透施設工事　熊取町事業部土木課

2　現地における各調査を行った担当者は以下の通りである。

東円寺跡90-4区　有井　宏子氏　大阪府教育委員会
東円寺跡91-4区　阿部　　真　　熊取町教育委員会
東円寺跡93-2区　同　　上
東円寺跡94-1区　前川　　淳　　熊取町教育委員会

3　本書における標高はＴ．Ｐ．（東京湾平均潮位）を用いた。

4　土色は、小山正忠・竹原秀雄編「新版標準土色帖」第10版（農林水産省農林技術協議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修1990年度版）を援用した。

5　調査の実施にあたり、調査対象地である熊取町立中央小学校をはじめ関係者各位から多大なご協力・ご援助を得た。また本書の執筆に際して、藁科哲男氏（京都大学原子炉実験所）・嶋谷和彦氏・近藤康司氏（以上両氏　堺市埋蔵文化財センター）・中岡　勝氏（泉佐野市教育委員会）・阿部　真氏（熊取町教育委員会）から有益な御教示を賜った。記して感謝を表します。

6　調査・整理作業にあたっては、以下の者の参加を得た。

調　査　員　　阪口雅美・関井澄子・山本恵子
調査補助員　　桑原良治・武田　徹・田中小夜・水葉　希・南谷克実・吉田知秋・和田志穂

7　本書の執筆・編集は前川　淳が行った。

目　　次

第１章　地理的・歴史的環境
第１節　地理的環境……1
第２節　歴史的環境……1
第３節　東円寺跡について……2
第４節　文献にみえる東円寺……2
第５節　その他の資料から……5

第２章　調査の概要
第１節　東円寺跡90-4区……7
第２節　東円寺跡91-4区……8
第３節　東円寺跡93-2区……10
第４節　東円寺跡94-1区……27

第３章　まとめ
第１節　既往の調査より……52
第２節　今回の調査より……55

挿　図　目　次

第１図　熊取町の位置
第２図　東円寺周辺の小字名分布図
第３図　熊取町における遺跡分布図
第４図　調査区位置図
第５図　東円寺跡90-4区調査区壁面土層図
第６図　東円寺跡91-4区調査区平面図・壁面土層図
第７図　東円寺跡91-4区出土遺物
第８図　東円寺跡93-2区調査区壁面土層図
第９図　東円寺跡93-2区遺構平面図
第10図　東円寺跡93-2区近世面遺構断面図
第11図　東円寺跡93-2区中世面遺構断面図
第12図　東円寺跡93-2区中世以前面以降断面図
第13図　東円寺跡93-2区出土遺物
第14図　東円寺跡94-1区調査区位置図

第15図　東円寺跡94-1区調査区Ａ平面図・壁面土層図
第16図　東円寺跡94-1区調査区Ｂ１平面図
第17図　東円寺跡94-1区調査区Ｂ・Ｂ２壁面土層図
第18図　東円寺跡94-1区調査区Ｂ・Ｂ２柱穴断面図・状況図
第19図　東円寺跡94-1区調査区Ｂ２平面図
第20図　東円寺軒丸瓦
第21図　東円寺跡94-1区調査区Ｃ平面図・壁面土層図
第22図　東円寺跡94-1区出土遺物
第23図　東円寺周辺における既往調査遺構平面図
表１　サヌカイト原材産地分析表
表２　既往調査における掘立柱建物一覧

図　版　目　次

図版第１　東円寺跡90-4区全景・土層
図版第２　東円寺跡91-4区全景・土層
図版第３　東円寺跡93-2区Ａ区全景・土層
図版第４　東円寺跡93-2区Ａ区土層
図版第５　東円寺跡93-2区Ｂ区全景・土層
図版第６　東円寺跡93-2区トレンチ１全景・土層
図版第７　東円寺跡93-2区遺構
図版第８　東円寺跡93-2区遺構
図版第９　東円寺跡94-1区Ａ区・Ｃ区全景
図版第10　東円寺跡94-1区Ｂ１区・Ｂ２区全景
図版第11　東円寺跡94-1区Ａ区土層・遺構
図版第12　東円寺跡94-1区Ｂ区土層
図版第13　東円寺跡94-1区Ｂ区・Ｃ区土層
図版第14　東円寺跡94-1区遺構
図版第15　東円寺跡94-1区遺構
図版第16　東円寺跡94-1区遺構
図版第17　東円寺跡出土遺物
図版第18　東円寺跡出土遺物
図版第19　東円寺跡出土遺物
図版第20　東円寺跡出土遺物
図版第21　東円寺跡出土遺物

第１章　地理的歴史的環境

第１節　地理的環境

熊取町は大阪府泉南地域のほぼ中央部に位置し、東を貝塚市、他の三方を泉佐野市に囲まれた町である。町域は東西約4.8km・南北約7.8kmと南北に長い木の葉形を呈しており、約17平方kmの町面積を有している。（挿１）

地形についてみると、町南部は泉州地域の基本山地となる和泉山地が大部分を占め、北部は和泉山地から派生する和泉丘陵とその縁辺部に発達する段丘部が面積を占めている。面積比では山地・丘陵部が町総面積の３分の２を占める。

河川は見出川・大井出川・住吉川・雨山川・和田川が南部の山間部を水源として北部に向かって流下し、さらに泉佐野市域を流下して大阪湾に注ぎ込んでいる。

東円寺跡は大井出川が和田川と合流し住吉川となる付近一帯に形成され低位段丘面の右岸側に位置する。

第２節　歴史的環境

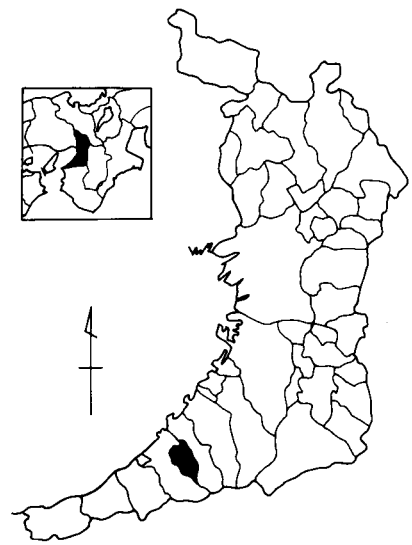
町内の遺跡は現在38ヶ所を数えるが、これらの多くは町北半分にひろがる段丘部・洪積台地上に立地している。（挿３）

縄文時代については町南部の成合寺遺跡から石鏃等の石器類が出土しているが遺構・土器類が発見しておらず詳細は不明である。また近年の東円寺跡93-3区の調査の際には縄文時代早期の石鏃が検出され、さらに今回の東円寺跡93-2区でもやはり縄文時代早期の石鏃数点を検出している。いずれも遺構等を伴ったものではないが、住吉川流域の低位段丘上に位置するＪＲ熊取駅付近には大久保Ｂ・Ｄ・Ｅ遺跡があり、主に弥生時代末期頃の遺物を多く検出している。特に大久保Ｅ遺跡の調査では、庄内併行期の遺物が流路内から大量に出土しており、近辺に同時期の集落の存在が推測される。

本町における古墳時代の様相は現在のところも不明確である。古墳参考地として五門北古墳・五門古墳が挙げられているが、既に消滅しており詳細は不明である。

奈良時代になると東円寺跡で掘立柱建物群が検出されていることから、東円寺跡の位置する低位段丘面の開発がこの頃から部分的に開始されたことが窺われる。

中世になると町域の段丘・丘陵面上の土地利用が本格的に進むようになる。東円寺跡では、平安時代末頃に「東円寺」が建立されるとこれを中心として集落が発展をみるようになることが近年の発掘から判明している。また大浦中世墓地は15世紀を中心とする共同墓地跡であり、この時期の五輪塔や石仏等の遺物が出土している。



第１図　熊取町の位置

近世に関しては明確な遺構等を検出した例に乏しいが、多くの場合撹乱掘削等にみられる瓦礫の中に多数の近世代の瓦片・陶磁器片が混入しており、この時期においても引き続いてかなりの規模の営みが維持されたものと推察される。また土層には必ず近世の耕作土が観察されることから、開発が盛んに行われたことがわかる。特に近年行われた中家住宅での調査では、削平に遭いながらも遺存した埋甕や陶磁器を検出しており今後の成果に期待が集まっている。

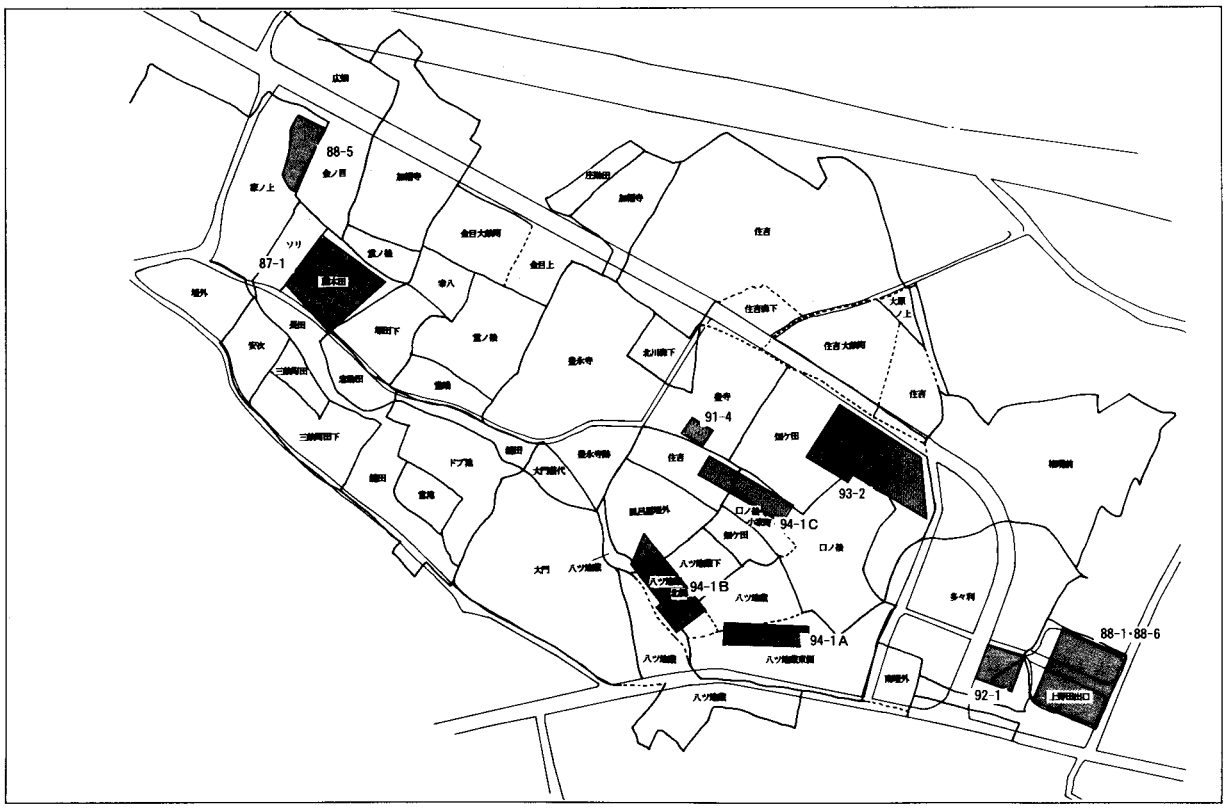
第３節　東円寺跡について

東円寺跡は熊取町の北東部、大字野田に所在し、現熊取町役場及び公民館所在地の付近一帯に広がる、奈良時代から中世にかけての寺院跡および集落遺跡である。(挿３)

地形的には大井出川（住吉川）の右岸域に形成される低位段丘上に位置している。

遺跡名における「東円寺」は、文献から元来「東曜寺」と称したことが窺え、近年の発掘調査により出土した和泉型瓦器碗や軒丸・軒平瓦等から平安時代末頃に建立された寺院であると考えられている。

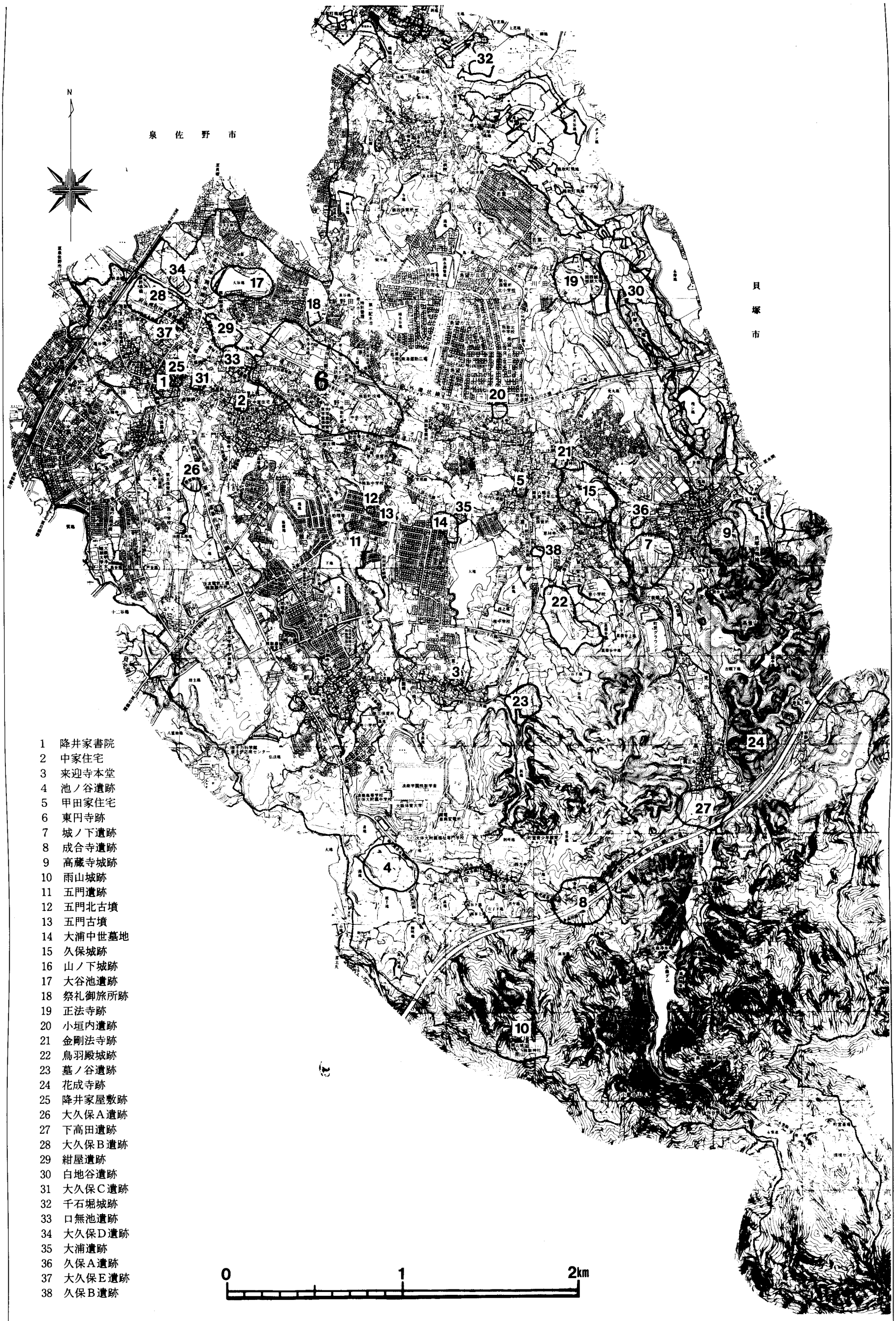
熊取町役場の正面地域には「トヨジ」「東永寺」「大門」「堂ノ後」の小字名が伝えられており、隣接地の調査では寺院のものと思われる多くの瓦片が出土しているため所在地として確実であるが、寺院そのものを表わす遺構は検出されておらず、伽藍配置等については全く不明である。（挿２）



第２図　東円寺に関する小字名

第４節　文献にみえる東円寺

文献における初見は、1549（天文14）年に記述されたとされる「葛城峯中記」であり、「次野田山本尊毘沙門同五大尊薬師弁財天天神二社鎮守也」の記述が見え、文禄・天正期に完全に消失したという以前



1　降井家書院
2　中家住宅
3　来迎寺本堂
4　池ノ谷遺跡
5　甲田家住宅
6　東円寺跡
7　城ノ下遺跡
8　成合寺遺跡
9　高蔵寺城跡
10　雨山城跡
11　五門遺跡
12　五門北古墳
13　五門古墳
14　大浦中世墓地
15　久保城跡
16　山ノ下城跡
17　大谷池遺跡
18　祭礼御旅所跡
19　正法寺跡
20　小垣内遺跡
21　金剛法寺跡
22　鳥羽殿城跡
23　墓ノ谷遺跡
24　花成寺跡
25　降井家屋敷跡
26　大久保Ａ遺跡
27　下高田遺跡
28　大久保Ｂ遺跡
29　紺屋遺跡
30　白地谷遺跡
31　大久保Ｃ遺跡
32　千石堀城跡
33　口無池遺跡
34　大久保Ｄ遺跡
35　大浦遺跡
36　久保Ａ遺跡
37　大久保Ｅ遺跡
38　久保Ｂ遺跡

第３図　熊取町における遺跡分布図

の様子を伝えている。

また江戸時代末期に当熊取町内の大庄屋の出身である中盛彬が編述したとされる「先代考拠略」には「この野田宮ハもと野田山東曜寺といふ。上ミのた村の西に古跡有り（今も東円寺住持毎年正月四日、此処ニテ法式ヲ行フ、）今の登り立テ・大門・善福寺（東曜寺の寺中也、俗あやまりてセツプク田ト云、）・まいのう田・たらり田（ともに舞台の跡也、）・風呂屋垣外（浴室の跡）・やけん地蔵（東曜寺焼亡の時残りし堂跡）・高野垣内（高野山より僧侶来り居し寮の跡といふ、）是ら皆田地の字となれり、東曜寺古跡の左右に北川の森・田中の森なと小キ古跡の林七ツひしと並べり、いかさま大境内なりしと見ゆ、峯中記にいふ、野田山本尊毘沙門・五大尊・薬師如来也、弁財天・天神二坐鎮守也（今考えるに、この仏今は一体もなし、薬師も毘沙門もあれと、是ハ三代前の住持尊海法印あらたに納めたりし仏なり、）又もとハ甚大社にて寺ハその別当なりしという、此旧地、永禄の乱に社領をうしなひ、天正の乱に回録して跡かたなくなれり、この時、村民ら神体・仏像を負て逃レ、後に今の所（東円寺）に社祠を営ミて鎮坐し、小庵を建て別当とす、寺号を東円寺とあらたむ（但し元禄の頃迄ハ東曜寺の寺号人々口唱に残りありしゆへに、東円寺をもとやうじ～と申せし也、故に寺社改帳にも豊寺と書しあり、元禄の改帳に初て東円寺と定まり、高埜五の室谷祥厳院を本寺と頼申段記しあり、されとも今ハ御室御末寺也、是ハ尊海の代に如此せし也、）この内に薬師如来ハ大久保村正宗法禅寺に移す、」と記載されている。この記述に従えば、東円寺は江戸時代初期に再興された比較的小規模の寺であり、小庵程度のものであったが、三世尊海の時に新たに薬師如来等を備えて整備したようである。

江戸時代以前の東円寺は「東曜寺」といい、その境内は東円寺よりもかなり広大で、寺院の中心の位置も若干異なっていたようで、毘沙門・五大尊・薬師如来を本尊として、弁財天・天神二座を祭る社と併存していたが、永禄から天正にかけて壊滅したとされる。既に多くが田地となり字名として旧寺院の構造物が知られていたようである。この「東曜寺」こそこれまでの発掘調査で発見された複弁蓮華文軒丸瓦を備えた平安末期頃に起源をもつと予想される寺院である。

さらに「東曜寺」壊滅後の東円寺については、1691（元禄四）年の「神社境内帳」に「野田村　一、真言宗　嵯峨仁和寺末　東円寺　開基年号不知、寛政八辰年八月廿八日入院　詮明高野山祥厳院末寺之処右遠嶋被仰付候ニ付元文七年ヨリ仁和寺末ト成ル富時永代常燈料料寄附有之石油料銀五貫目富谷十五ヶ村江預置候段由有之尤天明五年巳年六月廿日　教順住職之時也、除地千九百八十四坪」等と記され、その後明治維新の排仏毀釈によって寺は廃絶し、本尊や仏具は貝塚市地蔵堂の正福寺に梵鐘は熊取町大字五門の慈照寺に移されたとされている。

第５節　その他の資料から

東円寺が建立されたと思われる平安時代末期から鎌倉時代初期にかけての熊取町内の様子を直接記した史料は皆無である。

「日本後記」巻十二には、804（延暦23）年桓武天皇の和泉国行幸における熊取野での遊猟の記事が存在する。これが熊取の最も古い時代を示す記述とされているが、おそらくこれ以後も熊取は狩猟に適した未開の原野・丘陵地によって占められていたと思われる。しかしその約400年後の1234年を示す「九条家文書」では熊取に荘園があったことが記され、以後熊取の名は図中に頻見する。いずれも荘園領主の

名は不明で、どの様な形で開発されていったのかは推測の域を出ない。

この時代の熊取の様子を知る手掛かりとして、熊取に隣接する現泉佐野市に中世より存在した日根野庄とそれに関連する多くの資料は重要であると思われる。

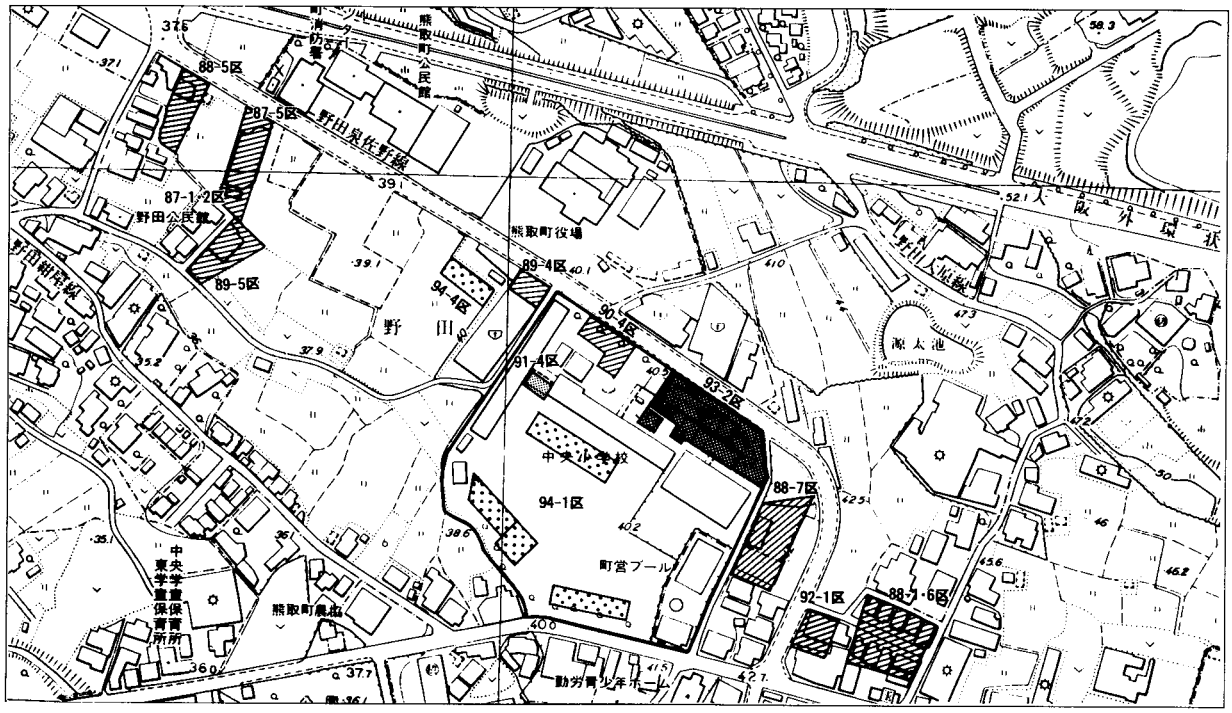
日根野一帯は平安時代から鎌倉時代に至る時期に盛んに荒野開発を行っていたが、開発の負担者は在地豪族と称された日根野一族をはじめとして、所謂権門勢家と呼ばれる中央貴族や社寺であった。特に地理的にも高野山の和泉地方への進出は当然とも思われる。これらの勢力が日根野一帯に造営した神社・仏閣も遺されており、日根野氏の氏神としての大井関神社、高野山支配の禅興寺、さらに在地豪族であったと思われる源一族の氏寺としての無辺光院等がある。

文献の研究によって、一帯は中世以前から既に高野山および在地寺院の禅興寺によって開発されていたことが窺われ、鎌倉初期に九条家によってさらに荘園として大いに開発されていったのである。

また文献によると、1234（文暦元）年に日根野庄内に檀波羅密寺が存在していたことが確実であるが、この寺院は上述した様な時代背景の中、おそらく平安時代末期頃に建立されたと推定されている。残念ながら誰がどの様な目的で造営したのかは全く不明であり、地方寺院として荘園機構の一端を担っていたことは予想されるが、史料等から窺うことはできない。また九条家文書の研究から、同寺院は寺領田を所有していたことが推測されている。またさらに特筆すべき事柄として、檀波羅密寺が水利権の関係から池の築造に大きく関与していたことが確実である。

檀波羅密寺については未だ殆どが不明のままであり、その大まかな流れを掴む程度であるが、この様な地方寺院の性格とその時代背景は、隣地の熊取における東円寺の場合においても大いに対照されるべきところであろう。

第２章　調査の概要



第４図　調査区位置図

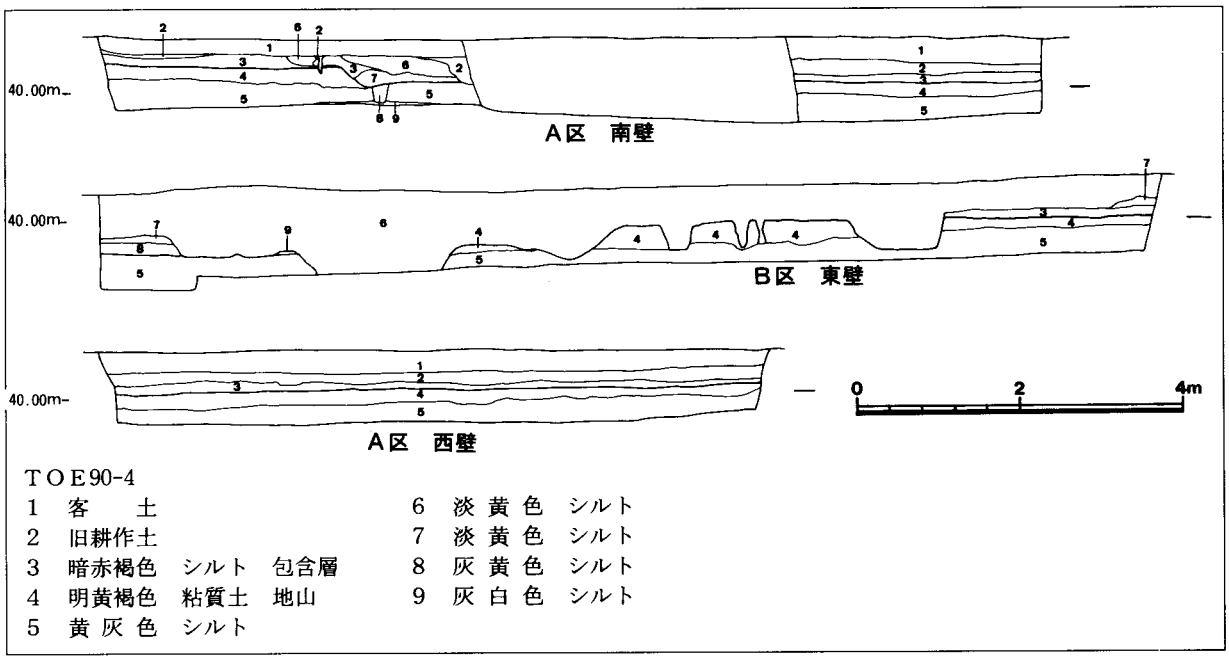
第１節　東円寺跡90-4区

調査の経過

この調査は熊取町立中央小学校の給食調理室の改築工事に伴うもので、大阪府教育委員会文化財保護課調査第１係有井宏子氏を調査主任として、平成３年２月27日より同年３月４日の間、機械および人力掘削を行った。

調査区はおよそ南北22m、東西12mの長方形であるが、その中央部分には下水溝があるため、便宜上北をＢ区、南をＡ区に分割した。

基本層序



第５図　東円寺跡90-4区調査区壁面土層図

北側のＢ区は予想に反して撹乱状況が大きく、地山と思える黄褐色砂礫土④を小学校の造成時の旧整地土が直接削平しているのが観察された。

南側のＡ区は、小学校造成の旧整地土①が旧耕作土②を削平しており、この下に近世以降の耕作土と思われる包含層③が存在する。またＡ区南壁の観察では、この耕作土③が地山面を著しく削平していることがわかる。この様な状況は、付近における他の調査においても同様であり、近世代に行われた耕作によって、それまでの土層が殆ど削平され失われていることを示している。またさらに小学校の数度にわたる造成工事によって、この場所の大部分の土層が削平され失われている状況である。

遺構

ＳＤ０１

調査区の中央部には南北方向に幅およそ1.8mの溝ＳＤ０１が検出された。断面は穏やかなＶ字状を呈し、底部における比高差から南から北に向って流れをもっていたと思われ、埋土は付近一帯に広がる近世の耕作土とほぼ同じものである。状況からこれは近世以後の耕作に関して掘削されたものに違いない

が、その詳細を明らかにできる様な資料の検出には至っていない。

遺物

今回の調査では特筆すべき遺物の検出はなく、近世から近代にかけての瓦片・陶磁器片を検出した。

90-4区小結

残念ながらこの90-4区の調査では期待された程の成果は挙がらなかった。状況から付近が近世以降の耕地開発や造成工事によって、大きく削平されたことがわかった。

第２節　東円寺跡91-4区

調査の経過

この調査は、平成３年７月15日から同年８月８日までの12日間、熊取町立中央小学校の北西部分において下足室の新設工事に先立って行われたもので、工事主体は熊取町教育委員会学校教育課である。調査は熊取町教育委員会町史編さん室技師阿部　真を主任として、機械および人力掘削によって行われた。申請面積は16,868㎡、調査面積は128㎡である。

基本層序

上層から校舎等学校造成に関する客土①、近代の耕作土②があって、その下に耕作土④とその床土⑤が概ね海抜T.P.40.1mの高さで調査区全体に一様に広がっている。また耕作土④のさらに下には、厚さ約10㎝程度の中世遺物を含む黄褐色粘質土の包含層⑥が存在する。この包含層が形成された背景等その性格に関しては、土質土色の具合から、下位の地山である黄褐色粘質土⑦を多少含んでいるように観察される等、耕作土そのものとは思い難い。

遺構

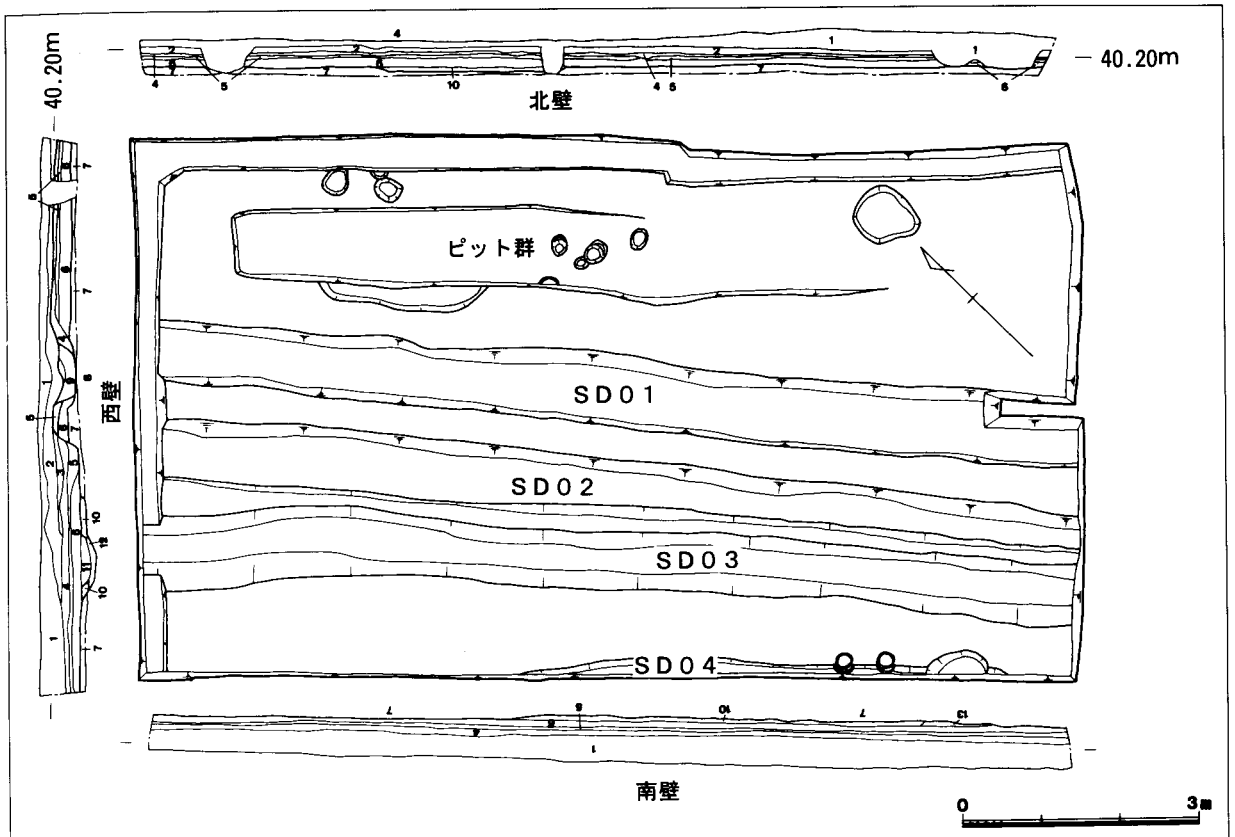
ＳＤ０１

調査区のほぼ中央部に検出され、壁面に見られるその断面からは、近世以降につくられた水田に関連した溝跡と思われる。溝底部におけるレベル高の分析から、南東から北西方向に穏やかな流れをもっていたものと思われる。幅は約1.3m、深さは0.35m、断面はやや開いたU字形をみせている。

遺物は19世紀から20世紀の磁器ばかりが含まれる。

ＳＤ０２

幅約0.8㎝、深さ約0.2mを測る。平面からはＳＤ０１と同種の溝状で、東西方向を示すものと思われるが、溝であったことを示す埋土は無く、西壁面で観る限りＳＤ０１の南隣にあって一段低くなっている状況とも思われる。この遺構内に堆積するのは付近一帯に観察される耕作土と床土である。



1　客土および撹乱
2　耕作土
3　耕作土
4　耕作土
5　床土

6	7.5YR	4/3	褐色	砂質土
7	7.5YR	5/8	明褐色	粘質土（地山）
8	10GY	6/1	緑灰色	砂質土（SD01埋土）
9	10BG	4/1	暗青灰色	砂質土（SD01埋土）
10	10YR	5/3	にぶい黄褐色	砂質土
11	10YR	4/3	にぶい黄橙色	砂質土
12	10GY	7/1	明緑灰色	粘質土（SD03埋土）
13	10YR	7/2	にぶい黄橙色	砂質土（SK07埋土）

第6図　東円寺跡91-4区調査区平面図・壁面土層図

SD03

調査区の南側にあり、SD01、02と同方向である。最大幅は約1.1m、深さは約0.25mを測り、断面は緩やかなU字状をみせる。埋土は三層からなり、埋土中から瓦片や土師器片が出土している。

また近世の包含層と思われる灰黄褐色砂質土層がこの遺構の上面に存在している。遺物等を考え合わせて、この遺構もまた近世に存在したものと思われる。

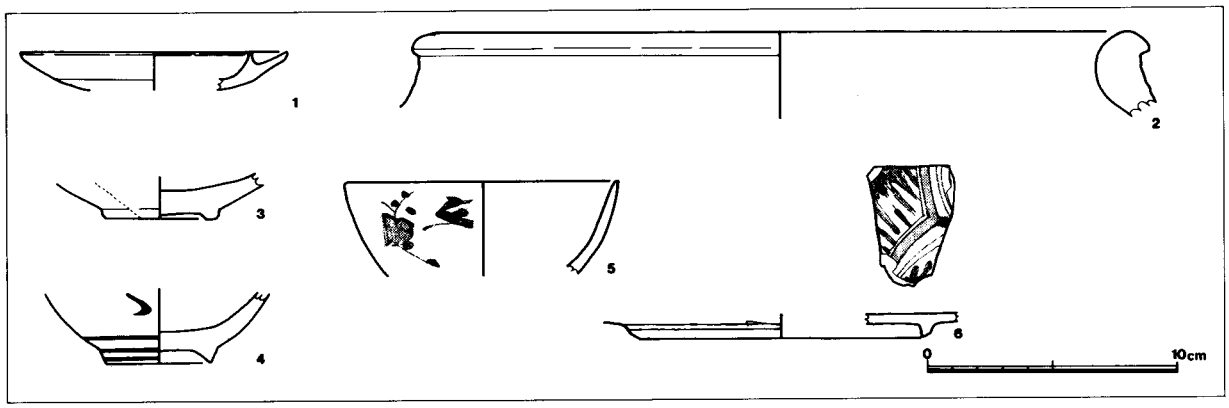
SD04

調査区の南壁やその付近において検出され、検出長7m、深さ約6mを測る。主軸方向は上述の溝群とほぼ同じである。埋土はSD03のものと共通する黄橙色砂質土であり、SD03同様近世のものと思われる。

その他の遺構

調査区の北壁に面する部分に径およそ20～30cmの小ピット群を検出している。いずれも深さはなく、柱痕等の特徴もみられないために、性格等を類推するには及んでいない。

ＴＯＥ91-4区の遺物



第７図　東円寺跡91-4区出土遺物

東円寺跡91-4区の遺物

ここに挙げたものはいずれも包含層から出土したもので、１は唐津灯明皿、２は瓦質の甕の口縁部、３は唐津碗で見込みに砂目痕があり17世紀中頃のもの。４、５、は肥前磁器染付（伊万里）であり、５は特にくらわんかてと呼ばれるもので、４、５には梅樹文がみえる。ともに18世紀後半頃と思われる。６は中国製青花皿で17世紀初頃のものであろう。

東円寺跡91-4区小結

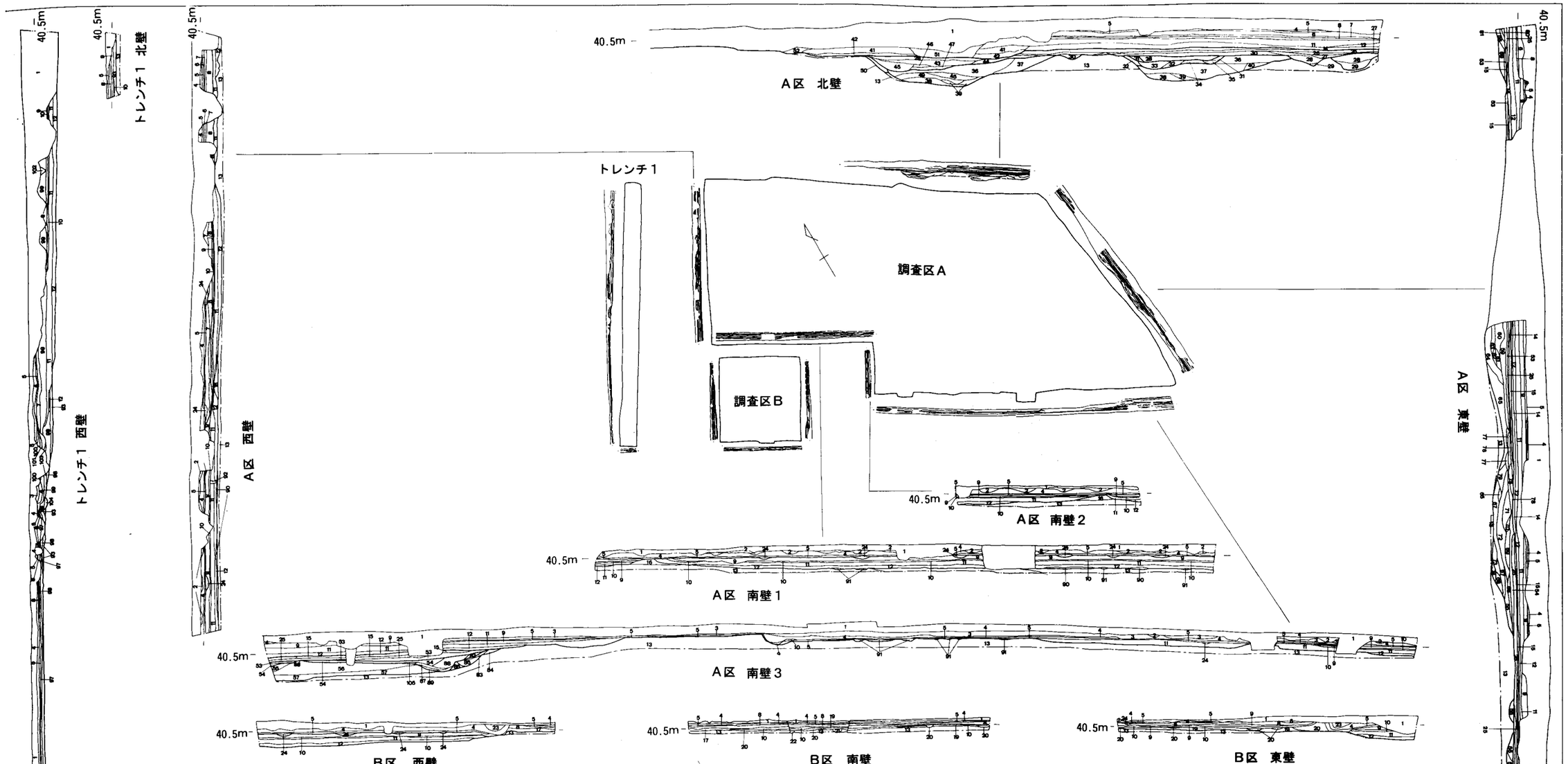
調査区の壁面に観られる最下層の包含層には、主に17世紀以降の陶磁器を含んでいるため、この場所は17世紀代頃に一端大規模な耕作のための整地が行われたのではないかと推定される。検出された遺構等もおそらくすべて近世に入ってからのものと思われる。ここでは、この付近で17世紀に大規模な開発が行われたのではないかという推定が可能なことを調査結果としたい。

第３節　東円寺跡93-2区

調査の経過

今回の調査は東円寺跡内の熊取町大字野田2161他11筆の町立中央小学校内のプール及び管理棟建設工事に伴う発掘調査である。本調査に先立って行われた試掘調査は平成５年５月20日から同６月11日までの期間に実施し、およそ２×30mの、トレンチ４ヶ所を設定して機械掘削による調査をした結果、瓦器片や土師器片等の遺物を含む包含層、土壙や溝等の遺構を検出したために、本調査を実施することを決定した。

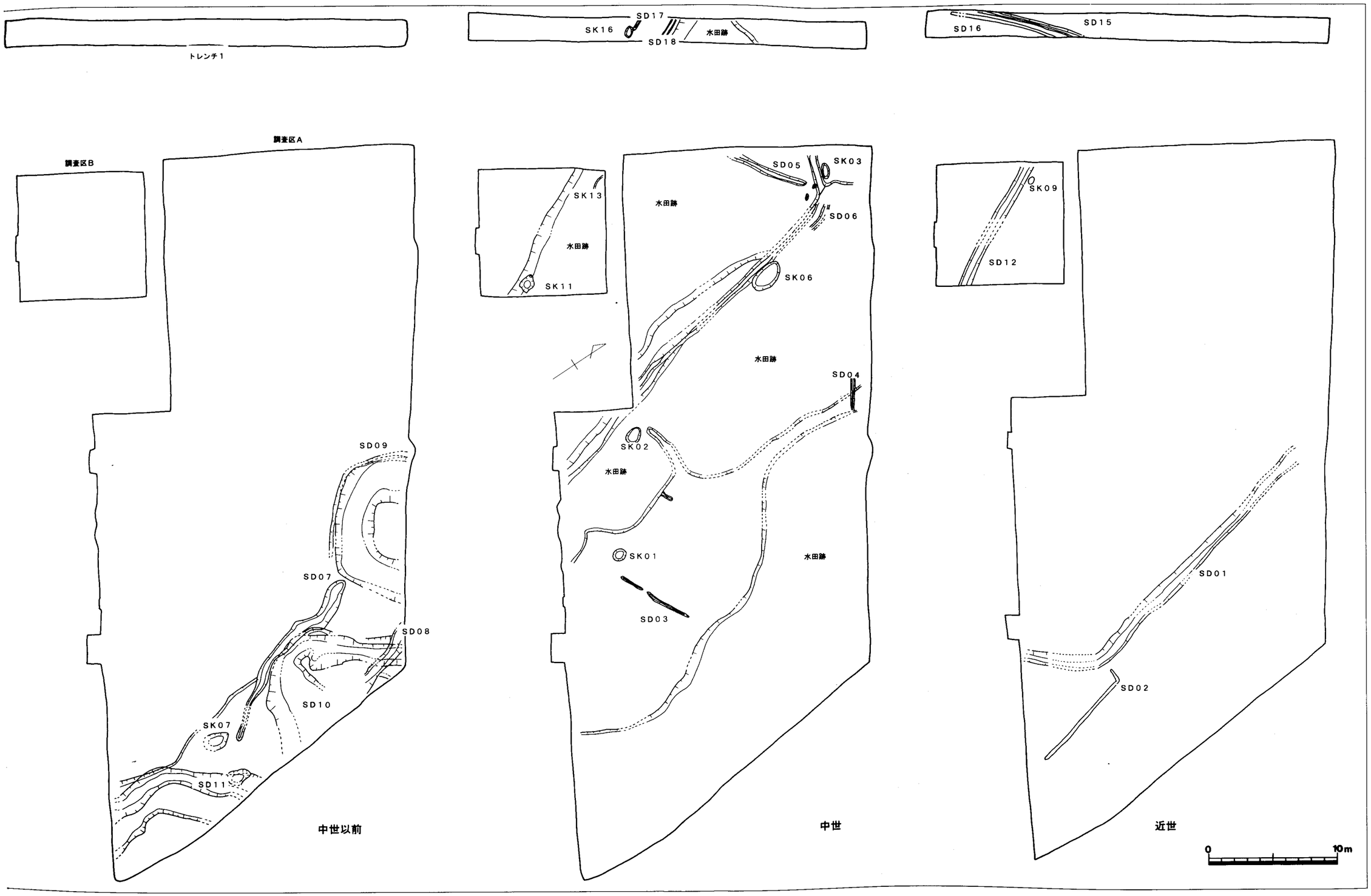
本調査は熊取町教育委員会町史編さん室　阿部　真・前川　淳を担当者として、平成５年７月６日か



TOE93-2

1	客土				
2	10YR	5/6	黄褐色	弱粘質土	客土
3	5BG	6/1	青灰色	砂質土	耕作土
4	10YR	5/1	褐灰色	砂質土	耕作土
5	7.5YR	5/6	明褐色	粘質土	床土
6	2.5Y	6/2	灰黄色	砂質土	耕作土
7	7.5Y	5/1	灰色	砂質土	耕作土
8	2.5Y	6/6	明黄褐色	砂質土	整地土
9	2.5Y	6/2	灰黄色	砂質土	耕作土　中世包含層
10	10YR	5/6	黄褐色	粘質土	床土
11	2.5Y	5/2	暗灰黄色	砂質土	耕作土　中世包含層
12	2.5Y	6/3	にぶい黄色	砂質土	耕作土　中世包含層
13	10YR	6/8	明黄褐色	粘質土	地山
14	2.5Y	5/2	暗黄灰色	砂質土	中世包含層
15	10YR	4/1	褐灰色	粘質土	
16	2.5Y	6/4	にぶい黄色	砂質土	畦畔
17	2.5Y	7/2	灰黄色	砂質土	耕作土　包含層
18	10YR	5/2	灰黄褐色	砂質土	杭痕
19	10YR	6/6	明黄褐色	シルト	
20	10YR	6/1	褐灰色	砂質土	中世包含層
21	7.5YR	6/3	にぶい褐色	シルト	
22	10YR	6/2	灰黄褐色	砂質土	ＳＸ０１埋土
23	10Y	4/1	灰色	砂質土	耕作土
24	10YR	6/4	にぶい黄橙色	粘質土	
25	2.5Y	5/1	黄灰色	砂質土	
26	2.5Y	4/2	暗黄灰色	粘質土	
27	2.5Y	5/2	暗灰黄色	砂	
28	10YR	5/6	黄褐色	粘質土	
29	10BG	4/1	暗青灰色	粘質土	
30	2.5Y	5/3	黄褐色	シルト	
31	5Y	6/3	オリーブ黄色	砂	
32	2.5Y	4/3	オリーブ黄色	砂質土	
33	2.5Y	4/4	オリーブ褐色	砂質土	
34	2.5Y	5/3	黄褐色	粘質土	
35	2.5Y	5/1	黄灰色	シルト	
36	10YR	7/4	にぶい黄橙色	シルト	
37	2.5Y	7/2	灰黄色	シルト	
38	5BG	6/1	青灰色	礫	
39	5BG	6/1	青灰色	砂	
40	10YR	7/6	明黄褐色	シルト	
41	5Y	5/1	灰色	砂質土	
42	10YR	5/3	にぶい黄褐色	砂質土	
43	2.5Y	4/3	オリーブ褐色	粘質土	
44	2.5Y	6/3	にぶい黄色	シルト	
45	10Y	5/1	灰色	砂	
46	7.5Y	5/1	灰色	砂	
47	10Y	4/1	灰色	砂	
48	10G	6/1	緑灰色	砂	
49	5BG	6/1	青灰色	砂	
50	10YR	6/6	明黄褐色	粘質土	
51	2.5Y	6/8	明黄褐色	粘質土	
52	N	5/	灰色	砂質土	耕作土
53	2.5Y	5/2	暗黄灰色	シルト	
54	10YR	4/1	褐灰色	シルト	
55	5Y	6/1	灰色	砂	
56	5Y	7/3	浅黄色	シルト	
57	2.5GY	6/1	オリーブ灰色	砂	
58	5Y	7/1	灰色	砂	
59	2.5Y	5/2	暗黄灰色	砂	
60	10GY	7/1	明緑灰色	砂	
61	2.5Y	7/6	明黄褐色	シルト	
62	5Y	8/1	灰白色	砂	
63	7.5Y	7/1	灰白色	砂	
64	10GY	8/1	明緑灰色	砂	
65	2.5Y	7/6	明黄褐色	シルト	
66	10YR	4/2	灰黄褐色	シルト	
67	5Y	8/1	灰白色	砂	
68	7.5Y	8/1	灰白色	砂	
69	10YR	5/6	黄褐色	シルト	
70	10YR	4/1	褐灰色	砂質土	
71	10YR	4/3	にぶい黄褐色	砂	
72	2.5Y	6/2	灰黄色	砂	
73	5Y	6/1	灰色	砂	
74	7.5Y	8/1	灰白色	砂	
75	2.5Y	4/2	暗灰黄色	砂質土	
76	2.5Y	4/2	暗灰黄色	粘質土	
77	5Y	6/2	灰オリーブ色	砂	
78	10YR	6/6	明黄褐色	砂質土	
79	5B	7/1	明青灰色	砂	
80	10YR	5/1	褐灰色	砂質土	
81	2.5Y	6/3	にぶい黄色	シルト	
82	10YR	3/1	黒褐色	粘質土	
83	2.5Y	6/3	にぶい黄色	粘質土	
84	10YR	6/6	明黄褐色	粘質土	
85	5Y	8/3	淡黄色	シルト	
86	7.5Y	7/1	灰白色	砂	
87	N	3/	暗灰色	粘土	
88	5Y	7/2	灰白色	シルト	
89	10Y	7/1	灰白色	砂	
90	10YR	5/8	黄褐色	シルト	
91	2.5Y	6/3	にぶい黄色	砂質土	スキ痕
92	10YR	5/2	灰黄褐色	砂質土	杭痕
93	10YR	5/4	にぶい黄褐色	砂質土	マンガン斑あり
94	2.5Y	7/1	灰白色	砂質土	耕作土
95	7.5YR	5/4	にぶい褐色	砂質土	床土
96	2.5Y	6/2	灰黄色	砂質土	ＳＤ１８埋土
97	10YR	7/3	にぶい黄橙色	シルト	マンガン斑あり
98	10YR	6/3	にぶい黄橙色	シルト	マンガン斑あり　中世包含層
99	10YR	5/8	黄褐色	シルト	マンガン斑あり
100	2.5Y	7/2	灰黄色	灰黄色	
101	2.5Y	7/3	浅黄色	シルト	マンガン斑あり
102	10YR	6/3	にぶい黄橙色	砂質土	
103	10YR	6/4	にぶい黄橙色	シルト	
104	2.5Y	7/2	灰黄色	シルト	
105	10YR	4/1	褐灰色	シルト	

第８図　東円寺跡93-2区調査区壁面土層図



第９図　東円寺跡93-2区遺溝平面図

ら同10月25日の間に実施したもので、発掘調査総面積は1238㎡、調査進行の都合上Ａ区とＢ区に分けて行った。

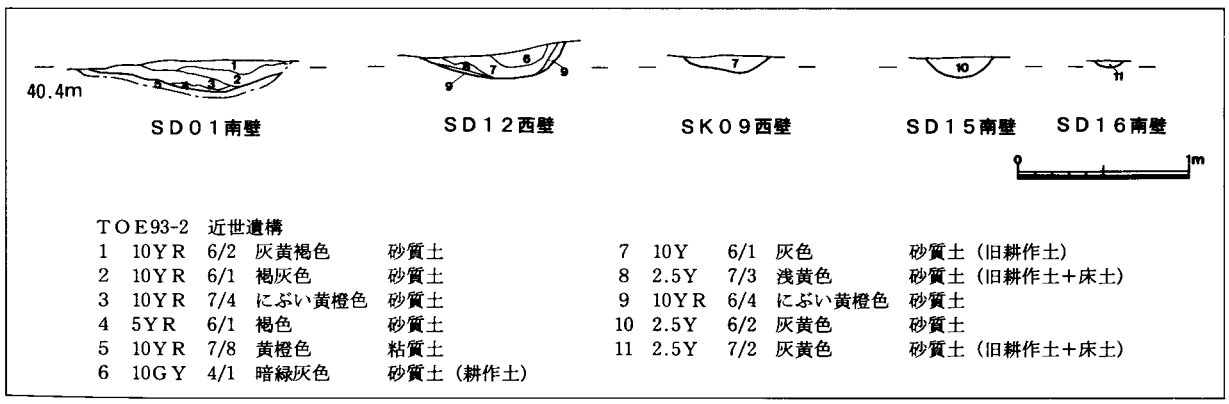
基本層序

基本的な層序は調査区とトレンチ１ともに共通した様相を示している。上から小学校の校舎と付随する施設のための造成に伴う撹乱および客土が厚く存在し、その下に上層によって削平されている近世以後の耕作土④⑤がみられて、以下に中世の耕作土が二重⑨⑪、部分的には三重⑨⑪⑫に存在しており、これらの中に中世に限られる遺物が含まれていた。北東部分は後述するように中世層以下に自然流路の埋土が幾重にもみられる。

中世の耕作土に関して、後述するように地山面上に検出をみた畦畔による水田遺構を形成するのは、灰黄色砂質土⑨、およびその床土の黄褐色粘質土⑩、さらにその直下の暗灰黄色砂質土⑪が存在し、最下層ににぶい黄色砂質土⑫がある。

近世遺構面

調査区Ａ、調査区Ｂ、トレンチ１ともに近世以降の遺構を検出している。いずれもほぼ同規模の溝状であり、その方向は後述する中世の水田遺構とほぼ一致するところからやはり水田耕作に関係するものである可能性が高い。しかし残念ながらこの面では水田を形成する畦畔の様な遺構を検出することが出来なかった。また調査地点付近における近世以後の耕作に関わる遺構を検出した例がなく、今後の調査では大きな課題になると思える。



第10図　東円寺跡93-2区近世面遺構断面図

ＳＤ０１

Ａ調査区のおよそ中心付近に検出され、南北方向に走って南端は西側に屈曲する。幅は約1.2m、深さ20cm程度で断面はＶ字状を呈する。埋土は主に２層で上層が灰色砂質土、下層が黄色砂質土である。埋土に遺物の混入はなかった。(図7-3・挿9･10)

ＳＤ１２（Ｂ調査区）

Ｂ調査区内を南北方向に縦断している。幅約1.0m、深さ15cmでＶ字状の断面を見せる。(挿9･10)

ＳＤ１５・１６（トレンチ1）

今回の93-2区調査地点の最西端には試掘調査の際のトレンチ１がそのまま位置しているが、このおよそ南半分側には、ＳＤ１５とＳＤ１６の二本の溝が平行してN50Eの方向に走っている。ＳＤ１５は幅平均約0.35m、深さ12cmで、ＳＤ１６は幅約20cm、深さ４cm程度を測る。埋土はいずれも灰黄色砂質土で、これは一帯に広がる近世の作土と床土が混入したものと思われる。また方向は前のＢ調査区のＳＤ１２や、Ａ調査区のＳＤ０１とほぼ直交することからみて、ＳＤ１２から派生するように造られた水路ではないかと思われる。遺物はなく、この上面もかなりの削平をうけていることが観察される。

中世遺構面

水田遺構（水田跡）

水田遺構は調査区全般に灰褐色砂質土（包含層）と黄褐色粘質土の地山が削り出されて残存する畦畔の検出によって確認された。また床面を掘削排除することによって、畦畔と同方向の鋤溝もみられた。

畦畔はおおよそN20Wとそれに垂直の方向をもって調査区内で井形の構造を見せるが、畦畔によって区切られた各水田の大きさは一定していない。

また水田床面の上に築かれた旧耕作土にあたる土層は、僅かの弥生式土器にはじまり主に12世紀末から13世紀前半までの瓦器碗を中心とした遺物を含む黄褐色粘質土であり、一般にいうところの包含層になんら変わらない。ある種の包含層は、当調査区のように広い面積でその上面を検出すれば、水田遺構が出現する可能性が高いことを示している。

畦畔は主に中央と西側に検出されたが東半分には検出されなかった。

また調査区の北東部分にも遺物を含む同様の灰褐色砂質土層が広範に拡がっていたが、後述の様にこの部分は前代から自然流路が多く存在したらしく土色の変化等が著しい等の理由のため、関連の畦畔を検出することができなかったものと思える。

この水田遺構はその包含層としての存在と共に調査区外のさらに北側方向に拡がっていると思われ、そこに含まれる土器にはおよそ14世紀以降のものが含まれないことから、まさに14世紀頃に開発された水田ではなかったかと思われる。

水田内の検出面となった地山面上には無数の鋤溝が検出されていることも付け加えておく。その規模の小ささと遺存状況の悪さから正確に図示し得なかったことが残念である。（挿９）

また水田面のレベルはおよそ35.600mで、後述する校舎を隔てて南側に位置する94-1区の調査で検出された水田開発以前の12～13世紀頃の建物等が検出された遺構面のレベルはおよそ36.200mである。距離的に離れているために単純に比較できないが、93-2区の水田面のレベルは低く、水田が開かれる際には、それまで存在していた遺構等が削平されたものと思われる。推定に過ぎないがその際の削平はおよそ30cm程度の深さに及んだのではないかと思われる。

ＳＫ０１

Ａ調査区の中央南寄りにあって、径およそ１m、深さ約10cmの円形の土壙である。埋土は灰黄褐色粘質土①の一層で、遺物はなかった。その形状から、後述のＳＫ０２とほぼ同種の遺構と思われるが、詳

細は不明といわざるをえない。上層から掘り込まれた可能性がある。(挿9・11)

ＳＫ０２

Ａ調査区の中央やや南寄りにあって、長径1.27m、短径1.05m、深さ0.07mの楕円形の土壙である。埋土は暗黄灰色砂質土の一層である。遺物はなく詳細は明らかにできないが、或いは上層からの掘り込みかもしれない。

ＳＫ０３

Ａ調査区の北西端に、長径1.25m、短径0.05m、深さ0.06mを測る土壙を検出した。埋土はにぶい黄色砂質土⑤一層である。遺物として瓦器碗片１点と器種不明の土師質土器片１点が出土した。検出面から余りにも浅いことから、さらに上からの遺構と推定されるが、上面での検出時には確認されていない。

水田耕作時には概して水溜遺構と呼称される比較的大きな土壙が存在することが報告されているが、或いは上面における中世以後の水田に関わるものかもしれない。(挿9・11)

ＳＫ０６

長径2.75m、短径1.5m、深さ0.18mを測る大きな土壙である。断面形はやや底の開いたＵ字形を呈し、遺物は出土しなかった。詳細については全く不明であるが、その位置が前記畦畔を断ち切って存在するため、少なくとも先述の14世紀頃と思われる水田面のものではなく、それ以降に掘削されたもので、あるいは水田耕作における水溜遺構かもしれない。(図7-2・挿9)

ＳＤ０６

Ａ調査区の北西端部分において、中世水田内から検出され、確認長2.5m、幅は約0.4m、深さは0.13mを測る溝状である。検出された水田の畦畔とほぼ平行する状況から、水田に直接関わるものであると思われる。

ＳＫ１１（Ｂ調査区）

Ｂ調査区の中央東端で、長径1.2m、短径1.1m、深さ15cmの楕円形の土壙を検出した。埋土は灰色砂質土の一層であり、遺物はなかった。先述した水田遺構の最南端にあって、ちょうど水田の肩の部分にあるため、水田に関係するものではなく、上層から掘り込まれたものであろう。その規模と形状から先のＡ調査区におけるＳＫ０１やＳＫ０２と類似するものと思われる。

ＳＫ１３（Ｂ調査区）

Ｂ調査区の北端部で確認された楕円形の土壙で、Ｂ調査区の北壁によってその半分が遮られている状況である。深さは約５cmで検出され、埋土はにぶい黄褐色シルトの一層であり、遺物はなかった。状況から上記ＳＫ１１等とほぼ同様のものではないかと推測する。

ＳＫ１６（トレンチ１）

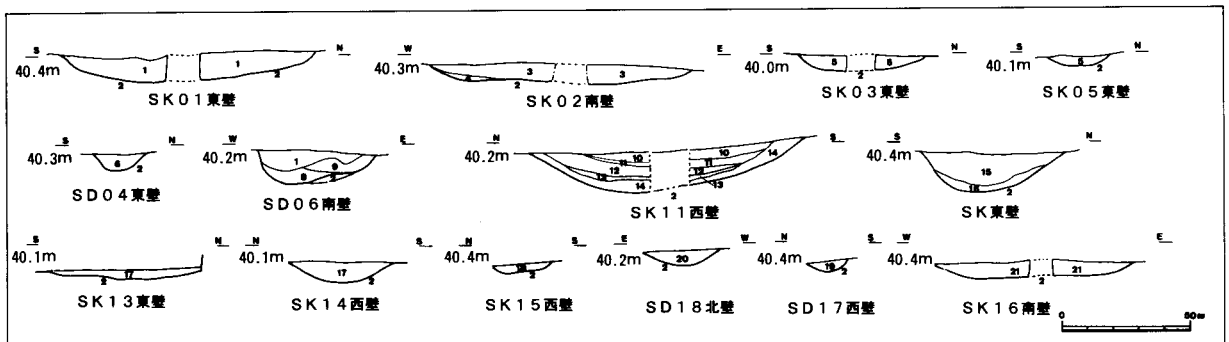
トレンチ１の中央部付近で前記ＳＤ１７に接して検出された長方形の土壙状をみせる。0.85×0.55mの大きさと、深さ約６cmを計測した。埋土はにぶい黄橙色シルトの一層であるが、底部に瓦片の出土をみた。おそらく僅かに低くなっていた場所に耕作土の最下層部が落ち込んでいる状況であると思われる。

ＳＤ１７（トレンチ１）

トレンチ１の中央部に検出された細い溝状の遺構で、幅約16cm、深さ約４cmを計測した。埋土はにぶい黄橙色のシルトで遺物は含まれていない。方向は先の水田畦畔とほぼ同じである。

ＳＤ１８（トレンチ１）

ＳＤ１８は前記ＳＤ１７の約２m北側で同方向に平行しており、幅約35cm、深さ約６cmを測る。断面は緩やかなＶ字状を呈し、埋土は灰黄色シルト一層で、遺物は含まれていない。



TOE93-2　中世遺構

1	10YR	5/2	灰黄褐色	粘質土
2	10YR	5/6	黄褐色	砂質土（地山）
3	2.5Y	5/2	暗黄灰色	砂質土（粘土ブロック含む）
4	10YR	7/2	にぶい黄橙色	シルト
5	2.5Y	6/3	にぶい黄色	砂質土
6	10YR	7/2	にぶい黄橙色	シルト
7	2.5Y	6/3	にぶい黄色	砂質土
8	10YR	5/6	黄橙色	砂質土
9	2.5Y	6/1	黄灰色	砂質土
10	2.5Y	6/1	黄灰色	砂質土
11	2.5Y	7/1	灰白色	シルト
12	10YR	7/2	にぶい黄橙色	砂質土
13	10YR	6/1	褐灰色	シルト
14	10YR	7/1	灰白色	シルト
15	10YR	6/2	灰黄褐色	砂質土
16	10YR	6/3	にぶい黄橙色	砂質土
17	10YR	4/3	にぶい黄橙色	シルト
18	2.5Y	6/1	黄灰色	砂質土
19	10YR	6/3	にぶい黄橙色	シルト
20	2.5Y	7/2	灰黄色	シルト
21	10YR	6/3	にぶい黄橙色	シルト

第11図　東円寺跡93-2区　中世面遺構断面図

中世以前遺構面

中世以前に関しては、遺構・遺物ともに少なく、調査区Ａの検出面である地山上において有舌尖頭器や石鏃等縄文時代早期のものと思われる石器とさらに石器を製作した際に生じたと思われるサヌカイトの剥片２点を検出したことが特筆される。残念ながら関連する同時代の遺構等は皆無で、これら石器の使用形態等については不明であるが、あるいは狩猟場や石器製作を意味するものとも思える。

その他検出された土壙には中世以前を示す土器等を検出するものはなく、また調査区全域にみられる中世包含層から検出された遺物の中にも11世紀より古いものはなかった。また調査区Ａ東端に検出された多くの溝状遺構はいずれも自然流路的なものと思われる。

遺構

ＳＤ０９

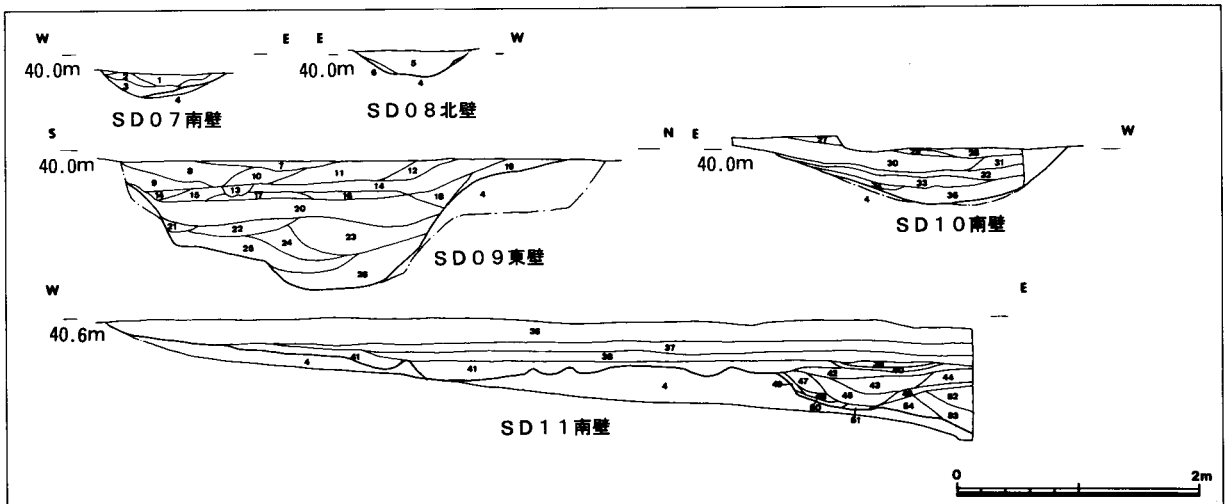
幅約4.1m、深さ1.1mを測り、断面はU字状を呈する。埋土はシルトや砂を中心としており自然流路と思える。遺物は一切検出していない。(図8-1)

ＳＤ１０

幅約4.0m、深さ0.5mで蛇行している。遺物はなく、ＳＤ０９やＳＤ１１と同種もしくは同一の自然流路を形成しているものと思われる。(図8-2)

ＳＤ１１

幅約3.5m、深さは0.65mを計測し、埋土はシルトおよび粘質土からなる。これら三つの流路の埋土の差異から、この付近の自然流路は、調査区の北側部分に中心を持ち、調査区の南側に向って幾本かの支流を形成していたものと思われる。これらの流路が水の流れを持っていた時期は詳しくはわからないが、流路が埋まった後で中世の遺構と包含層および近世面が、その上に形成されていることから、東円寺が建立される以前のかなり古い時期のものであろう。或いは先に触れた石器が使われていた縄文時代早期の付近の景観を示すものかも知れない。(図8-3)



ＴＯＥ93-2　中世以前遺構

1	10YR	4/1	褐灰色	砂質土	19	10YR	5/6	黄褐色	砂質土	37	10YR	5/3	にぶい黄褐色	シルト
2	10YR	3/1	黒褐色	粘土	20	5Y	7/1	灰白色	砂	38	10YR	5/2	にぶい黄褐色	砂質土
3	10YR	4/2	灰黄褐色	砂	21	5Y	6/1	灰色	砂	39	10YR	4/3	にぶい黄褐色	砂質土
4	10YR	5/6	黄褐色	砂質土(地山)	22	7.5Y	7/2	灰白色	砂	40	10YR	5/6	黄褐色	粘質土
5	10YR	4/1	褐灰色	砂	23	10Y	7/1	灰白色	砂	41	10YR	5/1	褐灰色	砂質土(包含層)
6	10YR	5/6	黄褐色	砂質土	24	2.5GY	7/1	明オリーブ灰色	砂	42	10YR	4/1	褐灰色	粘質土
7	10YR	5/2	灰黄褐色	砂質土	25	N	6/	灰色	礫	43	10YR	3/2	黒褐色	粘質土
8	10YR	6/4	にぶい黄橙色	シルト	26	N	5/	灰色	礫	44	10YR	4/4	褐色	粘質土
9	2.5Y	7/3	浅黄色	砂質土	27	10YR	6/3	にぶい黄橙色	シルト	45	2.5Y	4/2	暗灰黄色	粘土
10	10YR	6/4	にぶい黄橙色	砂質土	28	10YR	5/2	灰黄褐色	粘質土	46	10Y	5/1	灰色	砂
11	10YR	6/6	明黄褐色	粘質土	29	10YR	7/3	にぶい黄橙色	粘質土	47	10YR	4/2	灰褐色	シルト
12	10YR	6/3	にぶい黄橙色	シルト	30	2.5Y	7/2	灰黄色	シルト	48	2.5Y	5/3	黄褐色	シルト
13	10YR	7/3	にぶい黄橙色	シルト	31	10YR	8/1	灰白色	砂	49	5BG	6/1	青灰色	砂
14	2.5Y	6/1	黄灰色	砂	32	10YR	5/3	にぶい黄褐色	粘質土	50	10Y	6/1	灰色	砂
15	10YR	4/1	褐灰色	砂	33	N	4/	灰色	粘質土	51	2.5Y	6/2	灰黄色	砂
16	10YR	5/1	褐灰色	シルト	34	N	6/	灰色	砂	52	7.5Y	7/3	浅黄色	砂
17	10YR	6/2	灰黄褐色	砂	35	10YR	5/1	褐灰色	砂	53	7.5Y	7/2	灰白色	砂
18	10YR	8/1	灰白色	シルト	36	10YR	5/2	灰黄褐色	砂質土					

第12図　東円寺跡93-2区中世以前面遺構断面図

遺物について

東円寺跡93-2区で検出することができた遺物は殆ど全てが基本層序における灰褐色砂質土⑤の人力掘削時のものである。総数およそ232点でこのうち図示し得たものは44点である。

また最も特筆すべきは縄文時代早期のものと思われる有舌尖頭器と石鏃と石匙である。また他にも包含層よりサヌカイトの剥片２点が検出されており、産地分析の結果、奈良県二上山のものと断定されている。その後代のものとしては鎌倉時代初期頃の瓦器が多く検出されているのが特徴である。

近世耕作土からの遺物

●肥前系陶器皿片　Ｂ地区

底部の約1/4が残存。高台は貼り付け。見込みに梅樹文がみられる。

近世耕作土床下層の遺物

●須恵器蓋杯（杯）（図19-33・挿13-11）Ａ地区

底部1/5片。復元高台径7.2cm。内外にヘラケズリ痕。後内面は回転ナデ。高台貼り付け。

●瓦器碗片（挿13-17）Ａ地区

口縁部約1/12片。復元口径1.4cm。内外摩耗。焼成は良で硬質。偏平で口縁はやや外反。

13世紀中頃。

●白磁碗片（図18-7・挿13-32）Ａ地区

口縁部1/8片。復元口径12.2cm。内外強いヘラケズリの後ナデ。器面には黒褐色の斑点がみられる。

中世包含層からの遺物

●瓦器碗片（図19-20・挿13-12）Ａ地区

復元口径14.9cm。内外ともにカーボンが剥落しており、調整等はみえない。外面下半分に指頭圧痕がみられる。器壁は厚く立ち上がりはやや角度があることから12世紀中頃の所産と思われる。或いは東円寺創建等の所産かもしれない。

●瓦器碗片（図19-19・挿13-18）Ａ地区

復元口径11.4cm。全体の５％未満の残存。内外剥落。外面口縁下に回転指ナデによるヘコミがみられる。器壁は薄い。13世紀中頃のものと思われる。

●瓦器碗片（挿13-14）Ａ地区

復元口径13.2cm。口縁のみの残存で内外の摩耗は激しい。内面に水平方向のヘラミガキ痕が多くみられる。器壁は厚手で割と深く立ち上がること等から13世紀中頃と考えられる。

●瓦器碗片（図19-22・挿13-15）Ａ地区

復元口径14.8cm。薄手で外面口縁下に回転指ナデによるヘコミがある。内面は水平方向のヘラミガキがみられる。12世紀末頃と考えられる。

●瓦器碗片（図20-40・挿13-16）Ａ地区

復元口径12.6cm。口縁部の約1/4が残存。比較的状態はよい。外面指オサエ整形の後、口縁外面は横ナ

デ。内面はヘラミガキで、見込みに螺旋文、全体に渦巻文がみられる。また外面口縁下に調整によるヘコミがあり、器壁は薄く偏平である。13世紀中頃のものと思われる。

●瓦器碗片（挿13-13）A地区

復元口径14.2cm。口縁はやや外反し、外面口縁下にナデによる凹帯。薄手で立ち上がりは緩やか。13世紀中頃のものと思われる。

●瓦器碗片（図19-23・挿13-21）A地区

復元高台径は5.4cm。底部約1/4程度残存。全体が摩耗している。内面見込みに斜格子文のヘラミガキがみられる。13世紀中頃。

●瓦器碗片（図19-25・挿13-22）A地区

復元高台径6.8cm。底部

1/4が残存。全体が摩耗しているため調整は不明。高台断面は三角形だが高さはある。12世紀中頃のものと思われる。

●瓦器碗片（図19-26・挿13-21）A地区

復元高台径5.4cm。底部1/5残存。内外の摩耗が激しく年代の推定も難しい。

●瓦器碗片（図20-41・挿13-25）A地区

復元高台径3.0cm。底部1/4が残存。内面見込みにヘラミガキによる斜格子文。高台はかなり退化している。13世紀代のものであろう。

●瓦器碗片（図19-24・挿13-19）A地区

復元高台径5.0cm。底部1/4が残存。摩耗のため調整不明。やや厚手。12世紀中頃。

●瓦器小皿片（図21-49・挿13-26）A地区

復元口径9.6cm。全体の1/4の残存。底部には指頭痕がみえ、立ち上がりは明らかに指による曲げであることが観察できる。外面口縁付近は横方向ナデ、内面はナデ後ヘラミガキである。暗文は平行文である。

●瓦器小皿片（挿13-29）A地区

復元口径7.2cm。底部はなく口縁部1/4の残存。内外摩耗し調整は不明瞭。内外に横ナデがわかる程度である。

●瓦器小皿片（図19-21・挿13-27）A地区

復元口径7.8cm。器高は1.8cm。全体の約1/5の残存。かなり厚手で、内面にナデ調整がみられる。

●瓦器小皿片（図19-18・挿13-28）A地区

復元口径6.2cm。器高は1.3cm。全体の1/4が残存。内外摩耗し底部の指オサエは不明瞭。内面の調整も判然としない。外面器壁に指頭痕が確認できるが、これは非常に小さな指頭痕である。女性か子供の手になるものと思われ興味深い。器壁は薄手で、器高も小さく手作りの趣を残している。

●瓦器小皿片（挿13-23）A地区

口縁は欠損しており復元底部径はおよそ6.6cm。外底面に指頭痕が残っており、後ナデによって調整されている。口縁にかけての立ち上がりは緩い。

●東播系こね鉢片（図20-38・挿13-33）Ａ地区

口縁約1/5程度。口縁外面に幅約１cmで黒釉が施されている。13～14世紀代。

●瓦質すり鉢片（図20-37・挿13-24）Ａ地区

残存は底部2/5。復元底部径は9.2cm。外面全体にヘラケズリ痕が残る。14世紀後半頃と思われる。

●瓦質すり鉢片（挿13-30）Ａ地区

口縁部1/10以下の小片。復元口径は29.4cm。内外の摩耗激しく調整は不明。15世紀前半のものだろう。

●瓦質三足釜片（図19-29・挿13-42）Ａ地区

瓦質三足釜の脚部。長さ11.2cm。最大径2.0cm。縦方向のケズリによる調整は明瞭。

●中国製青磁碗片（挿13-41）Ｂ地区

同安窯系。底部約1/2が残存で、口縁は欠損している。高台はなく、底面径4.4cm。底部外面は回転ヘラケズリ痕が明瞭で、無釉。見込みに櫛描き文による調整痕。また釉下にヘラケズリ痕あり。

●唐津系陶器碗片（挿13-35）Ａ地区

底部1/4が残存。復元高台径5.6cm。胎土は灰色で非常に密。高台は露胎。釉はオリーブ。釉下に高台貼り付け時の指頭痕が窺える。高台は端部が切り落とされ断面五角形。高台底には糸切り痕がみえる。器壁外面には回転させながら削った痕跡がみえる。

●唐津系陶器碗片（挿13-36）Ａ地区

高台は欠損し、口縁を含む全体の1/8の残存。復元口径は10.4cm。厚手で器壁の立ち上がりは深く、底の深い碗である。外面下半分はヘラケズリで外回転ナデ。17～18世紀所産。

●瀬戸美濃系陶器天目茶碗片（図18-11・挿13-37）Ａ地区

底部約1/2残存。復元高台径4.4cm。高台は削り出しによる整形。底部は糸切り後、高台中心部を回転ケズリで整形。

●須恵器壷片（図19-30・挿13-9）Ａ地区

口縁部約1/8が残存。復元口径9.8cm。口縁以外の外面に自然灰釉がみられ、内面に回転ナデがみられる。口縁の特徴的な立ち上がりは、端部折り曲げによるもので、口縁外面を回転ヘラケズリで調整後、端部を丁寧に切り揃えている。

●サヌカイト製石片（挿13-6）Ａ地区

およそ一辺3.0cmの三角形状の剥片である。原材産地分析から二上山のサヌカイトと判定されている。

●サヌカイト製石片（挿13-5）Ｂ地区

約3.0cm×1.0cm程度の剥片である。二上山産の産地と推定されている。

地山直上面の遺物

●須恵器蓋杯（杯）（図19-31・挿13-10）

底部の1/8片。復元高台径10.3cm。内外面回転ヘラケズリ（反時計回り）。８世紀頃のものと思われる。

●有舌尖頭器（図17-3・挿13-1）

後述する石鏃、石匙とともに調査区Ａの最終検出面である黄褐色粘質土（地山）面上から発見された。その状況は豪雨によって調査区内が冠水した際、泥水を除去し最終検出面上を再精査の最中に作業員の鋤簾の中の泥土から見つかったものであるため、正確にどの様な土層に含まれたのかは断定できない。おそらく地山として検出していた黄褐色粘質土の中にあったものと思われる。

見つかった有舌尖頭器はいわゆる柳又型有舌尖頭器と呼ばれるタイプであり、その先端をやや損失しているが、長さ5.9cm、幅2.6cmを測る。舌状部が非常に鋭利な三角形につくりだされており、片方は欠損しているものの、かえりは端部が反り返る形状に加工されているのが特徴である。これは芹沢編年でいうところの第三群にあたるものと思われ、隆線文土器が出現する有舌尖頭器の最盛期のものである。石質は石鏃、石匙ともにサヌカイトである。

●石鏃（図17-1・挿13-2）

大きい方で、長さ3.2cm、幅2.3cmを測り、片方のかえり（わたくり）部を欠損している。平面形はまさに鉄塔状の形態を呈して、かえりの部分が反りながら脚状に発達する縄文時代の古式の特徴を有しており、縄文時代前期頃のものではないかと思われる。

●石鏃（図17-2・挿13-3）

小さい方の鏃で、長さ約3.6cm、残存幅約1.5cmである。前の鏃に比べて先端部分が極めて細く、また基部は発達しておりその幅は鏃身よりも広い。以上のような特徴的な加工を施すのは縄文時代後期からのものと思われ、従って今回まとまって検出された石器の中では唯一後出するものといえる。

●石匙（図17-4・挿13-4）

横型石匙で幅4.0cm、高さ2.6cmを測る。材質はサヌカイトである。通常石匙は縄文時代早期前葉から出現するが、一般的な存在になるのは早期末葉からといわれている。今回の出土状況はその機能等を類推するに及ばない。

撹乱中の遺物

●弥生式土器甕片（挿13-7）Ａ地区

口縁のみで、全体の約２％片である。復元口径は29.0cm。胎土は粗く、焼成不良。短い口縁の先端が上方へ肥厚しながらが外反する。第Ⅲ様式－Ⅱと考えられる。

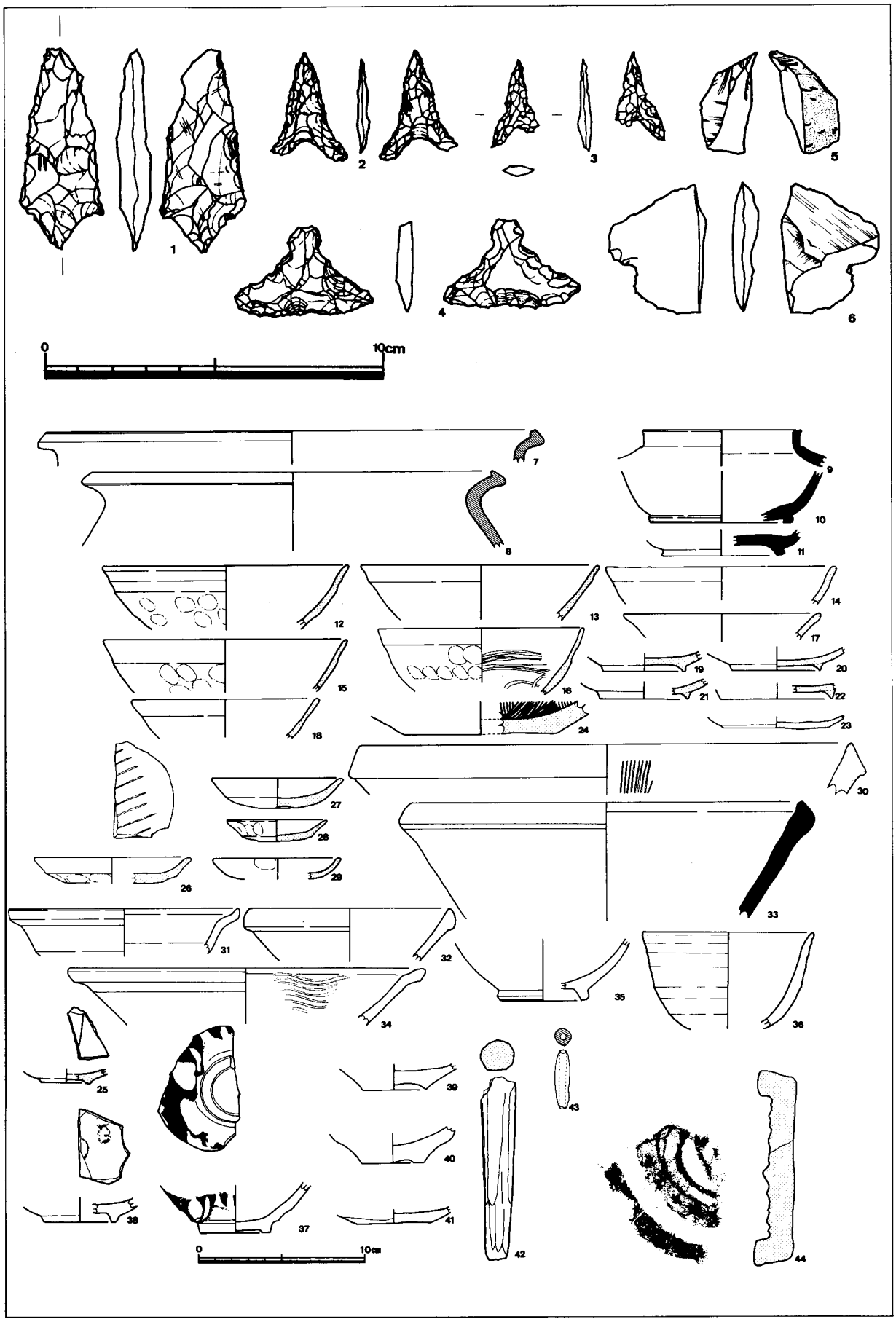
その他の遺物

●唐津碗片（図18-16・挿13-40）Ｂ地区

底部のみの残存。底部径は４cm。見込みに白釉がみられる。底部は回転させながらつまみ上げた後糸切りか。16世紀後半頃。

●唐津碗片（図18-17・挿13-39）Ｂ地区

底部のみの残存。底部径は４cm。見込みに砂目跡を残す。16世紀後半。



第13図　東円寺跡93-2区　出土遺物

熊取町　遺跡出土のサヌカイト製石片の原材産地分析

藁科哲男（京都大学原子炉実験所）

表１　熊取町　遺跡出土のサヌカイト製遺物分析結果

試料番号	元素比 K/Ca	Ti/Ca	Mn/Sr	Fe/Sr	Rb/Sr	Y/Sr	Zr/Sr	Nb/Sr	Al/Ca	Si/Ca
42958	.284	.224	.074	4.670	.203	.082	.609	.017	.013	.106
42959	.279	.229	.067	4.560	.198	.052	.640	.018	.011	.099

別表１　各サヌカイトの原産地における原石群の元素比の平均値(X̄)と標準偏差値(σ)

原産地	原石群名	分析個数	K/Ca X̄±σ	Ti/Ca X̄±σ	Mn/Sr X̄±σ	Fe/Sr X̄±σ	Rb/Sr X̄±σ	Y/Sr X̄±σ	Zr/Sr X̄±σ	Nb/Sr X̄±σ	Al/Ca X̄±σ	Si/Ca X̄±σ
北海道	旭山	80	0.351±0.011	0.288±0.010	0.089±0.005	5.064±0.140	0.174±0.011	0.096±0.009	0.903±0.029	0.015±0.012	0.015±0.001	0.141±0.005
群馬県	荒船山	43	0.194±0.070	0.360±0.028	0.129±0.014	9.205±1.153	0.080±0.034	0.085±0.014	0.458±0.082	0.009±0.010	0.013±0.021	0.123±0.032
長野県	八風山	46	0.274±0.028	0.324±0.010	0.090±0.008	4.905±0.505	0.104±0.009	0.100±0.009	0.581±0.033	0.012±0.009	0.018±0.002	0.168±0.014
神奈川県	火打沢	40	0.092±0.005	0.285±0.009	0.166±0.009	12.406±0.332	0.023±0.006	0.111±0.008	0.483±0.023	0.005±0.007	0.012±0.001	0.012±0.001
岐阜県	下呂	93	1.576±0.055	0.227±0.011	0.038±0.004	0.766±0.025	0.277±0.020	0.031±0.013	0.504±0.024	0.035±0.009	0.052±0.003	0.660±0.025
奈良県	二上山	51	0.288±0.010	0.215±0.006	0.071±0.006	4.629±0.270	0.202±0.012	0.066±0.009	0.620±0.022	0.024±0.010	0.019±0.001	0.144±0.005
大阪府	和泉	26	0.494±0.023	0.325±0.025	0.056±0.004	4.060±0.148	0.296±0.021	0.065±0.010	0.706±0.025	0.038±0.010	0.023±0.001	0.194±0.009
兵庫県	岩屋第一	29	0.615±0.021	0.246±0.011	0.056±0.006	3.778±0.198	0.363±0.019	0.059±0.013	0.830±0.039	0.043±0.013	0.028±0.002	0.247±0.010
	〃 第二	24	0.530±0.018	0.255±0.006	0.056±0.006	3.542±0.200	0.332±0.018	0.046±0.018	1.066±0.027	0.042±0.014	0.026±0.001	0.227±0.009
	甲山	22	0.300±0.017	0.154±0.005	0.056±0.007	3.350±0.261	0.130±0.012	0.061±0.033	0.574±0.021	0.012±0.007	0.018±0.001	0.159±0.008
香川県 五色台	国分寺	29	0.450±0.030	0.244±0.008	0.057±0.004	3.842±0.310	0.298±0.023	0.043±0.012	0.951±0.037	0.046±0.012	0.023±0.001	0.194±0.011
	蓮光寺	18	0.455±0.011	0.244±0.004	0.057±0.003	3.762±0.136	0.298±0.018	0.043±0.015	0.989±0.038	0.048±0.008	0.023±0.002	0.196±0.007
	白峰	38	0.526±0.015	0.255±0.005	0.057±0.004	3.599±0.101	0.325±0.015	0.040±0.016	1.054±0.037	0.047±0.010	0.026±0.002	0.226±0.007
	法印谷	25	0.396±0.009	0.235±0.003	0.076±0.006	4.892±0.143	0.272±0.016	0.057±0.013	1.145±0.034	0.041±0.010	0.022±0.001	0.172±0.004
香川県 金山	金山東	25	0.486±0.011	0.215±0.005	0.083±0.004	4.811±0.119	0.308±0.015	0.059±0.015	1.170±0.028	0.032±0.012	0.026±0.001	0.203±0.005
	〃 西	19	0.401±0.008	0.209±0.004	0.086±0.005	5.165±0.167	0.277±0.015	0.064±0.011	1.058±0.028	0.033±0.011	0.022±0.001	0.176±0.004
香川県	＊五色台	63	0.869±0.048	0.120±0.006	0.023±0.005	2.294±0.114	0.484±0.026	0.006±0.011	0.705±0.044	0.043±0.011	0.039±0.003	0.459±0.028
鳥取県	馬ノ山	23	0.188±0.007	0.178±0.006	0.011±0.001	0.916±0.033	0.032±0.002	0.001±0.002	0.177±0.009	0.004±0.002	0.015±0.001	0.111±0.005
広島県 冠山	冠高原	60	0.651±0.021	0.485±0.014	0.046±0.004	3.322±0.104	0.174±0.009	0.029±0.009	0.462±0.017	0.185±0.010	0.025±0.002	0.241±0.008
	冠山東	29	0.323±0.019	0.363±0.031	0.019±0.001	1.607±0.060	0.059±0.009	0.003±0.005	0.399±0.043	0.025±0.009	0.021±0.001	0.171±0.006
	飯山	25	1.116±0.061	0.472±0.022	0.037±0.005	2.228±0.080	0.245±0.011	0.023±0.009	0.524±0.014	0.246±0.013	0.038±0.003	0.391±0.021
佐賀県	多久第一	53	0.834±0.053	0.385±0.010	0.060±0.008	5.075±0.284	0.507±0.036	0.060±0.017	0.851±0.036	0.237±0.019	0.030±0.002	0.307±0.019
	〃 第二	23	0.849±0.062	0.381±0.016	0.070±0.009	5.728±0.310	0.559±0.052	0.061±0.018	0.854±0.035	0.254±0.025	0.030±0.003	0.313±0.022
	〃 第三	8	1.109±0.220	0.335±0.029	0.068±0.009	4.784±0.981	0.702±0.091	0.082±0.024	0.811±0.031	0.280±0.025	0.036±0.006	0.401±0.063
	老松山	62	0.718±0.029	0.304±0.010	0.074±0.007	5.780±0.241	0.539±0.036	0.068±0.019	0.693±0.033	0.211±0.020	0.025±0.002	0.263±0.010
	寺山・岡本	30	0.633±0.045	0.299±0.011	0.079±0.005	6.119±0.295	0.478±0.035	0.071±0.018	0.638±0.033	0.192±0.013	0.023±0.002	0.237±0.016
	西有田	17	0.453±0.019	0.331±0.005	0.098±0.010	7.489±0.249	0.307±0.024	0.081±0.015	0.588±0.023	0.106±0.010	0.023±0.002	0.237±0.016
長崎県	大串	28	1.111±0.118	0.140±0.009	0.055±0.020	1.650±0.236	0.236±0.043	0.041±0.027	0.486±0.038	0.082±0.022	0.050±0.006	0.607±0.059
	亀岳	19	1.072±0.042	0.144±0.008	0.041±0.006	1.776±0.152	0.233±0.014	0.015±0.013	0.497±0.018	0.085±0.015	0.049±0.003	0.587±0.018
	牟田第一	30	0.794±0.094	0.335±0.024	0.072±0.009	4.938±0.251	0.872±0.132	0.223±0.036	0.720±0.053	0.301±0.042	0.026±0.003	0.284±0.033
	牟田第二	13	0.601±0.044	0.316±0.010	0.102±0.015	8.390±0.541	1.114±0.102	0.329±0.034	0.976±0.065	0.479±0.039	0.021±0.002	0.218±0.015
	川棚第一	59	0.509±0.022	0.294±0.008	0.072±0.006	4.539±0.157	0.211±0.016	0.072±0.015	0.823±0.046	0.044±0.010	0.022±0.002	0.201±0.009
	〃 第二	9	0.389±0.042	0.245±0.022	0.073±0.005	5.373±0.332	0.193±0.032	0.068±0.013	0.721±0.041	0.045±0.011	0.018±0.002	0.157±0.013
	福井第一	15	0.639±0.015	0.317±0.006	0.098±0.009	8.284±0.312	1.242±0.050	0.352±0.031	1.021±0.032	0.519±0.033	0.022±0.002	0.230±0.007
	〃 第二	25	0.519±0.015	0.305±0.007	0.090±0.008	7.729±0.227	0.954±0.038	0.274±0.027	0.871±0.041	0.407±0.019	0.020±0.001	0.190±0.006
	崎針尾第一	71	0.388±0.029	0.242±0.019	0.057±0.005	4.371±0.218	0.158±0.019	0.055±0.009	0.450±0.039	0.062±0.008	0.017±0.001	0.161±0.011
	〃 第二	14	0.608±0.125	0.360±0.046	0.081±0.013	5.825±0.884	0.316±0.055	0.071±0.016	0.659±0.097	0.098±0.023	0.024±0.004	0.248±0.050
熊本県	阿蘇第一	15	2.006±0.258	0.646±0.052	0.064±0.011	2.085±0.320	0.481±0.068	0.106±0.028	1.647±0.197	0.083±0.012	0.057±0.010	0.597±0.099
	〃 第二	14	0.993±0.198	0.514±0.070	0.061±0.008	3.087±0.441	0.299±0.066	0.064±0.13	1.043±0.182	0.038±0.013	0.032±0.005	0.293±0.041
	菊池	42	0.678±0.057	0.458±0.020	0.062±0.005	3.457±0.206	0.194±0.018	0.072±0.009	0.728±0.054	0.025±0.010	0.019±0.002	0.185±0.015
	JG－1[a)]	56	1.327±0.021	0.266±0.006	0.058±0.006	2.817±0.074	0.756±0.015	0.183±0.024	0.762±0.033	0.078±0.014	0.036±0.003	0.448±0.011

＊：ガラス質安山岩　a)：Ando, A., Kurasawa. H., Ohmori. T. & Takeda. E. (1974). 1974 compilation of data on the GSJ geochemical reference samples JG-1 granodiorite and JB-1 basalt. Geochemical Journal Vol.8 175-192.

表２　熊取町　遺跡出土のサヌカイト製遺物の原材産地推定結果

分析番号	試料　遺跡　遺物 番号、　名、出土区、層位	時代(伴出土器)	原石産地(確率)	判定	遺物品名(備考)	遺物挿図番号
４２９５８	１、Ｂ区（Ａ３）、包含層（下層）		二上山(８％)	二上山		
４２９５９	２、Ａ区（Ｓ６Ｅ７）、中世包含層		〃　(２％)	〃		

分析方法

遺物試料の分析面の風化層にアルミナ粉末を吹き付け、新鮮面を出したのち、非破壊で、エネルギー分散方蛍光Ｘ線分析装置によって元素分析を行う。分析元素はAL、Si、K、Ca、Ti、Mn、Fe、Rb、Sr、Y、Zr、Nbの12元素をそれぞれ分析した。塊試料の形状差による分析値への影響を打ち消すために元素量の比を取り、それでもって産地を特定する指標として、サヌカイトでは K/Ca、Ti/Ca、Mn/Sr、Fe/Sr、Rb/Sr、Y/Sr、Zr/Sr、Nb/Zrをそれぞれ用いる。

今回分析を行った熊取町東円寺跡出土のサヌカイト製石片の元素分析結果を表１に示す。

固定方法

相関を考慮した多変量東経の手法であるマハラノビスの距離を求めて行うホテリングのＴ検定である。この方法によって、各地の現産地（別図１）から原石で作られた40個の原石群（別表１）に帰属する確率を求めて産地を固定する。遺物の帰属確率を求めて低い原石群の産地を除外していくと、今回分析を行った遺物は二上山群に比較的高い確率で帰属され、その結果を表２に示した。二上山産原石と一致する組成の原石は和泉・岸和田現産地からも産出原石の６％に見られる（別表２）。従って、熊取町東円寺跡の２点の遺物原石産地は、奈良県の二上山原産地の他に和泉・岸和田原産地を考慮しなければならない。しかし、この２個が和泉・岸和田原産地から採取される確率は0.4%と低くなる。また、和泉・岸和田原産地の二上山原石組成以外の組成の原石が本遺跡で見られないことから、奈良県二上山原産地の原石が使用されたと結論した。

第４節　東円寺跡94-1区

調査の経過

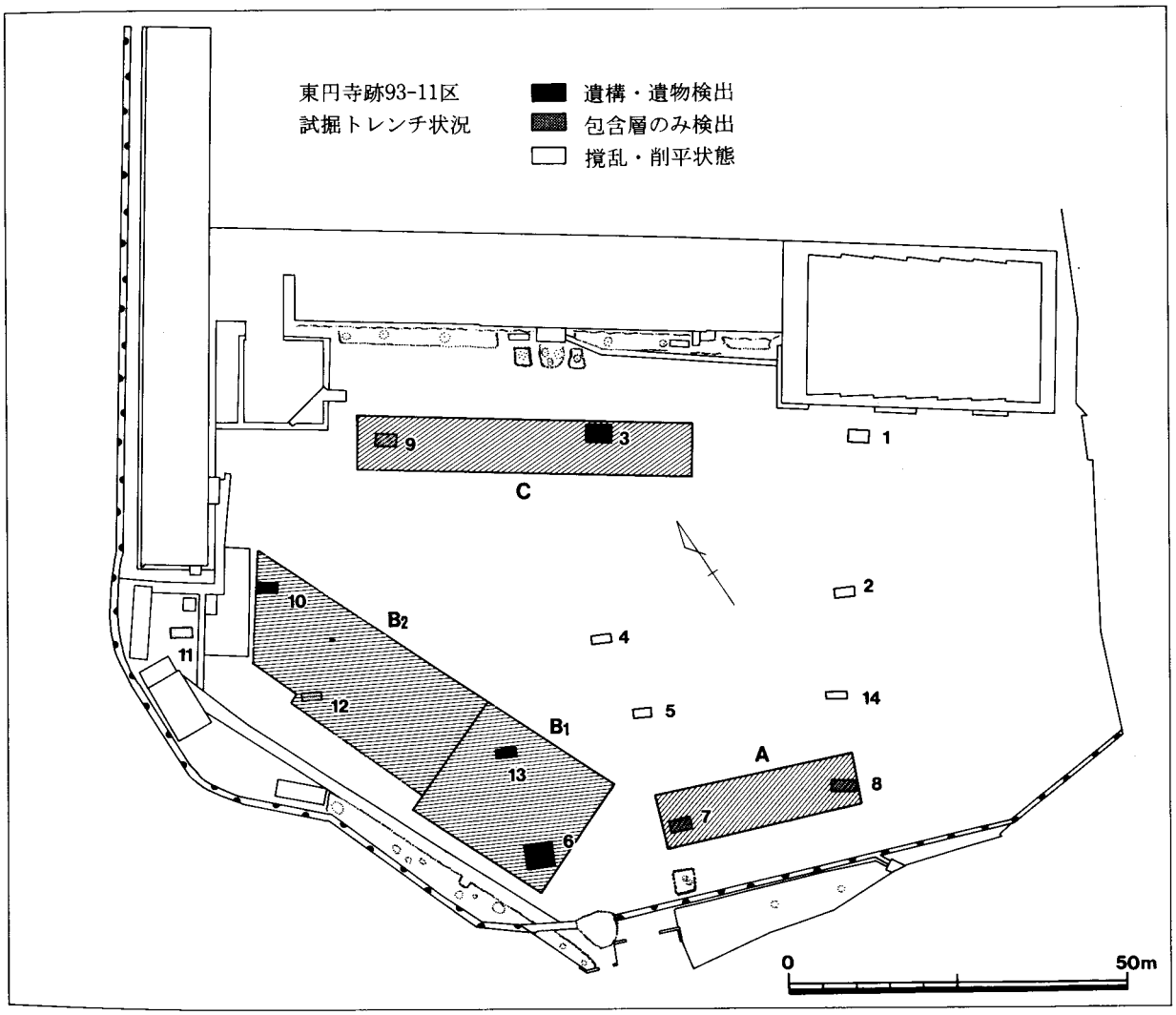
試掘　東円寺跡　93-11区

流域貯留浸透事業に伴う本掘調査を行うに先立って、平成５年１月10日より３月10日までの20日間、14ヶ所にも及ぶトレンチ調査を行った。

その結果、グランドの南側と西側が比較的撹乱を逃れていることが判り、４ヶ所より遺構を検出し、その他５ヶ所で包含層を確認したが、そのうち南西の正門付近に行ったトレンチ13において確実な柱穴数基が観察されたのが特記するべき成果であり、本調査を計画する契機となった。

中央小学校のグランドは、近世において水田耕作のために削平を含む土地整備を受けた後、明治期以降小学校の敷地となるに及んで土地の起伏を全く平滑にするために大掛かりな造成が行われたため、地山面をはじめ中世の遺構や遺物を含んだ地層が大幅に削平されたことが、各トレンチにおける壁面土層の観察によって判明した。この様な開発の経過はグランドの東半部分で最も激しく、地山を含む全ての土層を完全に失っており、本調査は東半を除く西半分に絞られ、特に南側に焦点をあてた。

(挿14)



第14図　東円寺跡94-1区　調査区位置図

本調査　東円寺跡94-1区

東円寺跡　93-11区における試掘調査の結果から、熊取町立中央小学校グランド南西部分を中心とした発掘調査期間の調整を含む協議を重ねた結果、全体を４つの調査区に分割することとした。平成６年７月６日、南側に位置するＡ区から開始して、小学校の夏期休暇期間に入ってからは最も重要なＢ１区・Ｂ２区を調査し、最後に北側のＣ地区を同年８月30日に終了した。

なお、各調査区の形状および面積は、小学校夏期休暇期間内に終了することを前提として最大範囲を確保し、かつ大量に出る排土の有効な置場を確保するために周到に計画されたものと確信している。

調査区Ａ

全工程の端緒として、グランド東南部に20×８ｍ、面積160㎡のＡ区を設定し、平成６年７月６日より７月15日の６日間、機械および入力掘削による調査を行った。

基本層序

長辺東西20mにおよぶ調査区の東西両端においても基本層序は同様であるが、今回の本調査で成果が期待される次のＢ１地区に近い西側部分は、小学校旧校舎解体と造成のため大きく撹乱されていた。グランド用の客土と造成の際の整地土層があり、以下耕作土・床土②③が存在して、地山面⑤を削平する形の薄い整地土層④が存在している。僅かに残っていた遺構はこの整地土層のさらに下にあった。

遺構

ＳＤ１

溝ＳＤ１は調査区外から東壁を通して西方向に流れを持ち、ＳＫ１につながっていたと思える溝であり、断面はＶ字状である。埋土は遺構面上層の整地層である灰褐色砂質土と類似している。遺物はなかった。

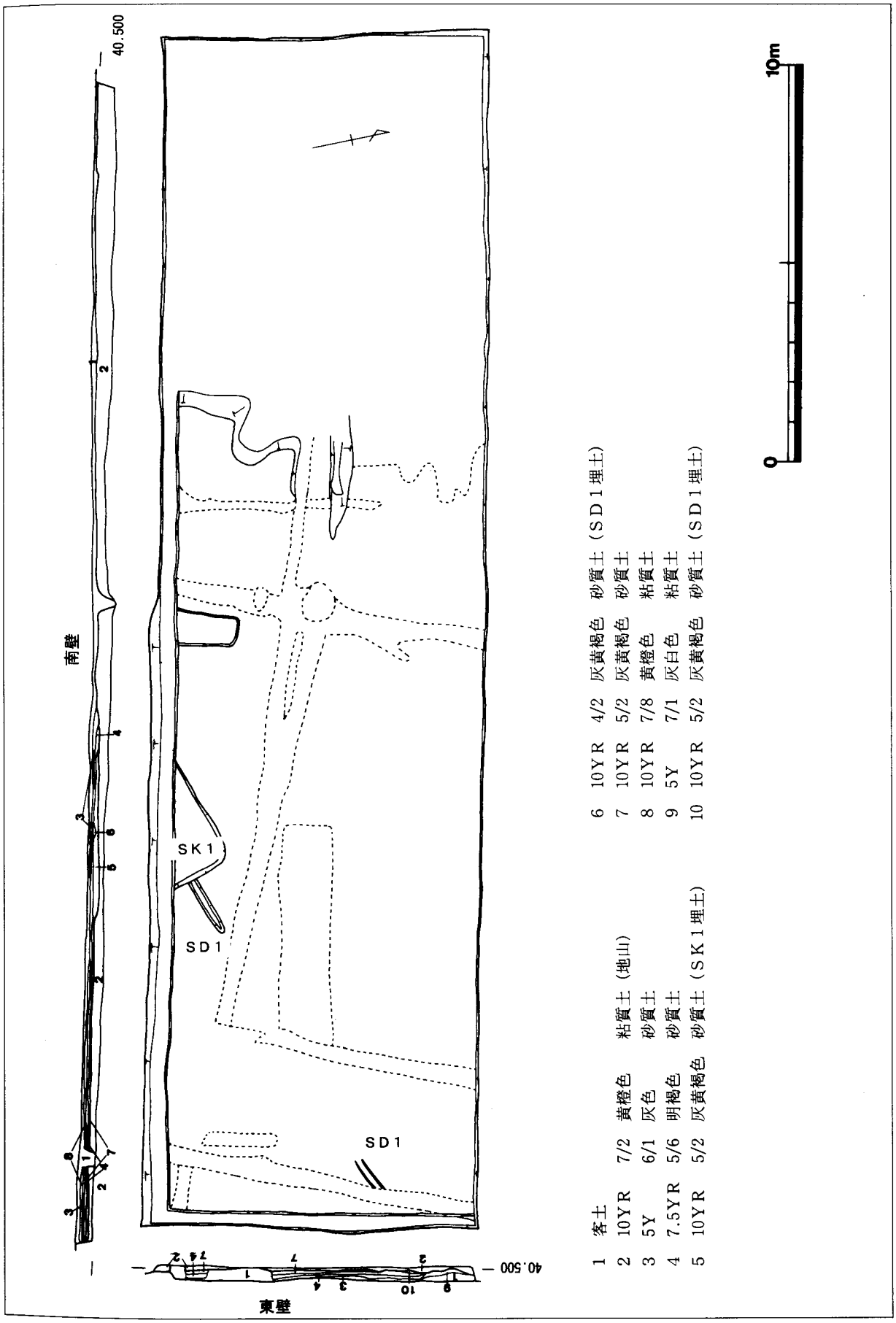
ＳＫ１

土壙ＳＫ１は南壁によって断たれているため、全容は不明であったが、おそらく平面方形の土壙であると思われる。埋土は溝ＳＤ１と全く同様であった。或いは旧水田の外郭部分かとも思われる。

遺物は一切検出されなかった。年代について不明である。

Ａ地区小結

近世の耕作と近代の校地造成によってＡ地区の遺構面は全体的な削平を受けをうけていることがわかり、本来の姿は留めていなかった。後述のＢ１区の調査の際に検出された柱穴に直接つながるものはみられなかったのが残念である。



第15図　調査区A平面図・壁面土層図

調査区Ｂ１

小学校正門に面するグランド南西部分には、柱穴をはじめとする遺構が存在することが確認され、この付近一帯は調査の中心となった。後述のＢ２区との分割は排土の置場を確保するための反転掘りである。

現表土であるグランド用客土と若干の造成時の整地土層を機械掘削によって除去した時点で地山面が露出し、人力掘削の後その表面に多くの遺構が検出された。但し調査区西壁に面する部分は大きく南西に向って落ち込む形状となって現れた。小学校の南側に走る旧170号国道以南が現在の熊取町立中央小学校に比べて一段低く位置する現況に一致する状況であった。これはかつて校地拡大の為、大幅な盛土造成が行われたことを示していると思われる。

基本層序

後述する遺構面を考察する際に基準となるのは東壁である。その土層は調査区Ａと類似しており、グランド用の客土である粗砂と造成の際の整地層⑫、その下には旧耕作土の痕跡を示す土層が極めて薄くみられる場合があり、地表下約10cmには削平された形状ではあるが今回の遺構面である黄褐色粘質土⑥と黄褐色砂礫⑦の地山面がみられる。

西壁は東壁とは様相が大きく異なり、地表下約30cmには黄褐色粘質土の地山面が存在するが、直上には厚さ約７cmで灰褐色粘質土⑧が重なり、この上面を学校敷地造成の際に大きく盛土した土層が分厚く重なっている。この地山面上に見られる灰褐色粘質土についての詳細は不明と言わざるをえないが、後述する調査区Ｂ２で検出された東西方向の溝ＳＤ６およびＳＤ７がその方向を南北方向に変えて、本調査区Ｂ１の西端部分を南北に縦断していると予想され、その溝の縦断面に見える一種の遺構埋土ではないかとも思われる。(図12・挿17)

遺構

調査区Ｂ１内では柱穴78基、溝７本、土壙４基を数えた。柱穴に関しては図版および実測図で示した通り、検出状況は極めて複雑であり、掘立柱建物跡に見られるような従来の規則的な配置等を確認することは困難であった。

柱穴

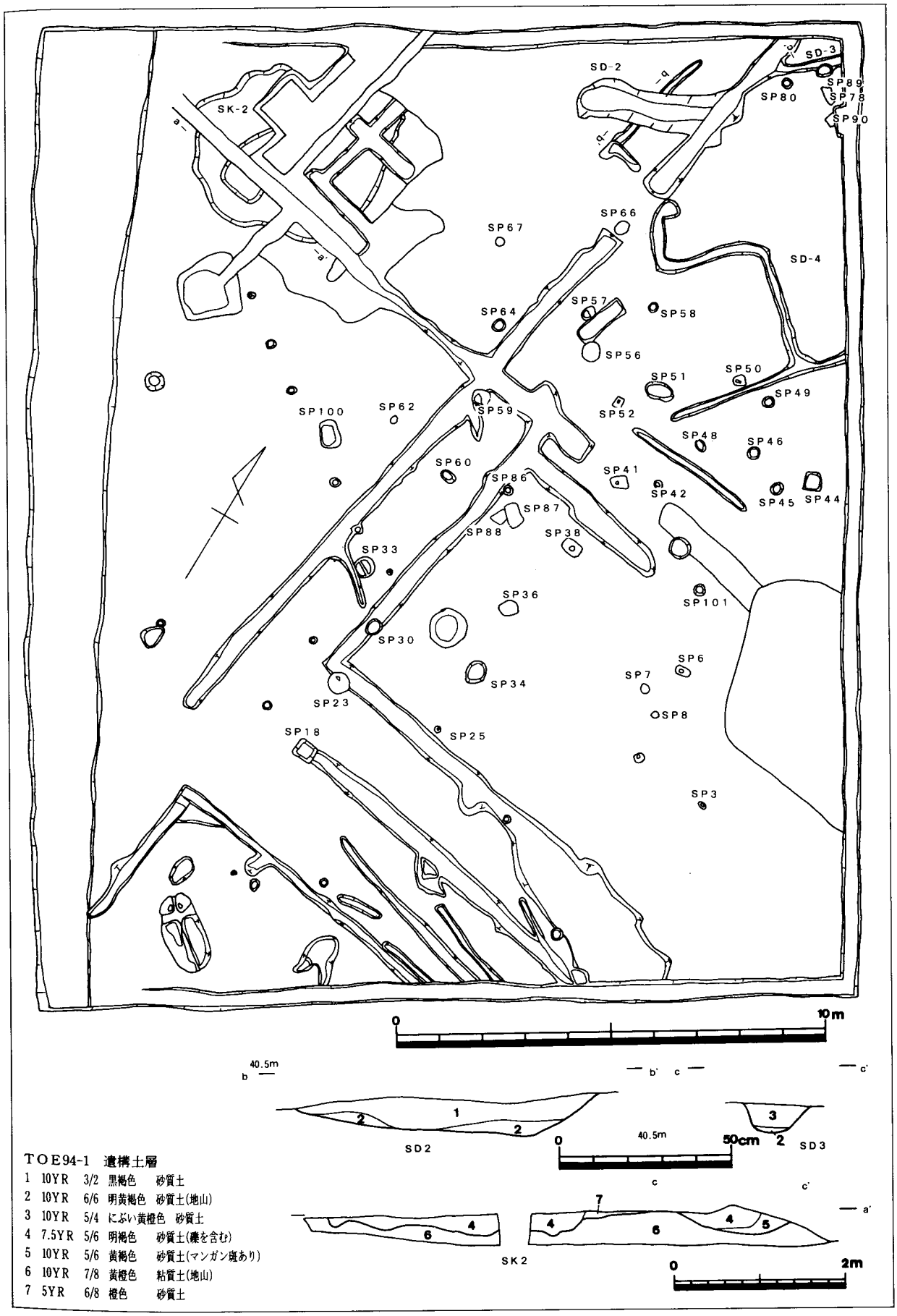
調査区Ｂ１中央部から北東部に点在するが、個々の遺存状況は様々であり、一部柱穴どうしの切りあいも観察された。概して殆どの柱穴が方形の掘り方を持っていた。

柱穴の種類を主に４種類に分類した。

①横断面が一辺約13～15cm程度の方形の柱痕をもつもので、これが調査区内に最も多い。

②また掘り方がほぼ正方形で比較的浅く、①の様な正方形の柱痕がなく、黒褐色砂質土の埋土をもつものが数基検出された。この埋土は柱穴①における柱痕にみえるものと同質であることから、礎石の抜き取り跡ではなく、一辺30cm程度の大きな方形の柱痕と思われる。

③また本来は柱穴であったと思われるが、過去の削平によって殆ど失われ、僅かに浅く痕跡状に遺存す



第16図 調査区B１平面図

るものが多数存在した。柱痕の確認の為に行った皿掘りの段階で全く消えてしまうこともあった。この③の様な柱穴のある場所は、地山面が粘質土ではなく、その下位に存在する筈の黄褐色砂礫土が露出しており、明らかに削平にあっているものと思われる。この部分に関しては、現在の平滑な小学校の運動場からは全く想像もつかないが、近世に入って削平される以前は多少なりとも地形の起伏が存在していたのであり、その膨らんだ部分に存在した柱穴が大きく削平されて、かすかな痕跡状になって残存していたものとも思える。従って建物を考える場合は遺存状況の良かった柱穴群を詳細に観察して分類した上で、これらの不明瞭な柱穴痕を合わせて復元を試みるべきであろう。

以上、特筆されるのは、多くの柱穴が断面正方形の柱痕を有していたことである。これはほぼ正方形の掘立柱であったことを示している。東円寺跡を含め、熊取町内で発見された建物の遺構の中でも確認されていない特徴であり、その形態は従来の建物とは明らかに一線を引くものであろう。

注意することは、方形の柱痕の持つ辺の方向を調べることで、ある程度建物の平面形態を復元できる可能性が高いということであるが、今回は作成した平面図でもわかるとおり困難であった。

柱穴14（挿図18）はその柱痕が北西方向に約20°傾斜している。これは倒壊した建物の状況を示すものと思われたが、裏込め土の状況や柱穴の位置からして、切妻式掘立柱建物の棟持ち柱の可能性が考えられる。同様の柱穴として、調査区Ｂ１とＢ２の境界となる調査区Ｂ１西壁にその断面が検出された柱穴97がある。こちらは北東方向へ約10°傾斜している。その位置からして両調査区にまたがる建物ＳＢ２の棟持柱とも思われ、ＳＢ２も方形の掘立柱をもつ切妻式の建物であると思われる。

柱穴に関して、柱痕を残すものが多く、柱の抜き取った痕跡のあるものは殆どなかった。つまり柱を持つ構造物に関して、建て替えられた形跡はなく、地面に柱根を残したまま廃絶したものと思える。或るいは火災等が原因かもしれない。

また不規則な柱穴の分布に関しては、建物以外の構造物をも考えるべきであって、或るいは掘立柱を持つ土塀や築地のようなものが存在した可能性がある。

遺物に関して、ＳＰ２１、ＳＰ５０、ＳＰ７８、ＳＰ８７より微細な瓦器碗片の検出を見た。いずれも柱裏込め土よりの出土であり、柱穴を持つ構造物の年代決定に重要である。

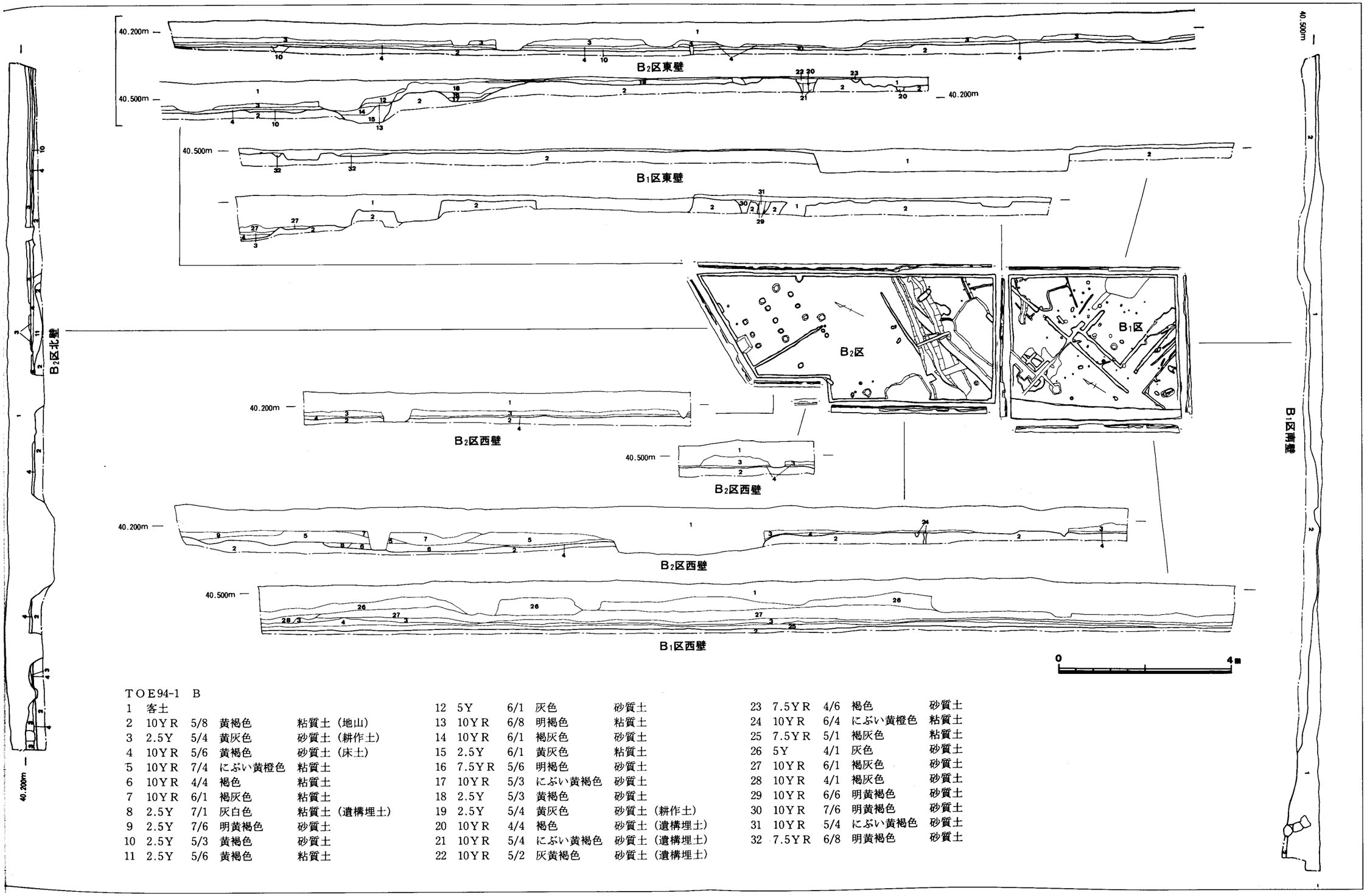
以上のことを踏まえて柱穴群の分類を試みた。本調査地点周辺における建物検出状況も合わせて考えたい。

建物

挿図18でわかる通り、柱穴はその痕跡を含めて約80基を検出したにも拘わらず、建物の平面形をとらえるのは困難である。かろうじて後出する溝群と同方向の２基の建物を推定したが、全体像は掴んでいない。

ＳＢ１

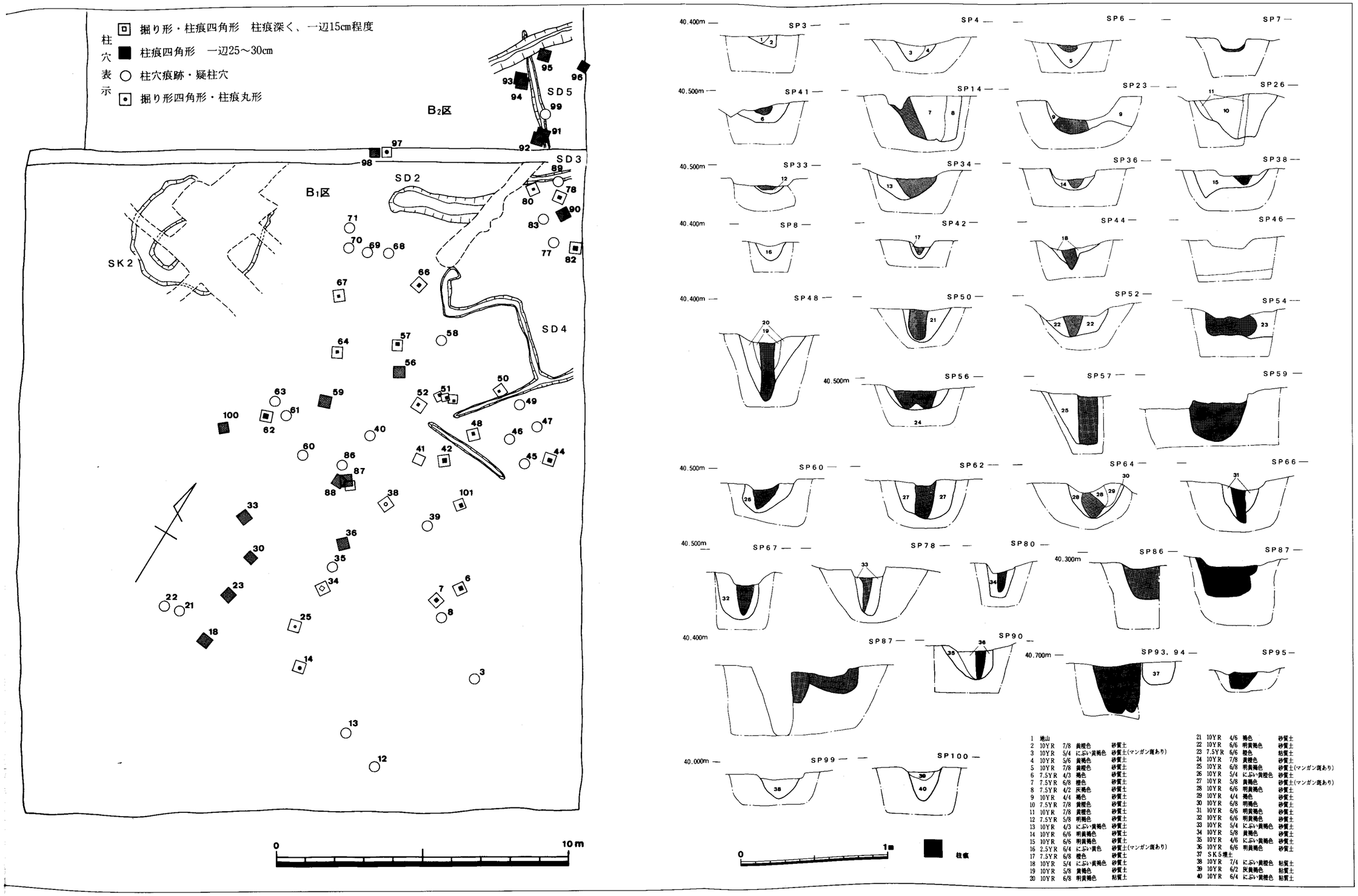
ＳＢ１は柱穴ＳＰ１４を棟持柱と考えた際にその北西方向に考えられる建物で、ＳＰ１８とＳＰ３４



TOE94-1　B

1	客土			
2	10YR	5/8	黄褐色	粘質土（地山）
3	2.5Y	5/4	黄灰色	砂質土（耕作土）
4	10YR	5/6	黄褐色	砂質土（床土）
5	10YR	7/4	にぶい黄橙色	粘質土
6	10YR	4/4	褐色	粘質土
7	10YR	6/1	褐灰色	粘質土
8	2.5Y	7/1	灰白色	粘質土（遺構埋土）
9	2.5Y	7/6	明黄褐色	砂質土
10	2.5Y	5/3	黄褐色	砂質土
11	2.5Y	5/6	黄褐色	粘質土
12	5Y	6/1	灰色	砂質土
13	10YR	6/8	明褐色	粘質土
14	10YR	6/1	褐灰色	砂質土
15	2.5Y	6/1	黄灰色	粘質土
16	7.5YR	5/6	明褐色	砂質土
17	10YR	5/3	にぶい黄褐色	砂質土
18	2.5Y	5/3	黄褐色	砂質土
19	2.5Y	5/4	黄灰色	砂質土（耕作土）
20	10YR	4/4	褐色	砂質土（遺構埋土）
21	10YR	5/4	にぶい黄褐色	砂質土（遺構埋土）
22	10YR	5/2	灰黄褐色	砂質土（遺構埋土）
23	7.5YR	4/6	褐色	砂質土
24	10YR	6/4	にぶい黄橙色	粘質土
25	7.5YR	5/1	褐灰色	粘質土
26	5Y	4/1	灰色	砂質土
27	10YR	6/1	褐灰色	砂質土
28	10YR	4/1	褐灰色	砂質土
29	10YR	6/6	明黄褐色	砂質土
30	10YR	7/6	明黄褐色	砂質土
31	10YR	5/4	にぶい黄褐色	砂質土
32	7.5YR	6/8	明黄褐色	砂質土

第17図　東円寺跡94-1区調査区Ｂ１・Ｂ２壁面土層図



第18図　東円寺跡94-1区調査区Ｂ１・Ｂ２柱穴断面図・状況図

の間を２間とすることが考えられる。この場合柱間距離は梁行約２ｍである。このＳＰ１８とＳＰ３４はいずれも一辺約30cmの正方形の巨大な掘立柱と思われ、さらに付近には同様にその特徴的な柱穴が分布している。ＳＰ５９・ＳＰ８６・ＳＰ８７・ＳＰ３３・ＳＰ３０・ＳＰ３６・ＳＰ２３、そして最も北側のＳＰ５６等は各々或る一定の間隔で分布しているように観察される。桁方向の柱間距離はＳＰ８７とＳＰ５９の間を測る限り約３ｍとなる。またその方向に関しては建物ＳＢ１およびＳＢ２とも同じで、これらが完全に消滅してからつくられたと思われる溝群とほぼ同方向を示すものと思われる。規模に関しては挿図に示した程度にしか示せないが、さらにこれらの北側に分布する大多数の柱穴群（上記①類）との関連性も考えられるところである。あるいは一つの建物における巨大な数本の掘立四角柱（②類）に対する一辺約15cmの四角柱（①類）であったのかもしれない。①類の柱穴もやはりN45′Ｅの方向性を有すると考えられるが、その分布状況は極めて複雑である。

以上から切妻式の掘立柱建物で、なおかつ柱は一辺約30cm程度の四角い柱を中心としていたことが考えられる。この様な外形をした建物として、神社・神殿の様なものの存在を想定しておく。

ＳＢ２

ＳＢ２は主に調査区Ｂ２の最南端で検出された柱穴群（②類）から考えられるものであるが、ＳＢ１に比べて、各々の柱穴距離は一定で分布し、これが明かに建物跡であることを裏付けている。ＳＰ９０・ＳＰ７８・ＳＰ９１・ＳＰ９２・ＳＰ９３・ＳＰ９４・ＳＰ９７がＳＢ２を構成していると思われる柱穴で、その柱痕の横断面は一辺約20～25cm程度の方形を呈し、比較的大きな掘立柱と思われる。ＳＢ１とＳＢ２は明らかに関連が認められるが、その前後関係は現在のところ不明である。

溝

溝状の遺構が３本検出された。いずれもN45Ｅの方向性を持ち、各々垂直・平行の関係が見られるため、同時期のものと思われる。埋土は３本とも同じ灰褐色砂質土の一層である。埋土からは特に13世紀代に限られる瓦器片のみが検出されていることから、比較的短期間に埋まったものと思われる。また後述する調査区Ｂ２の南端部で検出された溝ＳＤ５はＳＤ３と垂直に接続するものであり、同種の瓦器片を検出している。平面図を見てわかるように、これらの溝は各々Ｔ字状もしくはクランク状に連結しているようであり、4.5×3.2mの長方形の土地を１単位とする格子状の区画を形成しているようにも思える。用途は明らかに水路であるが、4.5×3.2m程度の水田を区画した溝である可能性もある。

ＳＤ２

N45Ｅの方向を持ち、東端を撹乱によって遮られているが、おそらくＳＤ３にそのまま接続していると思われる。一応3.5×1.8m、幅約30cm、深さ９cmの大きさを測るが、西、北方向へ拡がる可能性もある。埋土は暗灰褐色砂質土の一層で、中より13世紀代の瓦器片が数片出土している。(挿21)

ＳＤ２の遺物

●瓦器碗（挿22-8)

反転復元口径14.6cm。内外とも摩耗し調整は殆ど不明。器壁はやや厚手で、口縁にかけての立ち上がりは緩やかであることから13世紀前半頃のものと思われる。

その他

●瓦器碗片（17片。12世紀中頃から13世紀中頃までのもの）

●土師器片（６片。いずれも微細な破片である）

●平瓦片（１片。中世のものだが、表面摩耗大きい）

ＳＤ２の遺物は多くの瓦器片が注目され、概して12世紀から13世紀代の比較的狭い年代幅が与えられそうである。

ＳＤ３

Ｎ45Ｅの方向を持ち、西端は撹乱で遮られるがＳＤ２に繋がるものと思われ、東端は調査区外である。幅約15cm、深さ約20cmで断面Ｖ字形の遺存状況のよい溝である。調査区Ｂ２東南端で検出された溝ＳＤ５との直接的な接続は未確認であったが、溝の形状は全く同一であり、やはりこの付近で格子状の区画を形成しているものと思われる。埋土は灰褐色砂質土の一層であるが、埋土を除去した時点で東端部分より、柱穴ＳＰ８９を検出した。従ってこれらの一連の格子状の溝は柱穴よりもさらに新しい時期のものであり、埋土に包含する遺物も13世紀前半代の瓦器に限定されていることから、調査区Ｂ１・Ｂ２における柱穴等遺構の年代決定に重要と思われる。

ＳＤ３の遺物

●瓦器碗（図21-46・挿22-3）

反転復元口径14.0cm。口縁部の約1/6が残存。外面の口縁部下に回転させながらの強いナデが施されており、特徴的なへこみ状を呈している。表面のカーボンは銀色の光沢をもち、全体的に軽く硬質な印象。器壁の立ち上がりは緩い。13世紀中頃と考えられる。

●瓦器小皿（図21-45・挿22-17）

反転復元口径8.2cm。内外面とも摩耗がすすみ、調整は不明瞭。底面外に指オサエの痕跡があり、後ナデている。

その他

●瓦器碗片

合計28片が検出されている。12世紀後半のものが少数あり、大方は硬質でやや口径の小さな13世紀後半から14世紀にかけてのものである。

ＳＤ３の遺物はＳＤ２の遺物相とあまり変わらない相を呈する。およそ13世紀代の瓦器片を中心とする。

ＳＤ４

ＳＤ４は削平にあっており、深さは僅か２cm程度しかなくクランク状を呈しているが、一連の溝の一部であると思われる。幅はどの部分でも約15cm程度で均等、埋土は灰褐色砂質土の一層である。残念ながら遺物の出土はなかった。南西部分は途切れているがさらにいずれかの方向へ延びていたものと思われる。また北西部分にやや特徴があり、東西方向の溝が90度折れ曲がって南北方向に向きを変えている。このことから一連の溝は格子状ではなく、コの字状もしくはクランク状の溝が多数連結し合った形状を呈していたとも考えられる。

土壙

ＳＫ２

調査区Ｂ１の北西端では調査区の西側が落ちていく境界付近において、性格の不明瞭な土壙が検出されている。残念ながらその大半は旧校舎に関すると思われるコンクリートの構造物によって壊れており、その全容をつきとめることはできなかったが、平面では東西約５ｍ、南北3.5mの隅丸方形を呈し、さらにこの中心からやや西よりには２×1.2mの方形の地山がそのまま残っていた。見方によっては、方形の地山の周囲を断面Ｕ字状に溝を掘って巡らせたとも思える。埋土は暗灰褐色砂質土の一層であるが、この土は柱穴のものに類似性があると思われた。遺物はなかったが、腐食した木杭の痕跡があった。資料が少なく不明であるが、埋土の状況と浮島状の部分が存在することから池状の施設とも思われる。埋土は黒褐色砂質土の一層であるが、中から瓦器碗片を検出している。(図14-2)

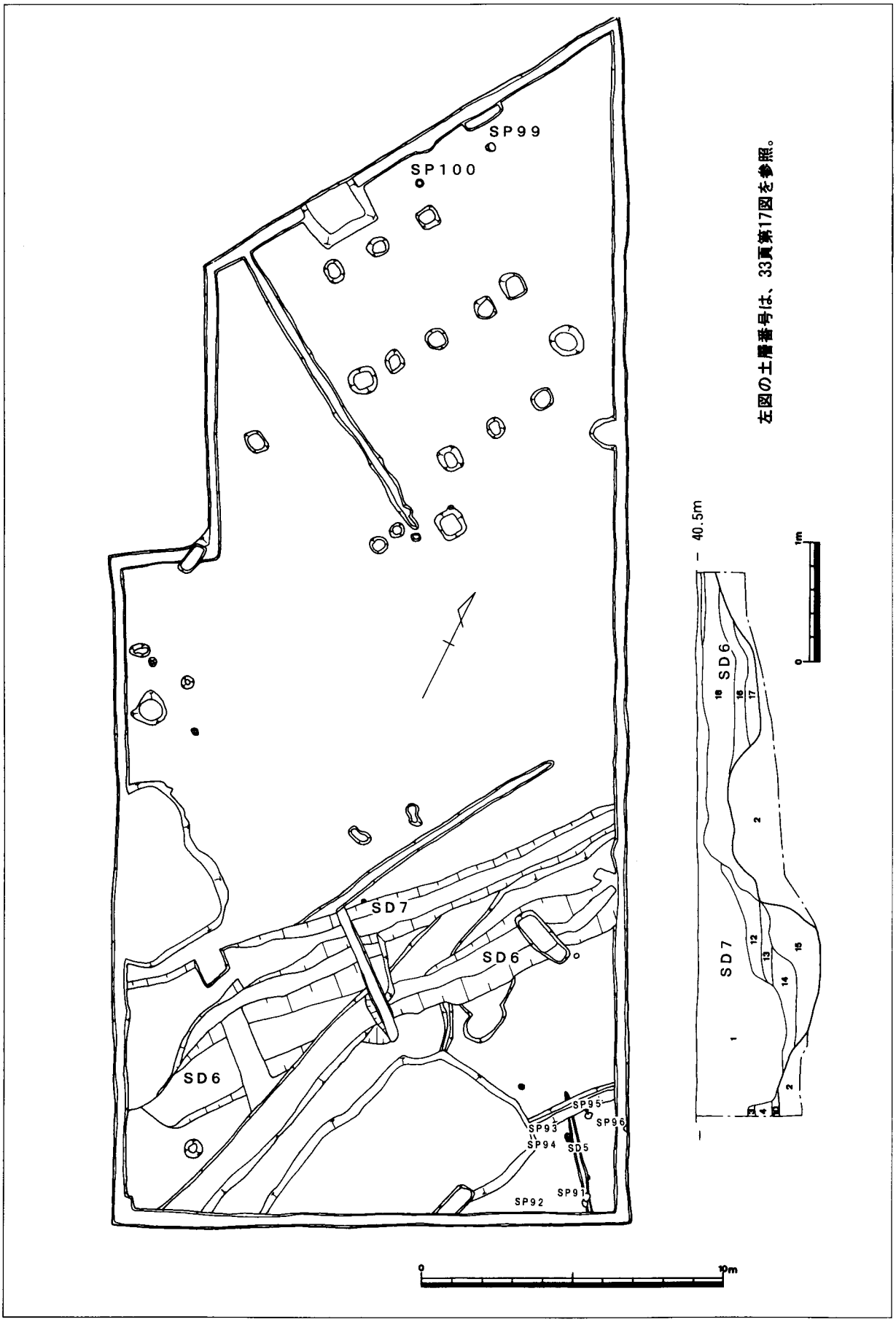
調査区Ｂ２

先述の通り調査区Ｂ１の反転掘りとして７月31日より調査区Ｂ２の機械掘削を開始した。調査区Ｂ１に接続する南壁付近は同様の様相を呈し柱穴と溝の検出をみたが、調査区Ｂ２の中央付近には二本の大きな溝ＳＤ６・ＳＤ７が検出された。本調査区の大半であるＳＤ７より北側は、地表下約１ｍ程下がった状態で検出されそのまま北壁まで続いていた。この部分は近世頃から水田であったようであるが、コンクリート片等を多量に含んだ盛土を行う造成工事でグランド面積を拡大していったことがわかった。(図10-1)

基本層序

一段高くなっているＢ２区の南側は調査区Ｂ１と全く同様であるが、地表下約１ｍまで下がる北側は西壁・東壁によって観察される。かなり削平にあっているものの、最も北側で柱穴らしきピットが２基検出されている。中世においては、この北側はある程度一段低くなっていた状況であったと思われる。その高さは小学校の北側に隣接する水田面の比高が参考になると思われる。検出された地山面は大きく削平され、先の２基のピット以外皆目遺構は存在していない。一様に地山面上に拡がっているのは近世期以後のものと思われる耕作土層⑩であり、この比較的新しい時期に、何らかの理由で旧の地表面を大きく削り込んで水田面を形成したものと思われる。状況から機械等を使って行ったかも知れない。

また西壁東壁ともに調査区を左右に横断する大きな溝ＳＤ６とＳＤ７が観察される。西壁の土層は先に触れた通り、調査区Ｂ１西壁の様相とよく似ている。つまりは規模の大きな二つの溝の断面に見える



第19図　調査区Ｂ２平面図

土層がそのまま調査区Ｂ１西壁であるとすれば、近世前期の溝であるＳＤ７が両調査区の境界付近でやや方向を変え調査区Ｂ１の西端を南北に縦断していることになる。これは調査区Ｂ２西壁の中央部分や逆に右側（北）部分を観察した際、ＳＤ７の断面の土層や、調査区Ｂ１西壁の様な土層が全く見られないことからも示せるところである。

遺構

調査区Ｂ２では調査区Ｂ１に接する南半分で調査区Ｂ１で検出された遺構群とほぼ同様の遺構（柱穴・溝）を検出している。北側は一段低く落ちており２基のピット以外全く遺構はなかったが、この地形差を分けるかの様に新旧の大きな溝遺構が調査区を南北方向に横断する状況で検出された。

ＳＤ５

調査区Ｂ１と接する調査区南端において、先述の溝群とほぼ同種の溝ＳＤ５を検出した。約15cmの幅を有するが、深さは最大約30cmで断面Ｖ字状であった。深さに関してはこの部分における削平が比較的小さかったため良好に遺存したものと思われる。N45Eの方向性を持って調査区Ｂ１北端のＳＤ３に接続するようであるが確認できなかった。埋土は暗灰褐色砂質土の一層で、埋土より13世紀後半から14世紀前半代を示す多数の瓦器片が検出された。また埋土を掘削した際、下部より柱穴ＳＰ９１・ＳＰ９２・ＳＰ９３・ＳＰ９４を検出している。これによって一連の柱穴を伴った遺構の年代は限定的となるだろう。

●瓦器碗

口縁部付近の残存で30%である。内外ともカーボンがよく残っており、器壁は厚手である。内面口縁部に無数の横方向のヘラミガキの痕跡が観られる。特徴から12世紀中頃のものと考えられる。

●瓦器碗（図21-46・挿22-6）

上記瓦器碗とほぼ同じ内容。

その他

●瓦器碗片（図21-44～50・挿22-2.4.7.14.15,16）

細片を含め48片検出している。７片は口縁を有したものである。個々年代的な特徴を示しており、12世紀後半から13世紀末のものが存在している。高台を残した底部の破片は４片存在しており、いずれも13世紀後半のものと考えられる。

●土師器片

32片を数えたが、いずれも極小さな細片ばかりで観察には耐えない。

●鉄片

細長い紡錘型でいずれも中央に空洞がある。完形のものはなく皆壊れたものであるが全体に酸化鉄が見られる。元来半分づつのものを一つに溶接した上で穴をあけたものらしい。また両端部を尖らせているのは、機能面における工夫の跡と思われる。

ＳＤ６（図14-4）

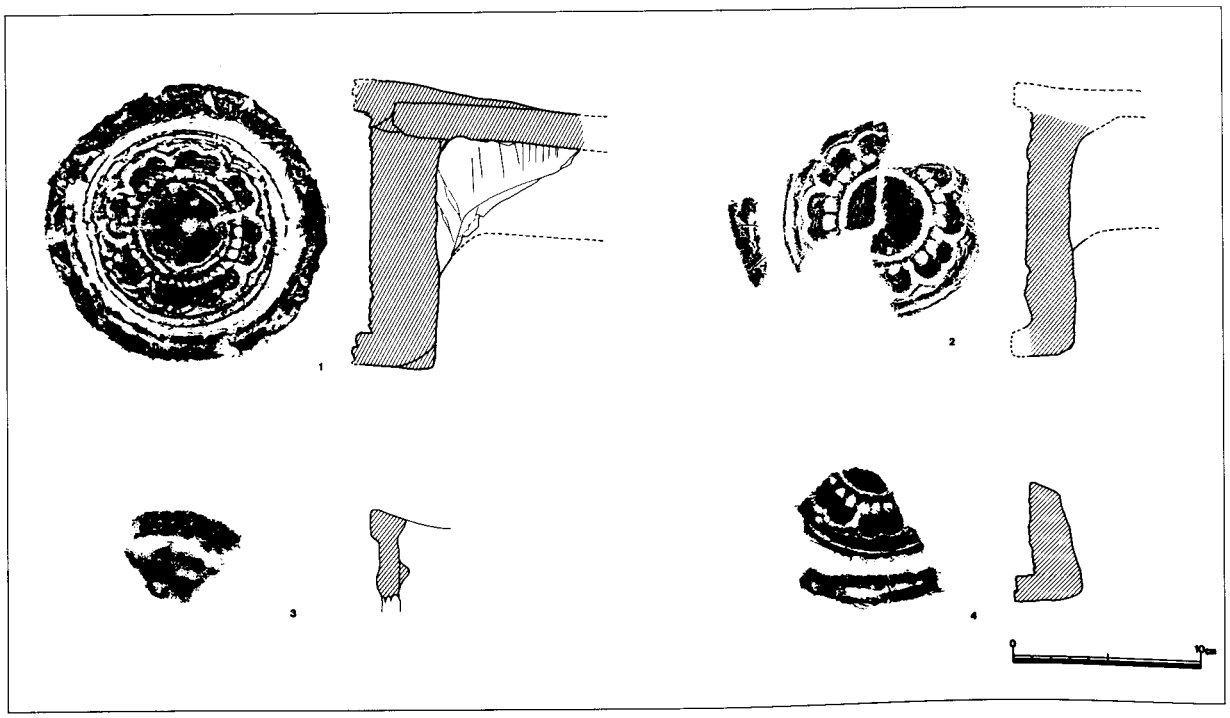
調査区Ｂ２の中央やや南よりには、平行しながら東西に横断する二本の大きな溝が検出された。ＳＤ６はこのうち南側の一本であり、東側では南から北に向って落ちる部分の柱穴の存在する高い部分に見られ、中央付近では後述するＳＤ７に切られて交わっている様な状況を呈している。幅はおよそ60cm程度で深さは遺構面より約40cmを測り、埋土は灰褐色砂質土を中心として、図示はし得なかったが13世紀代の中国青磁碗や東播系こね鉢、瓦質の羽釜等13～15世紀代を示す土器片を中心に検出している。中でも中央付近では東円寺に使われた軒丸瓦片一片を検出したことは特筆される。この瓦はこれまで知られた東円寺瓦よりやや年代の下るものであり14世紀代のものではないかと思われる。出土土器には多少年代幅が広いことから、この溝が存在した期間も割りと長かったと思われ、その後15世紀の後半頃に水利上の何らかの問題が生じて、一段低位にあるＳＤ７を新たに掘削するつけかえ工事を行ってその寿命を終えたと思われる。

ＳＤ６の遺物

●軒丸瓦（図17-5・挿20-4・22-33）

東円寺で使われた軒丸瓦の瓦当部分である。中房部分および丸瓦部分は失われており、全体の約30%程度の残存である。内外ともに摩耗しており、蓮子は不明瞭である。現在知られる12世紀から13世紀頃の東円寺軒丸瓦の内、省略型と呼べるタイプである。

87-1区でみつかった１例と同笵であり、瓦当部の厚さは3.2cmと前記92-1区のものに比較してかなり薄い。外径は約14.3cmでありやはり若干小振りである。92-1区のものをさらに簡略化してものと思われるが、基本的な部分は共通している。相違点は①中房を区画する圏線が92-1区のものが２重八稜形であるのに対して不正円形の１重であること、②中房の範囲の圏線が１重であることである。



第20図　東円寺軒丸瓦

相対的にみてやはり94-1区のものが92-1区のものに対して後出するものと思える。

また現在のところ、これら東円寺で使用された瓦を製作し焼成した遺構等については、一切わかっていない。

東円寺軒丸瓦について

東円寺で使用されたと思われる軒丸瓦は現在３種類知られており、複弁蓮花文軒丸瓦が２種類と巴文軒丸瓦である。

複弁蓮花文軒丸瓦については第19図の様に、創建時のものと思われる平安時代末期の12世紀末頃のものと、これを若干省略したタイプの２種類がみつかっている。前者は既に３例が知られ、そのうち92-1区では掘立性建物の根石としてほぼ完全な形で出土している。後者は87-1区の調査でみつかった１例が知られるのみであったが、(挿20-2) 今回で２例目となった。

●92-1区で検出された軒丸瓦について (挿20-1)

瓦当部の厚さは3.4cm、外径は15.7cmを計る。八稜形の凸線と圏線によって２重に区画された直径５cmの中房の内には１＋８個の蓮子が配されている。中房のまわりには不規則な鋸歯文がめぐっているが、これが特徴といえる部分であり、類例に岸和田市犬養堂廃寺のものがあるが、これは複弁に対して４つを数えることができ、本来複弁に対して２つ存在する子葉を２倍表現したものかもしれない。この鋸歯文の外側には子葉をもつ八葉の簡略化された複弁をめぐらせているが、この蓮弁は非常に短いのが特徴である。間弁は形骸化され、各々がつながって蓮弁を覆うようにめぐるだけのものとなっている。その外側には基本的に２条の圏線がめぐっているが、この圏線は数カ所で途切れながらも螺旋状に作られているため、部分的に３重の圏線となる箇所が存在する。内区より約１cm高い外縁部には基本的に３条の圏線が階段状にめぐる。造りは雑略化しており、接合部への粘土の充足不足がみられる。(挿20)

●瓦質羽釜 (図21-52・挿22-10)

反転復元口径は25.4cmで、残存は全体の約５％程度である。鍔部は器壁に対して垂直方向である。羽釜口縁に特徴があり、段はなく丸く内湾し器壁は整っている。その口縁外部には幅約１mm程度の極めて細い沈線が巡っている。15世紀から16世紀頃の年代が考えられるが、形態は古相を呈している。また飯炊き用のものとは違う用途が考えられる。

●瓦質羽釜 (図21-53・挿22-12)

復元口径は22.4cm。内外ともに摩耗が激しく調整は不明瞭である。段もはっきりしないし、口縁端部を破損している。鍔は細く反り上がっている。特徴から16世紀末頃のものと思われる。

●瓦質羽釜 (図21-51・挿22-11)

復元口径は24.2cm。内外とも摩耗しているが、口縁内面は強い水平方向の横ナデが見える。鍔は厚めで反らない。上記瓦羽釜よりは古い形態と思われる。

●瓦質甕 (図20-34・挿22-13)

復元口径は20.0cm。口縁部分のみ全体の３％程度の残存である。僅かに残る体部には平行タタキ目が見える。口縁外面は短く外反するが、おそらく指一本による回転オサエによって口縁外面にくぼみをつけ、同時に口縁内部を外へ押して外反させたものだろう。口縁端部は工具によって切り揃えて整

形した後、回転ナデしている。15世紀代に比定できるだろう。

●その他

瓦器碗破片多数、瓦質の甕の体部、瓦質の甕の口縁部、瓦質の甕の底部、瓦質のイイダコ壷のつまみ部分、丹波の甕の底部、備前甕の体部、紀伊系の白土器の碗底部、白土器小皿の底部、青磁碗の口縁部（蓮弁の幅広く、13～14世紀頃）

ＳＤ６の流路は調査区の中に検出された元来の微高地の周囲に沿って、大きく弧を描いている。一段高かった部分には建物群が存在していたわけであり、ＳＤ６はその外縁を巡っているようである。ＳＤ６の年代決定は難しいが、あるいは推定される東円寺の周囲には大きく溝が巡っていたのかもしれない。

ＳＤ６の遺物の年代幅は広く、13世紀以降16世紀ぐらいまで溝として存在していたのではないだろうか。掘削当初の目的は不明である。この付近の建物が完全に失われて以後からは用水路として機能したものと思われる。

ＳＤ７

ＳＤ７はちょうど調査区の下がった部分をＳＤ６と平行しながら東西に横断する状況を見せているが、調査区の西端の土層を見ると、ＳＤ６をそのまま切っていることから、用途としてはＳＤ６と同じもので後代にＳＤ６を改修したものと思われる。幅は平均して約1.25mとやはりＳＤ６とほぼ同一である。深さに関しては遺構上部がこのＳＤ７と全く平行して重なりながら走っていた近代のコンクリート製の用水路で壊されているために確認はできないが50cm以上のかなり深いものだったのではないだろうか。埋土はＳＤ６のものよりも明るい明灰褐色砂質土である。埋土からは弥生のⅢ様式代の甕の小片をはじめ鎌倉期の瓦片、室町期の瓦片・羽釜等年代幅の広い遺物を含むが、中には17世紀後半代にもなる肥前陶器片も検出されているため、おそらくＳＤ６に替わって掘られた後江戸時代前期頃まで機能していたのではないかと思われる。また詳細な観察はできなかったが、明らかに小さな丸杭を約20cm程の間隔で使って護岸をした痕跡があったことからも重要な機能を果たしていたものと思われる。ＳＤ７より北側には江戸時代以降に新たに大規模に開かれた水田が拡がっているが、水田と関係がなかったとは思われない。

ＳＤ７の遺物

●肥前陶器碗（挿22-28）

高台高0.9cm、高台径は4.3cmを計る。碗の底部のみの残存で、明白色の断面を呈し、全体的に非常に軽い。肥前系呉器手と呼ばれるもので、17世紀中～後半の年代が与えられる。

●唐津碗（図18-15・挿22-31）

唐津の碗底部がわかる程度の残存状況で、内外ともに摩耗してしまっている。年代は16世紀後半頃と推定される。

●瓦質すり鉢（図20-36・挿22-30）

注口部付近のみの残存であり、口径その他を復元することはできなかった。内面にはオロシ目があり、注口部外面には強いナデ調整が見られる。全体は大きく摩耗し、カーボン等は剥落してしまっている。

その他

●弥生式土器甕の口縁部

口縁端部が短く、外反して上方に肥厚する特徴から第三様式の甕と推定する。

●瓦質羽釜の口縁部（図21-54・挿22-25）

口縁部の沈線は３本、鍔は短く反らない。14世紀頃。

●瓦質羽釜の鍔

摩耗甚だしい。鍔は反らず、薄く長い。

●瓦質羽釜体部破片

●軒丸瓦片

東円寺の蓮花文軒丸瓦と異なり、周縁部の突出が小さく、瓦当面は偏平である。また丸瓦部は多方失っているが、瓦当面との接続部分の形状は直線的で外反しない。特徴から巴文軒丸瓦と思われ、鎌倉時代以降のものである。

●丸瓦片

厚さ約2.1cm。内面に強い布目痕。外面はやや光沢がある。また外面端部の角を丁寧に切り落とす加工がされている。鎌倉以降の所産である。

●平瓦片

全体の1/3の残存で、厚さ2.2cmである。胎土は粗く、１mm程度の石粒が多い。平瓦については、厚さに上下ばらつきがあるが、2.2cm前後のものと、2.7cm程度のものが存在する。但しいずれも完形の例はなく、2.7cmの方は軒平瓦の破片かもしれない。

●平瓦片

1/10以下の断片で、厚さ約2.7cmである。胎土は密で、外面に離れ砂らしい粗砂が残る。あるいは軒平瓦片かもしれない。

●瓦器碗片

３片検出されているが、いずれも13世紀末から14世紀前半のものである。

以上、ＳＤ７の遺物はおよそ弥生時代中期のものから13世紀代の瓦器をはじめ、17世紀の陶磁器をも含んでいる。ただ、それぞれの検出状況の詳細は不明で、この溝の埋土の底にあったものか、あるいは上層にあったものかは残念ながらわからなかった。また前述したように、ＳＤ７はＳＤ６と交錯しており、また本来の溝の上部分を耕作土によって大きく削平されて判然としない。

調査区Ｃ

今回の調査の最後として、８月９日より８月30日の間、最も北端の位置に50ｍ×８ｍの調査区を設定して機械および人力掘削による調査を行った。調査区は東西に細長い形状で西側はやはり調査区Ｂ２同様に一段低くなっており、その境界部分に調査区Ｂ２における溝ＳＤ６・７に関係すると思える溝群を検出した。中央部分から東端にかけては旧校舎の造成に関する撹乱が多く見られ、特別な遺構はなかったが、地山面上に僅かに残る水田耕作の痕跡が見られた。

基本層序

層序に関しては調査区Ｂ２と大差は見られない。調査区中央より西よりに調査区を南北に横断する二本の溝が存在するところまでも調査区Ｂ２と共通しており、さらにこれを境界として西側はやはり一段低く落ちていた。この部分は遺構が見られない黄褐色粘質土の地山面の上に近世以後の耕作土とそれに伴う整地土が観られる。地山面は全く平滑で遺構も皆無であることから、やはり元来の遺構などがあったであろう面はこの検出面より高い位置に存在しており、大きく削られ失われたのであろう。また溝ＳＤ８よりも東側の壁面では、地山面を削って拡がる中世期の耕作土層が見られ、その上面を近世以後の耕作土層が削平している。東端は元来の地形が高かったために小学校の造成時に大きく削平された様子が観察される。

遺構

ＳＤ８

先述の通り調査区の西側は南北方向の二本の大きな溝（水路）を境界として一段低くなるが、この落ちる手前の高い部分にあるのがＳＤ８である。埋土は主に暗灰褐色の砂質土であるが、後代の削平のせいもあって、遺構肩部が明瞭に検出できずに、幅約90cm、深さ約28cm程度を測っている。調査区の中央で蛇行する等、後述するＳＤ１１とは違いをみせる。埋土の特徴からはＳＤ１１より古いものと思われ、またＳＤ８の埋土上には溝群ＳＤ９およびＳＤ１０が掘り込まれていることから、先述した調査区Ｂ２同様、このＳＤ８を改修する等してＳＤ１１以下の溝が新たに掘削されていったものと思われる。また果たして調査区Ｂ２における溝ＳＤ６に直接つながっていくものかどうか定かではないが、埋土からは鎌倉～室町期を示す遺物を検出しており、ＳＤ６との類似点は多い。

ＳＤ８の遺物

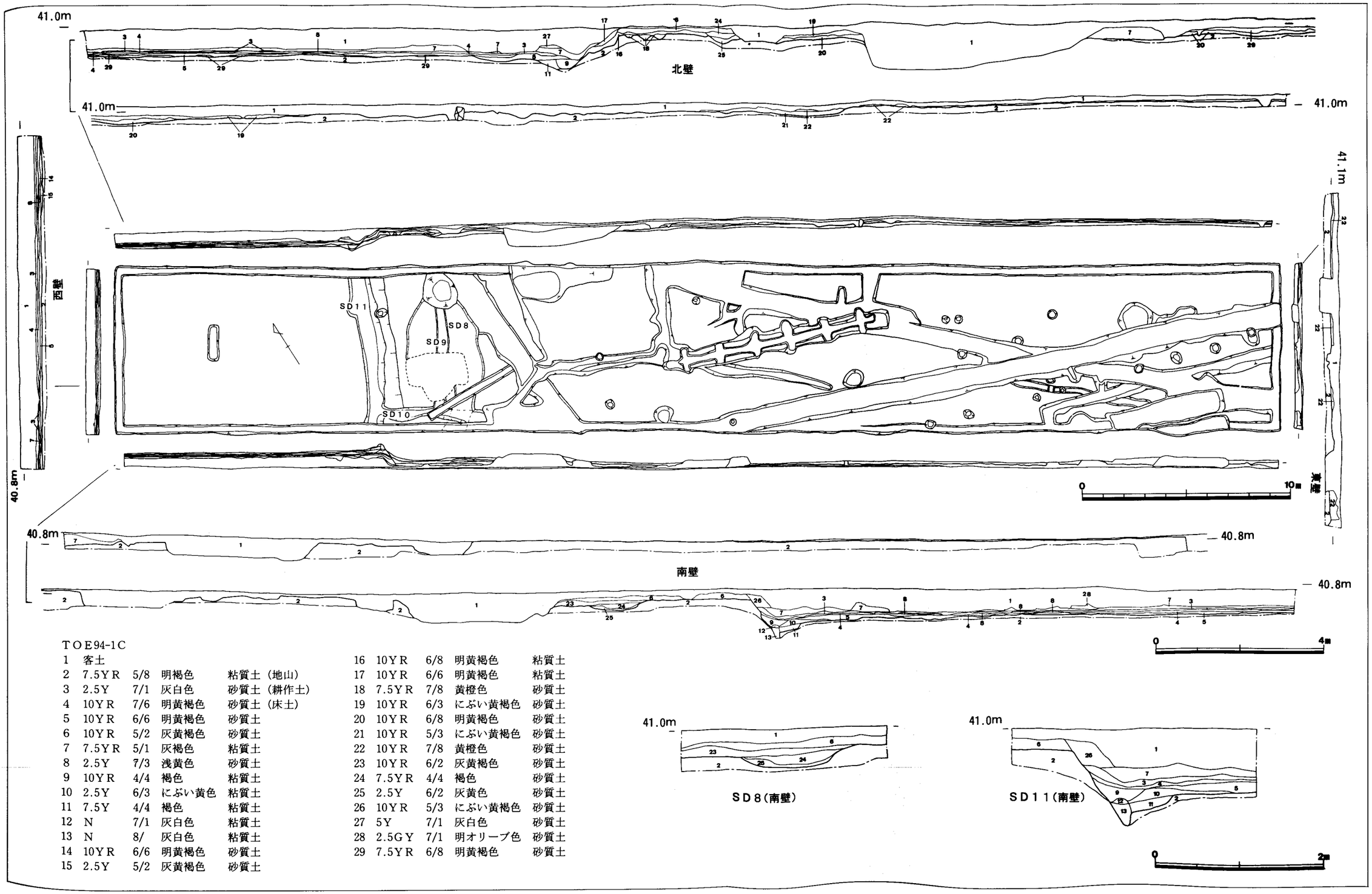
●雁振瓦片（挿22-34）

形状は雁振瓦の特徴を備えているが残存はその半分である。胎土は非常に細かく密で、全体に白っぽい。内外に明瞭な布目痕が見える。おそらく15世紀頃と推定される。

その他

●瓦器碗片

極めて微細な小片で、13世紀半ばのものであろう。



TOE94-1C

1	客土			
2	7.5YR	5/8	明褐色	粘質土（地山）
3	2.5Y	7/1	灰白色	砂質土（耕作土）
4	10YR	7/6	明黄褐色	砂質土（床土）
5	10YR	6/6	明黄褐色	砂質土
6	10YR	5/2	灰黄褐色	砂質土
7	7.5YR	5/1	灰褐色	粘質土
8	2.5Y	7/3	浅黄色	砂質土
9	10YR	4/4	褐色	粘質土
10	2.5Y	6/3	にぶい黄色	粘質土
11	7.5Y	4/4	褐色	粘質土
12	N	7/1	灰白色	粘質土
13	N	8/	灰白色	粘質土
14	10YR	6/6	明黄褐色	砂質土
15	2.5Y	5/2	灰黄褐色	砂質土
16	10YR	6/8	明黄褐色	粘質土
17	10YR	6/6	明黄褐色	粘質土
18	7.5YR	7/8	黄橙色	砂質土
19	10YR	6/3	にぶい黄褐色	砂質土
20	10YR	6/8	明黄褐色	砂質土
21	10YR	5/3	にぶい黄褐色	砂質土
22	10YR	7/8	黄橙色	砂質土
23	10YR	6/2	灰黄褐色	砂質土
24	7.5YR	4/4	褐色	砂質土
25	2.5Y	6/2	灰黄色	砂質土
26	10YR	5/3	にぶい黄褐色	砂質土
27	5Y	7/1	灰白色	砂質土
28	2.5GY	7/1	明オリーブ色	砂質土
29	7.5YR	6/8	明黄褐色	砂質土

第21図　東円寺跡94-1区調査区C平面図・壁面土層図

●平瓦片

５片あり、1.9cm～2.3cm。布目痕のあるものが多い。

ＳＤ８の遺物については検出点数が少ないが、13世紀以降15世紀頃のものが見られた。

ＳＤ９

ＳＤ９はＳＤ８の埋土上に検出された幅の細い溝で、状況から後述のＳＤ１０と同時期で同じ性格のものと思われる。幅は約30cm、深さは約30cmを測る。明らかにＳＤ８が堆積した後に新たに掘削整備されたことが窺える。ＳＤ１０とは直交する。埋土は暗灰褐色の一層で、遺物の検出はなかった。

ＳＤ１０

幅約30cm、深さ約25cm程度を測り、断面は逆台形を呈している。ＳＤ９とはほぼ直交しており、Ｂ１・Ｂ２区における溝群の状況に似ている。流路は東西方向で一方は南壁に消え、西側は後述の大きな水路ＳＤ１１に交わっている状況を呈す。埋土は灰褐色砂質土の一層で、遺物はなかった。用途については定かではない。また付近で柱穴は検出していない。

ＳＤ１１

調査区西側に向って一段下がっていく境界部分にはＳＤ８と平行して溝ＳＤ１１が南北方向に走っている。幅は約1.2m、深さは１m以上はあったと思われる。南北両壁面を観察すれば、埋土として遺構底部に暗茶褐色の砂礫土が見られるが、この上部に近世以後の耕作土が重なっている。ＳＤ１１の西側の肩部は調査区の西側に拡がっていたと思われる近世以後の水田によって削平されており、その耕作土によって埋まっている様子が窺われる。断面緩やかなＶ字状の溝底部には直径約４cm程度の杭を約40cm間隔で打ち込んで矢板などを貼って護岸したような痕跡が認められるなど、このＳＤ１１はかなりの規模と機能を持っていたと思え、溝というよりは水路である。埋土からは鎌倉末～室町初期にかけての瓦片等が検出されている。約１m東に検出を見たＳＤ８は状況からもＳＤ１１に先行するもので、おそらく14世紀よりも後、ＳＤ８の脇にこのＳＤ１１が新たに掘削され水路等として整備されたものと思われる。調査区Ｂ２の溝（水路）ＳＤ７との直接的な関係は不明であるが、状況を見ても連結する可能性が高い。

ＳＤ１１の遺物

●軒平瓦片

厚さ約2.7cmで、瓦当部の脱落した軒平瓦の破片と思われる。表面の摩耗が激しく、胎土は粗い。瓦断面に特徴があり、三層構造で真中に赤色化した胎土を挟む様子が観察される。

●丸瓦片

厚さ1.7cmを測り、古相を示す玉縁部の穴が観られる。胎土は密で、外面は光沢があり、内面には布目痕がある。

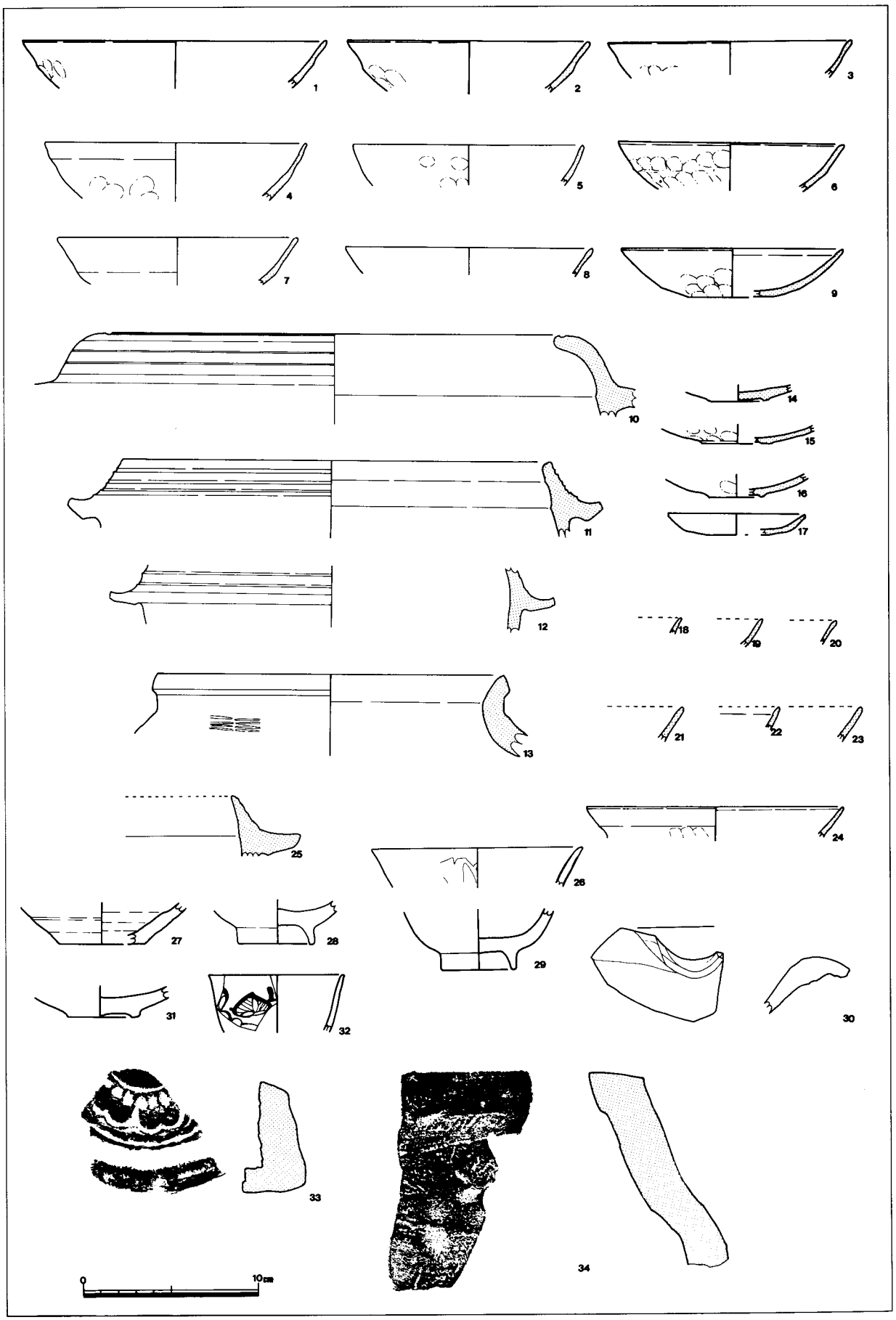
●丸瓦片

厚さ約2.0cmで、端部を丁寧に落として面をつくる整形を施している。

●平瓦片

合計８片あり、厚さ2.0～2.2cmのものが５片、1.4～1.7cmのものが３片である。前者はいずれも中世のものと考えられ、後者は江戸期以降のものではないだろうか。

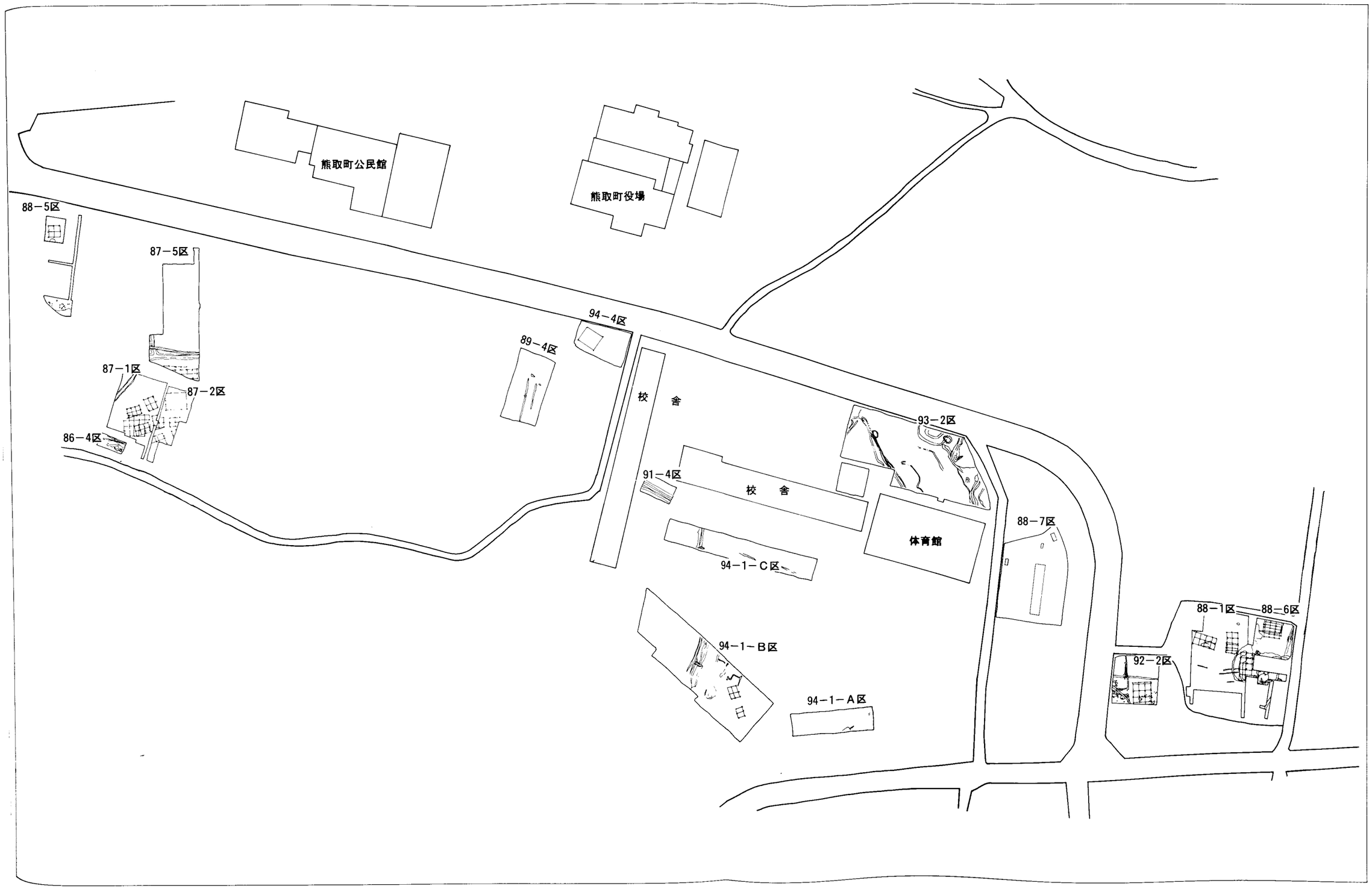
ＳＤ１１の遺物は中世の瓦が中心になったが、おそらく13世紀頃から江戸にかけてのものが含まれる。但しやはり残念ながらその詳細な検出状況は不明で、その遺物がそのままこのＳＤ１１溝の年代や性格を示すものとは確認できない。



第22図　東円寺跡94-1区の遺物

ま　と　め

調査区	遺構	梁間	桁行	柱間距離	方向	備考
TOE82-1区	SB1001	2	5	2.3×2.3	N38E	柱穴径0.35～0.45cmの不整円形 深さ0.3～0.4m・柱痕0.16～0.18cm 建物を囲む溝SD1007
TOE87-1区	SB-1	2間	3間	1.5×1.6	N－S	推定奈良期
	SB-2	2	3	1.7×2.5	N－S	
	SB-3	2	3	2.2×2.0	N－S	
	SB-4	不明		2.1×1.8	N－S	
	SB-5	2	5	2.8×2.8	N17E	二次焼成をうけた複弁蓮華文軒丸瓦
TOE87-5区	SB-1	2	5	1.6×1.5	N30E（梁）	13世紀の瓦器
TOE88-1区	SB-1	3	5	2.2×2.4	N32E（桁）	12世紀後～14世紀初
	SB-2	2	3	2.0×2.0	N37E	
	SB-3	2	2	2.1×2.0	N32E	
	SB-4	2	3	2.0×2.0	N45E（梁）	平行する溝あり
TOE88-5区	SB-1	2	2	2.1×2.1	N23E	唐草文軒平瓦
TOE88-6区	SB-1	2	3	2.0×2.1	N32E	平行する溝あり
	SB-2	2	3	2.0×2.2	N35E（梁）	
TOE88-7区	土壙・柱穴多数だが建物を断定できず					
TOE89-5区	SB-1	4	4	2.0×2.2	N18E	柱穴は全て丸か楕円（20～30cm前後） 根石に瓦（蓮華文軒平瓦）のある柱穴
	SB-5				N－S	８世紀代
TOE92-1区	SB-1	3	3	2.2×2.3	N25E	柱穴は正円　柱痕径15cm　深さ25～40cm 根石に瓦（蓮華文軒丸瓦）のある柱穴 平行する二本の溝 13世紀中～後頃か？



第23図　東円寺周辺における既往調査遺構平面図

第１節　既往の調査より

今回の調査をまとめるにあたっては、これまでの熊取町立中央小学校周辺における東円寺跡の調査結果について順に触れてみたい。(挿23)

１．85-2区

- 12世紀末～13世紀初頃の東円寺に使用された瓦片多数を含んだ溝、幅はおよそ1.5～2.0m。溝の掘削された年代は不詳であるが、溝内の瓦片には二次焼成をうけているものもみられる。
- 調査地点は東円寺の中心施設の推定地点である熊取町公民館前より南西約30m。(今回の小学校からは約150m西)

２．87-1区

- 85-2区検出の溝に連続すると思われる溝中に多量の瓦片。溝は幅約1.8m、深さ0.6m。14世紀代に堆積。
- 瓦には二次焼成のものが多く、省略型の東円寺軒丸瓦瓦当と唐草文軒平瓦も検出。
- 調査地点は85-2区の西に隣接、東円寺の推定中心地点に近い。

３．87-5区

- 遺物から14世紀代に堆積したと推定できる溝。溝中から巴文軒丸瓦や唐草文軒平瓦他多くの中世瓦片。
- 中世期の掘立柱建物は１棟、遺物から13世紀頃と推定、14世紀には耕地化。
- 瓦器はおよそ12世紀後半から13世紀中頃のものに限定。
- 他、周辺一帯が14世紀以降水田化した様子を観察。
- 調査地点は87-1区の北側、既往の調査の中で最も東円寺の推定中心地点に近い。(今回の小学校からは約200m程西)

４．88-1区

- 中世期の複数の掘立柱建物跡。遺物から13～14世紀代の建物と推定。
- 遺物に瓦がなく、瓦器碗が極めて多い。
- 熊取町立中央小学校の東側に隣接する地点に位置している。(今回の約100m東側)

５．88-6区

- 中世期の掘立柱建物２棟。遺物から14世紀初には廃絶して耕地化。
- 出土遺物には瓦類がなく、瓦器碗他中世の日常雑器類の出土量が多い。
- 他、開元通寶、天禧通寶、元豊通寶等古銭や、ふいごの羽口を検出。
- 88-1区の南に隣接、中央小学校の東側。(今回の約100m東側)

6．88-5区

- 柱穴80基。二次焼成の唐草文軒平瓦を根石にする柱穴あり。
- 瓦器、東播系こね鉢を出土する溝、幅約２ｍ、深さ0.4m、14世紀頃堆積と推定。
- 遺物は11～14世紀代、瓦器碗は13世紀後半頃。
- 調査地点は東円寺の中心施設があったと推定されている熊取町公民館前より約100m西(今回の小学校からは約250m西)

7．92-1区

- 掘立柱建物２棟、柱穴根石にほぼ完全な東円寺軒丸瓦を使用する例。この東円寺の蓮花文軒丸瓦は現在新旧２種類が知られ、そのうち古い方の代表例である。二次焼成の痕跡がみられる。
- 遺物の瓦器碗はいずれも13世紀中頃から14世紀にかけてのものに限定される。
- 14世紀以降は耕地化。
- 調査地点は88-6区の南側。(今回の小学校の約100m東側)

以上の各調査例から判明する事柄を簡単にまとめておく。

- 東円寺の推定中心地点では本格的な調査はされていない。
- 東円寺自体に関係する建物の遺構は検出していないが、85-2区をはじめ瓦溜のある幅約1.5～2.0mの溝が東円寺の推定中心地点の周辺を巡っているように検出されている。いつどの様な目的で掘削されたものかは不明であるが、遺物はおよそ11～14世紀のものに限定される。あるいは東円寺の外廓施設か。
- 東円寺に使用された瓦は推定中心地点（字名：東永寺、トヨ寺）より西側で行われた調査地点で検出された溝内に多く出土している。その溝も14世紀代に完全に堆積して以後耕地化する。この溝の中から出土する瓦も15世紀以降のものはみられない。
- 出土した瓦の内、およそ13世紀頃と思われるものは殆どが二次焼成をうけているようである。
- 東円寺に使用された軒丸瓦は現在３種類確認されており、複葉蓮花文軒丸瓦２種類と巴文軒丸瓦１種類で、蓮華文軒丸瓦の一方は簡略化されたタイプと思われる。
- 周辺において検出された掘立柱建物には、西側にあたる87-1区の調査の際に８世紀前半頃と推定される４棟が検出されたが、他では12世紀末から14世紀初頃のものばかりが検出されている。集落としての廃絶は応永の乱のあった13世紀末から14世紀前半が推測される。
- 14世紀以降、この辺りは断続的に耕地化しており、それ以前の遺構は殆ど埋積している。またこの間近世には大規模な削平も行われたと推定される。

第２節　今回の調査に関して

以上平成２年度から６年度にわたって、熊取町立中央小学校において行った埋蔵文化財発掘調査について概観した。

●最も古くは、93-2区で出土した縄文時代早期の石器であるが、残念ながら遺構に伴うものではなく、他にこの当時の生活状況を示すものは見つからなかった。93-2区の調査地点では他に時期不確定ながらもかなり古い自然流路が多く、中世以降において開発が開始する以前の自然状況がわずかながら偲ばれる。またサヌカイト製の石器剥片が検出されていることからは、単に狩猟が行われるだけの場所ではなく、石器を製作する集落が存在していた可能性も存在する。

●今回の一連の調査では弥生・古墳・奈良時代を示す遺構は皆無であり、遺物として弥生式土器の甕の口縁の破片が２点出土したにすぎない。奈良時代については、周辺の調査において須恵器や土師器等の遺物と遺構が検出されており、熊取町の開発が飛躍的に開始される前夜期と思われる。

平安時代から中世に関して

●今回検出された遺構は、94-1区においては大小の方形の柱痕と掘方をもつ構造物と、おそらくそれに付随したであろう棟持柱穴、93-2区ではこれらが廃絶した後に開発されたと思われる水田跡が確認され、壁面では時代毎の水田耕作の痕跡が観察された。他にも93-2区と同様の水田開発を示すものと思われる包含層が全ての調査区で観察されている。

●方形の柱痕に関しては、熊取町内での類例がなく、周辺市町での類例の報告を待ちたい。それが持つ意味等を追及することは有意義なのではないだろうか。

●東円寺の創建から隆盛に関しては、これまでの断続的な調査の蓄積によって平安時代末期から鎌倉時代前期頃と考えられており、94-1区の調査で検出された掘立柱をもつ構造物の年代は、出土した和泉型瓦器碗の観察からほぼ一致するとみられる。

●94-1区で検出された掘立柱構造物の形状とその他の遺構や遺物の総合から、東円寺創建当初の姿は、熊取町役場前の現水田付近を中心に熊取町立中央小学校の敷地にまでおよぶ広大な範囲を有していたと思われ、小字名等の伝承の信憑性を補強できる結果を得たといえるだろう。

●94-1区調査区Ｂにおいて検出された数多くの柱穴に関しては、その分布状況の検討から構造物の平面形態を把握することは困難である。
ＳＢ１・ＳＢ２にしても構造物の持つ方向が付近で検出された中世の溝群と同じであろうことが予想される程度であり、柱の正確な位置を断定するには及んでいない。

●94-1調査区Ｂ１で検出された柱穴１４・９７は柱痕の断面の検討から、それが故意に傾斜した状態で埋設された形跡が認められる。状況から切妻式建物の棟持柱かと思われる。このことから構造物の性格を読み取ることはある程度可能であると思われ、他の堀立柱の方形の柱痕と合わせて、神社等の神殿建築物が推測される。

●伝承される字名には、「住吉」等東円寺が神宮寺であったことを示すものが存在し、今回94-1区で検出された建物等の遺構は、全領域の東側に位置すると思われる社殿に関係するものではなかったかと思われる。寺院建造物を構成する屋根瓦は今回の一連の調査では極少量検出されたにすぎない。小学校の西約200m程の熊取町公民館前駐車場やその極周辺で行われた既往の調査では多量の中世の平瓦片が出土している。この地点は伝承と記録によって本堂等寺院中心施設が存在した場所と思われており、今回の調査地点である小学校は、東円寺および神社があったと考えられる敷地のうち、少なくとも屋

根瓦をもたない建物の存在した場所であったことが推測される。

●94-1区で検出された柱穴の殆ど総てにおいて柱痕が残存しており、状況から構造物は焼失したらしいことが推測される。

●方形の柱痕をもつ構造物に関して、その検出状況と遺物の年代幅から、創建当初の東円寺がおそらく極短期間のうちに瓦壊したのではないかという推測に関して、和泉地方における多くの中世寺院においても同様の経過が近年の調査等で判明してきており、特に前記の熊取町に隣接する泉佐野市中庄に存在した檀波羅密寺とは、その盛衰等多くの部分で共通するものと思われる。調査を重ねることによって東円寺は火災に遭って焼失したことが推測されるようになってきたが、年代的に考慮するに、1399年の応永の乱より以前の鎌倉時代中頃の泉南地域におけるなんらかの戦火もしくは天災によって、一時完全に本来の東円寺は失われたのではないか。また遺物の年代幅と土層の観察から、応永の乱があった14世紀末以後、その廃墟となった大部分は整理され、水田に変えられていったことがうかがわれる。この時以後本来の地形的起伏は削平され続け、旧建物の遺構は一部痕跡をとどめぬ程失われてしまったものと思われる。現在小学校および熊取町役場の存在する付近が一様に平滑であるのは、後代における断続的な開発によるものであろう。

●東円寺は、13世紀後半以降に大きく衰退して以後、その中心部分には規模を縮小しながらも寺院が再興し、応永の乱、天正の秀吉の根来攻め等を通して盛衰を展開し明治維新まで存続したが、今回の調査では、それらの時期の東円寺に関しては先述した様に若干の地理的なずれからか、該当する時期の遺物の検出量が、12～13世紀のものに比べて極めて少なく、殆ど成果をあげられなかった。

●94-1区で検出された各溝の年代は重要である。Ｂ２で検出された溝ＳＤ６とＣ区のＳＤ８が最も古く、遺物等からおそらく13世紀代に掘削されたものと思われるもので、東円寺との関連が考えられる。

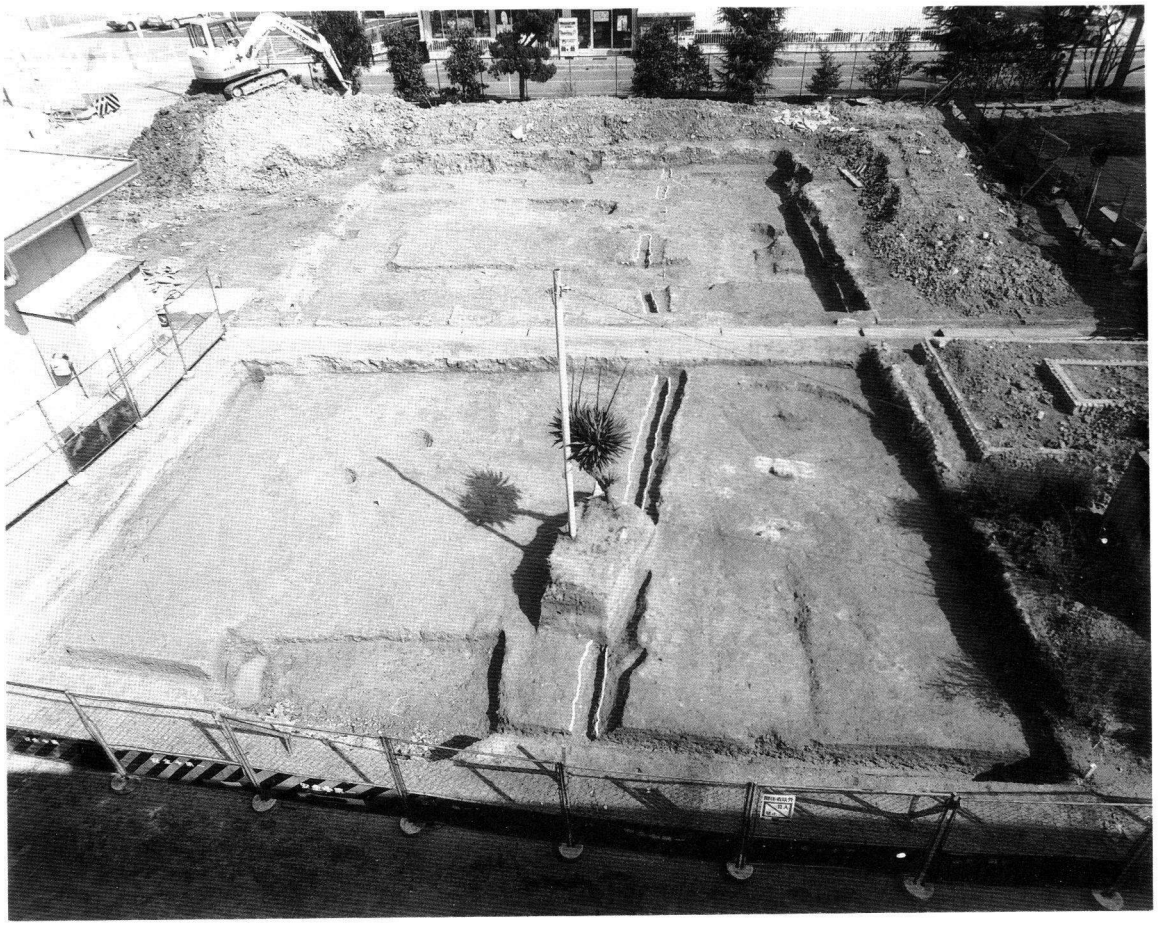
またその他の比較的幅の狭い溝群については、遺物として13～14世紀の瓦器しか存在しないことから、建物が廃絶した直後に掘削され極短期間に埋没したものであると思われる。溝埋土下から柱穴が多数検出されたわけであるが、前述した様に柱穴は、その状況から数種に分類することが可能であり、そこには或る程度の年代幅が想定される。またＢ２区南端にあるＳＢ２が比較的古い建物であり、この廃絶の直後にこの溝群が掘削された切り合いが観察されるため、これらの升目状を呈する幅の細い溝群は後続する建物に付随した溝である可能性も存在する。

次にＢ１・Ｂ２区で検出された柱穴および建物が14世紀を待たずに廃絶した後、93-2区の壁面で観察された様にこの付近で大規模な水田耕作が開始された。その後16～17世紀には付近でさらに大規模な水田開発が行われて、この時94-1区のＢ・Ｃ区でみられたようにＳＤ６とＳＤ８は改修されてそれぞれＳＤ７とＳＤ１１のように整備されたと思われる。

●今回の中央小学校における東円寺跡では、その建造物はおそらく13世紀代のもので、廃絶した後に大きな水路を伴う大規模な耕地化によって、整地されたことがわかった。水路は平均値30cmのものが縦横に細かく巡っていたようである。

図　　版

図版第1　東円寺跡90－4区

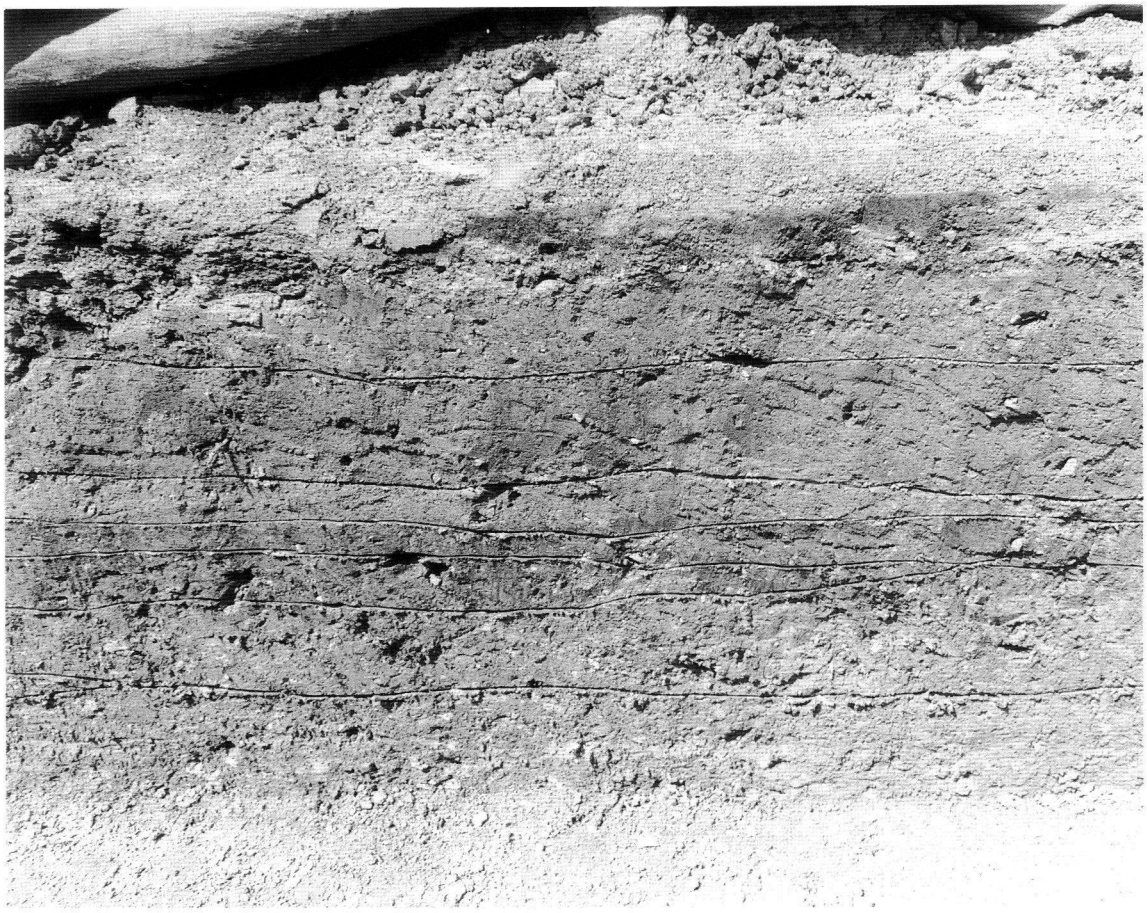


全景（南から）

南壁

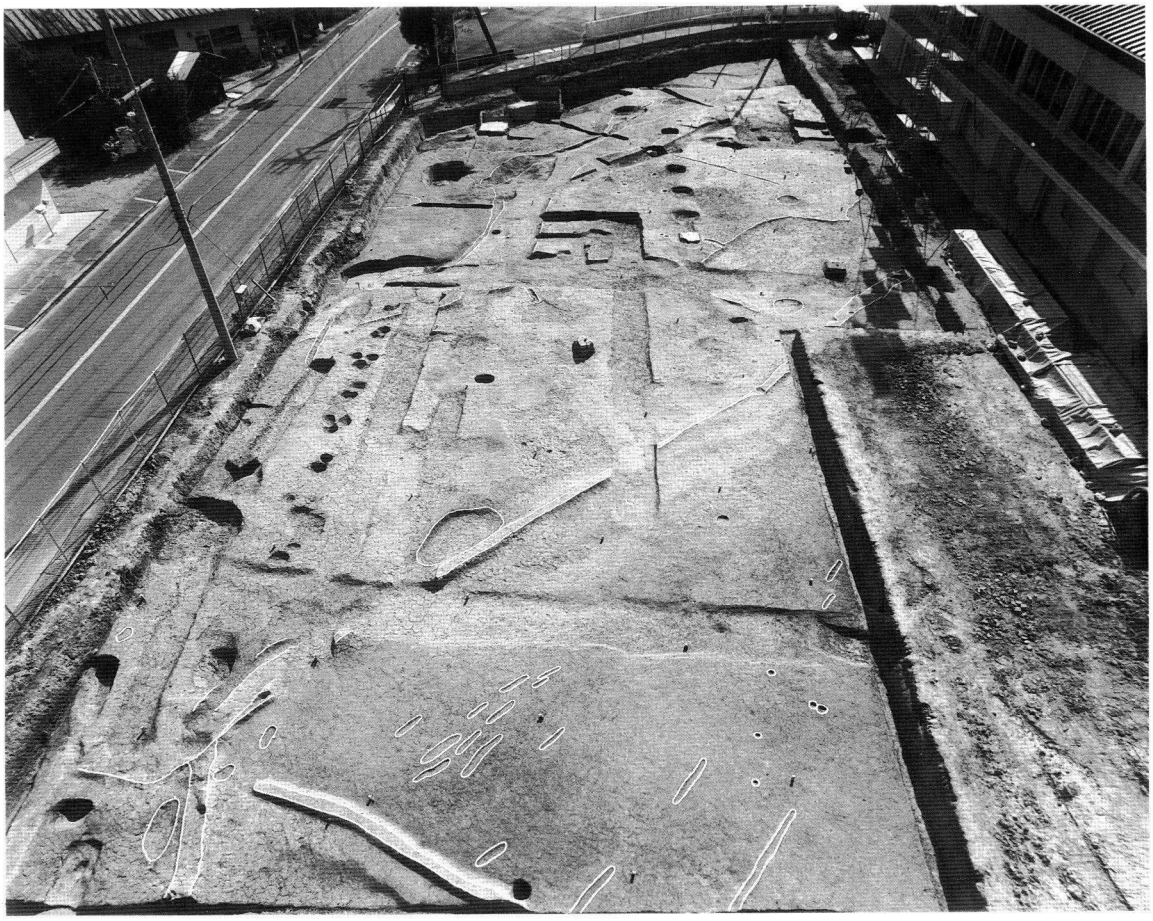
図版第2　東円寺跡91—4区

全景（東から）



南壁

図版第3　東円寺跡93—2区



全景（西から）

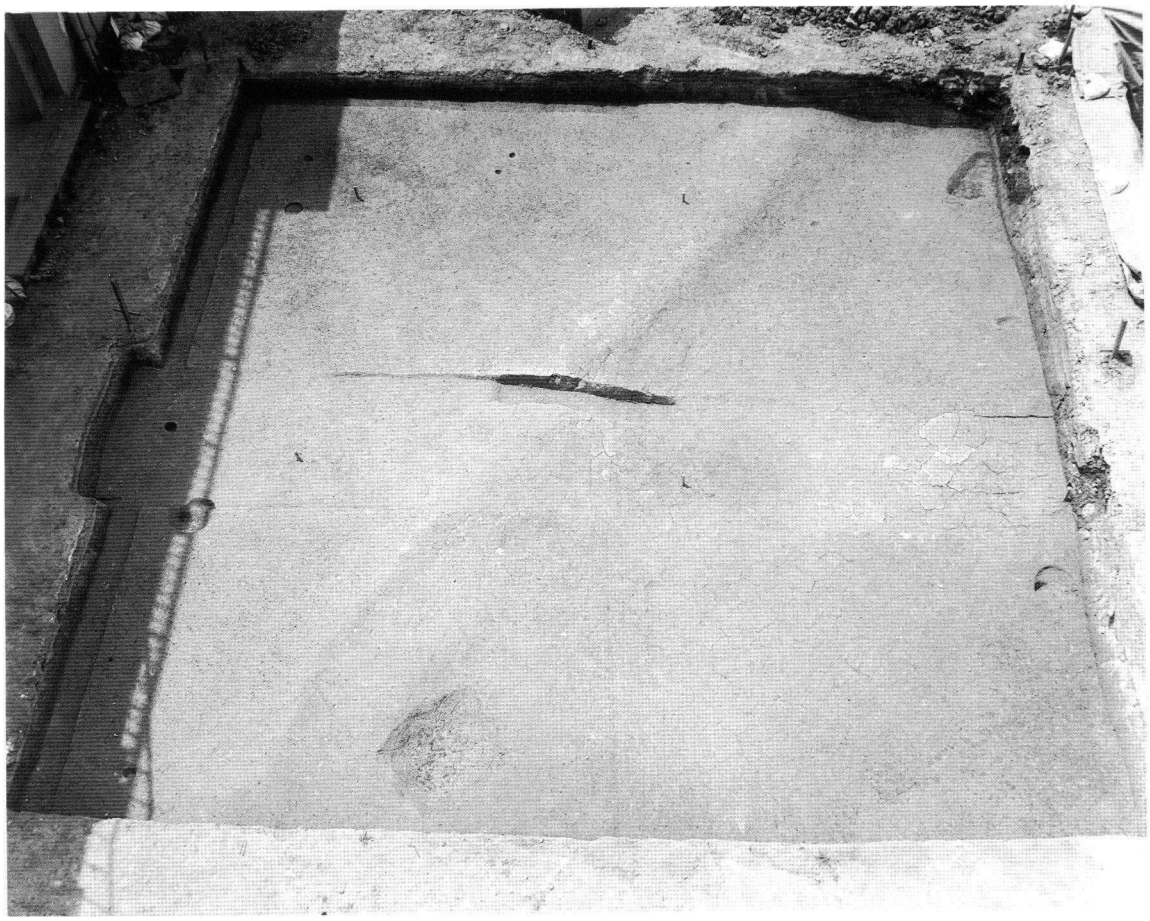
A区西壁

図版第4　東円寺跡93－2区

A区東壁

A区南壁

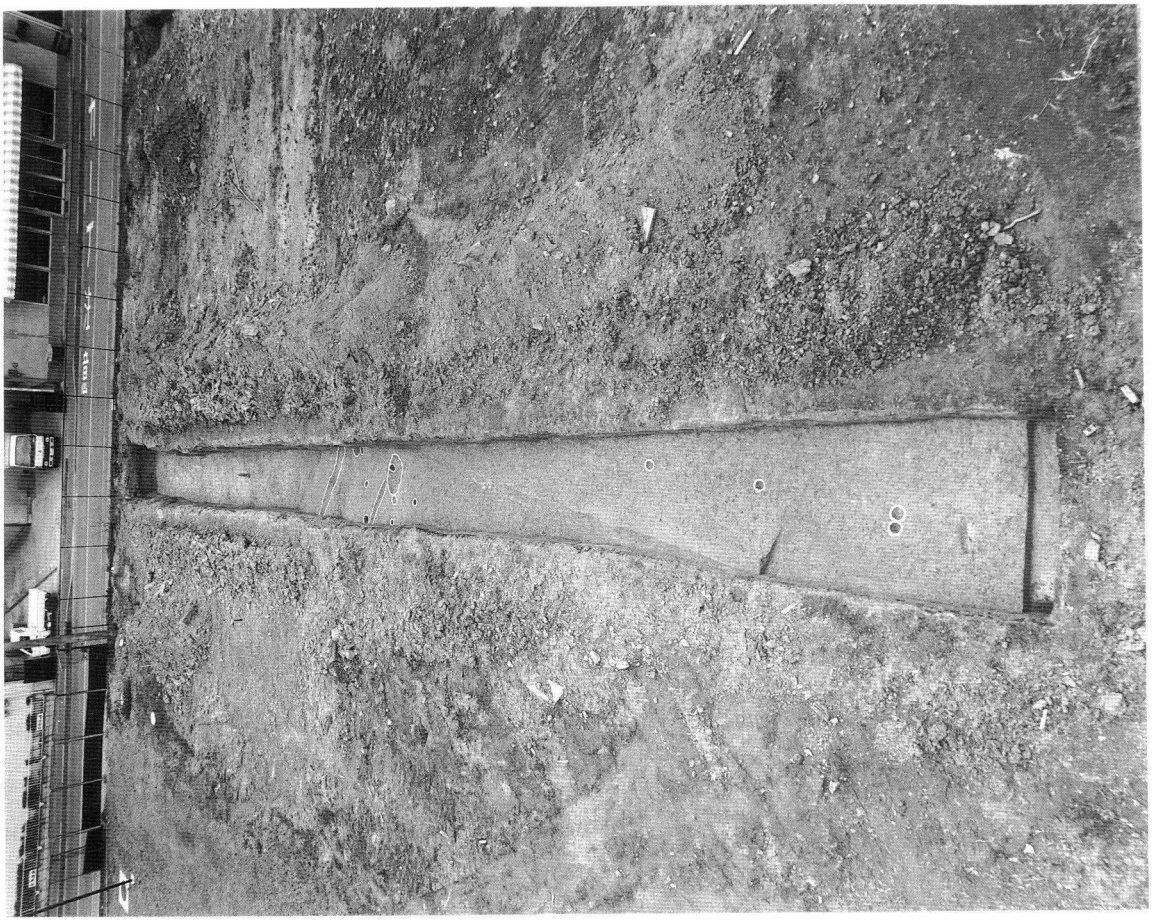
図版第5　東円寺跡93—2区



B区全景

B区西壁

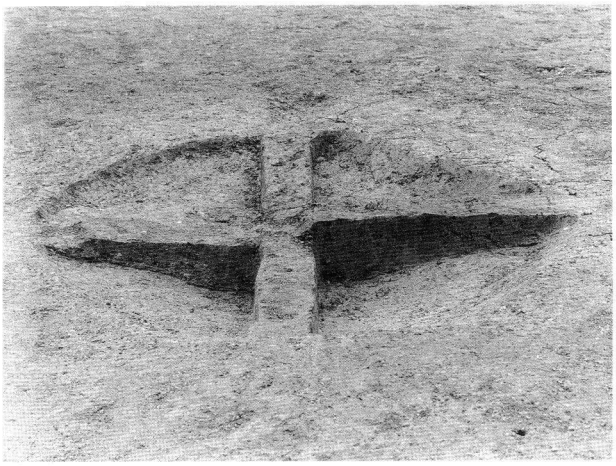
図版第6　東円寺跡93—2区



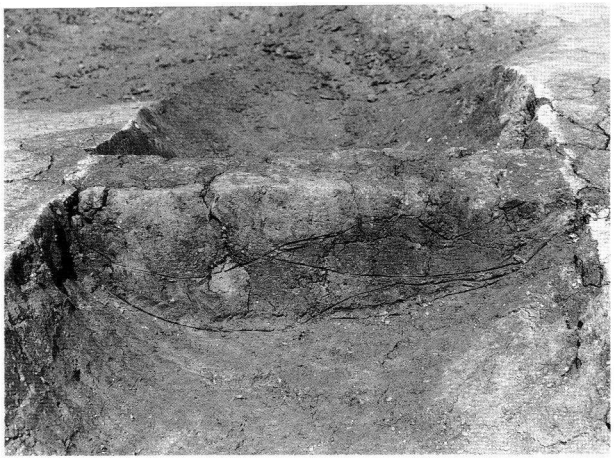
トレンチ１全景（南から）

トレンチ１西壁

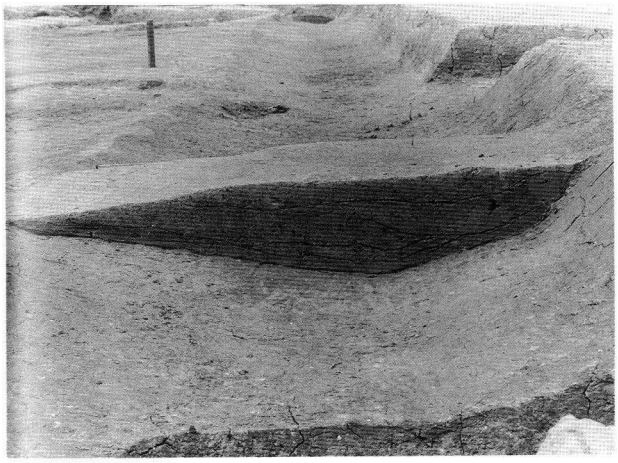
図版第7　東円寺跡93—2区



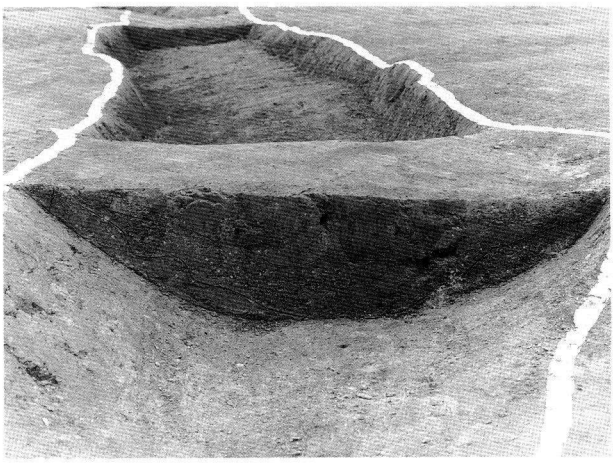
A区ＳＫ０１（南から）



A区ＳＫ０６（東から）



A区ＳＤ０１（南から）

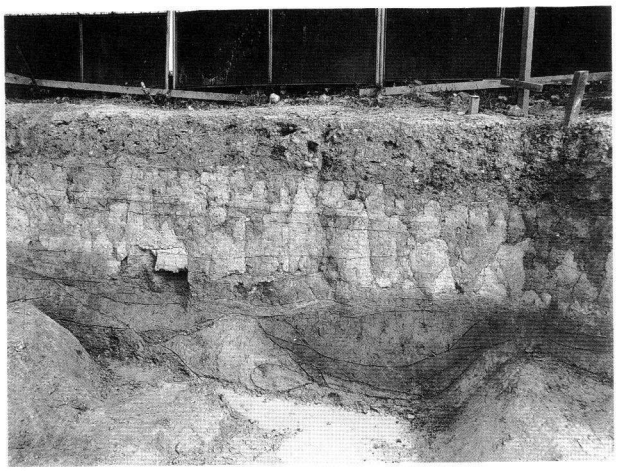


A区ＳＤ０７（西から）

A区ＳＤ０８（北から）

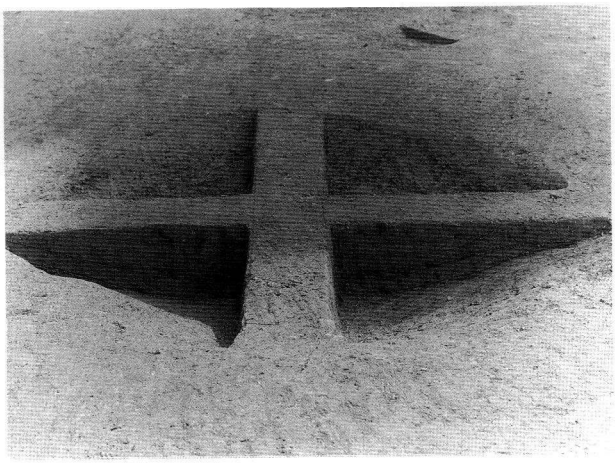
図版第8　東円寺跡93—2区

A区SD09

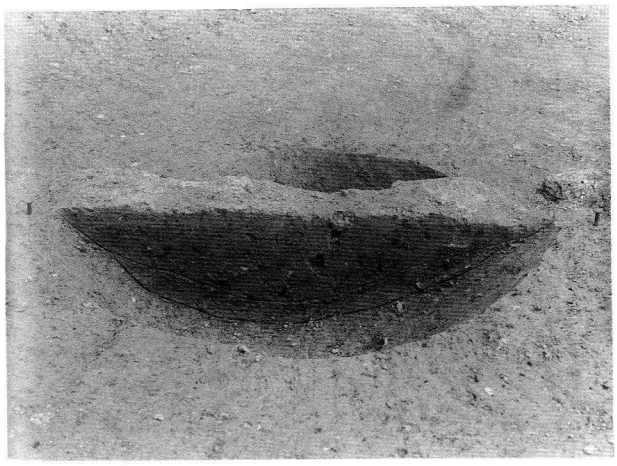


A区SD10

A区SD11

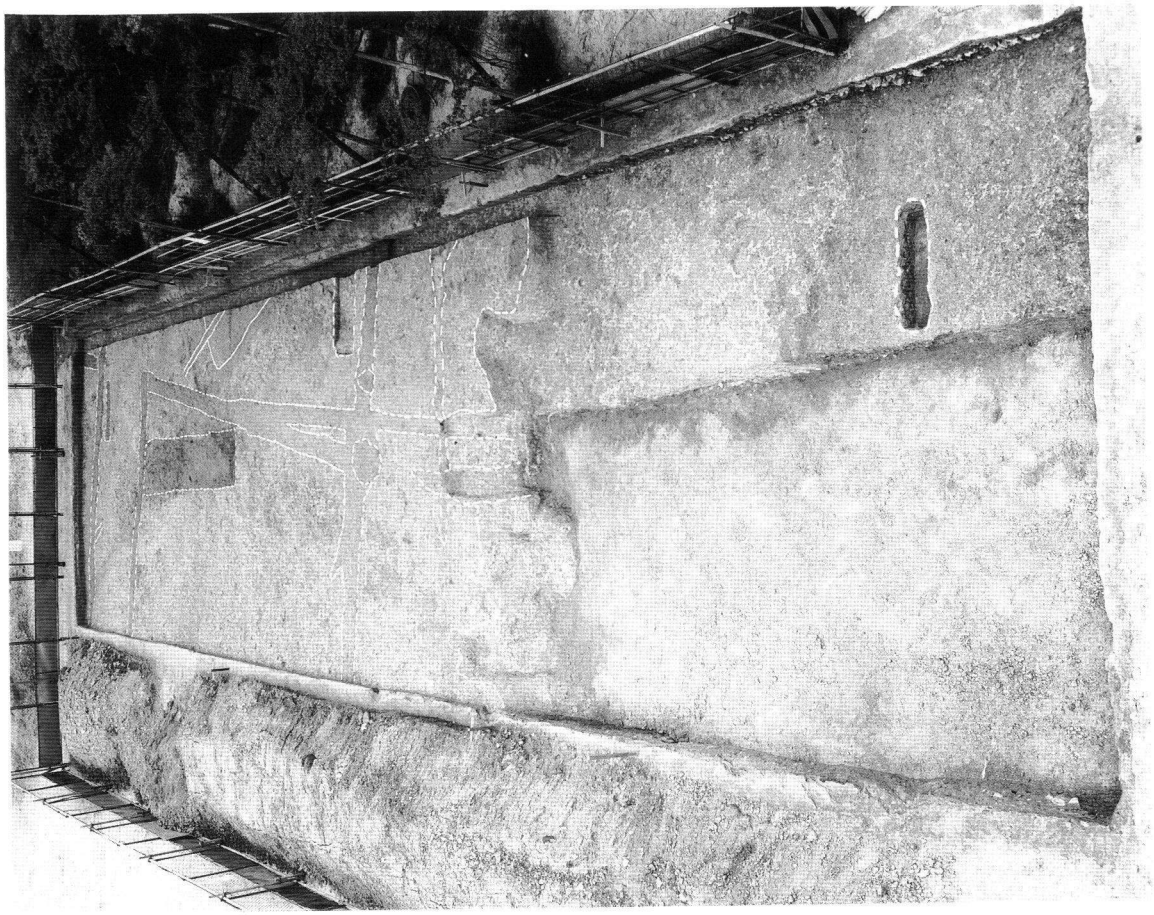


B区SK03



B区SK04

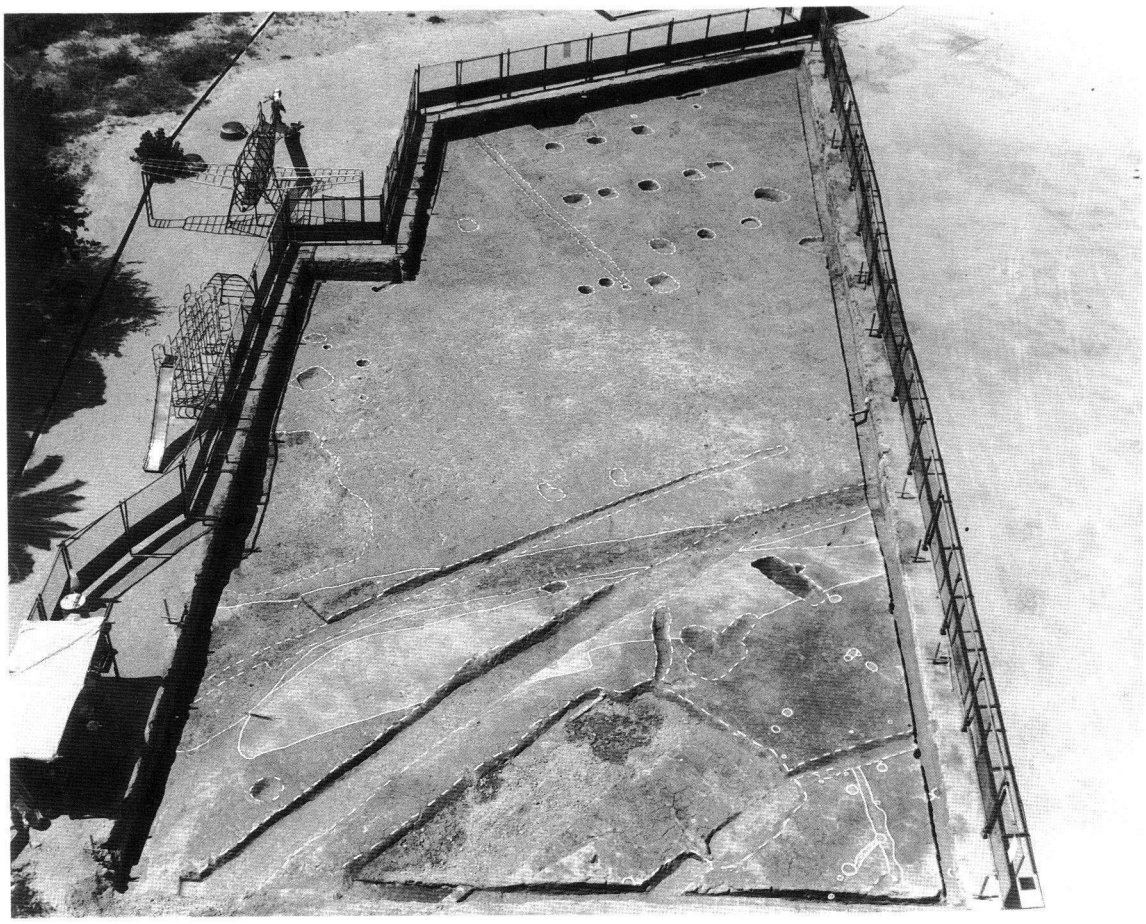
図版第9　東円寺跡94—1区



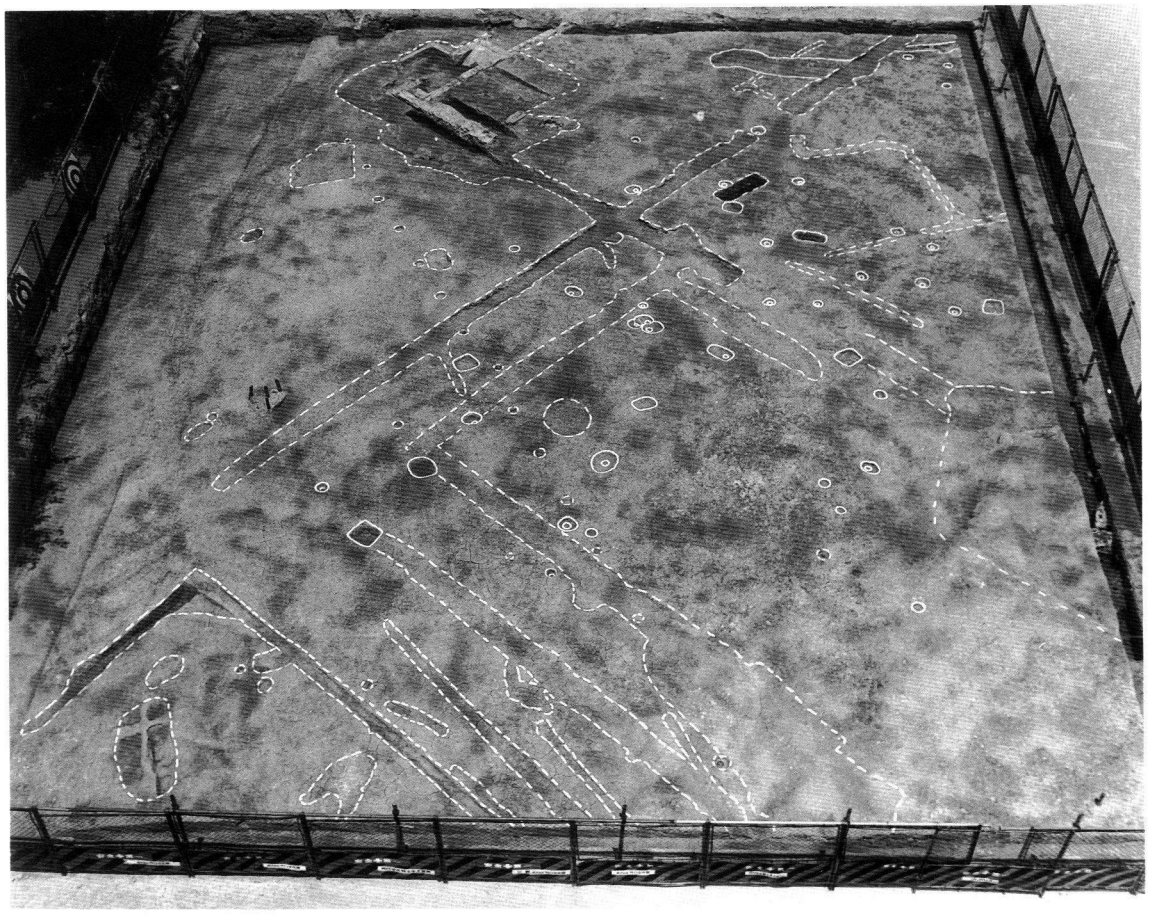
A区全景（西から）

C区全景（西から）

図版第10　東円寺跡94—1区

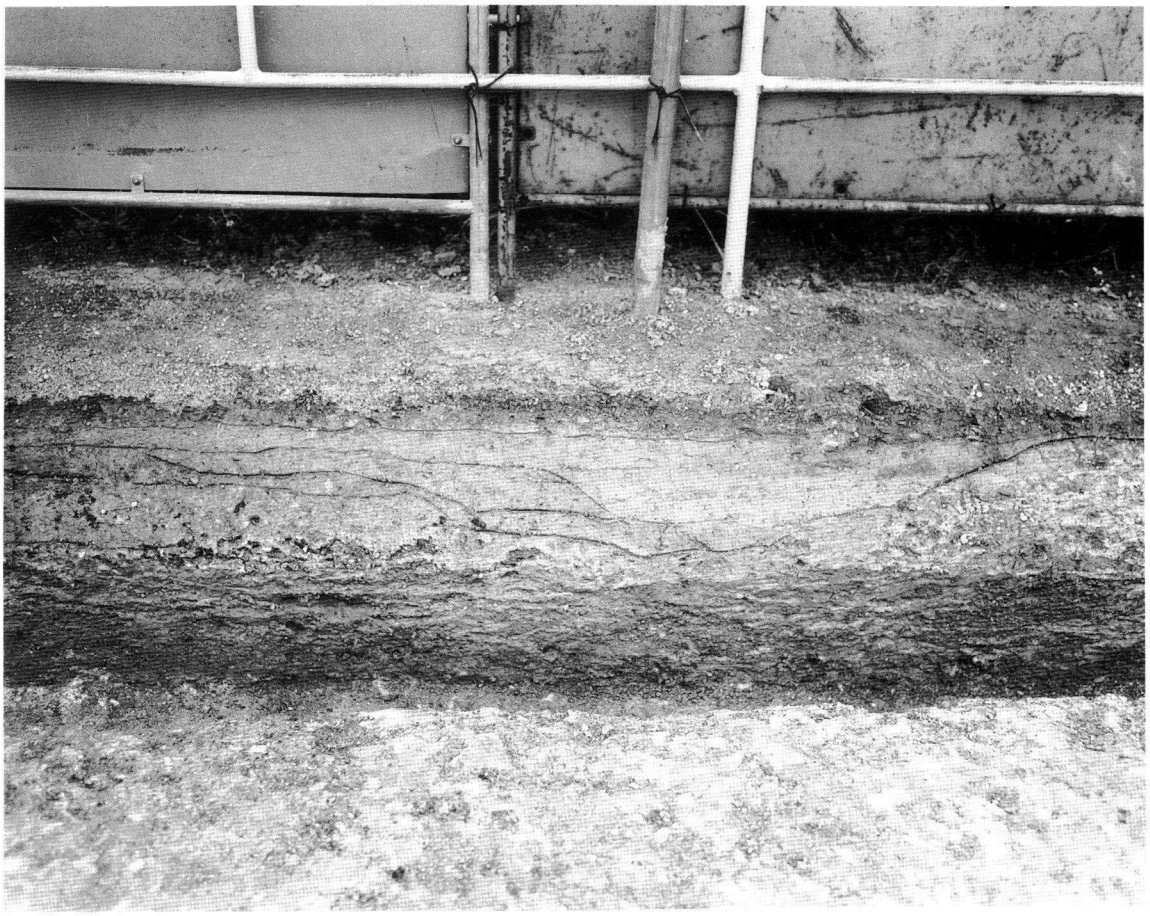


Ｂ２区全景（南から）



Ｂ１区全景（南から）

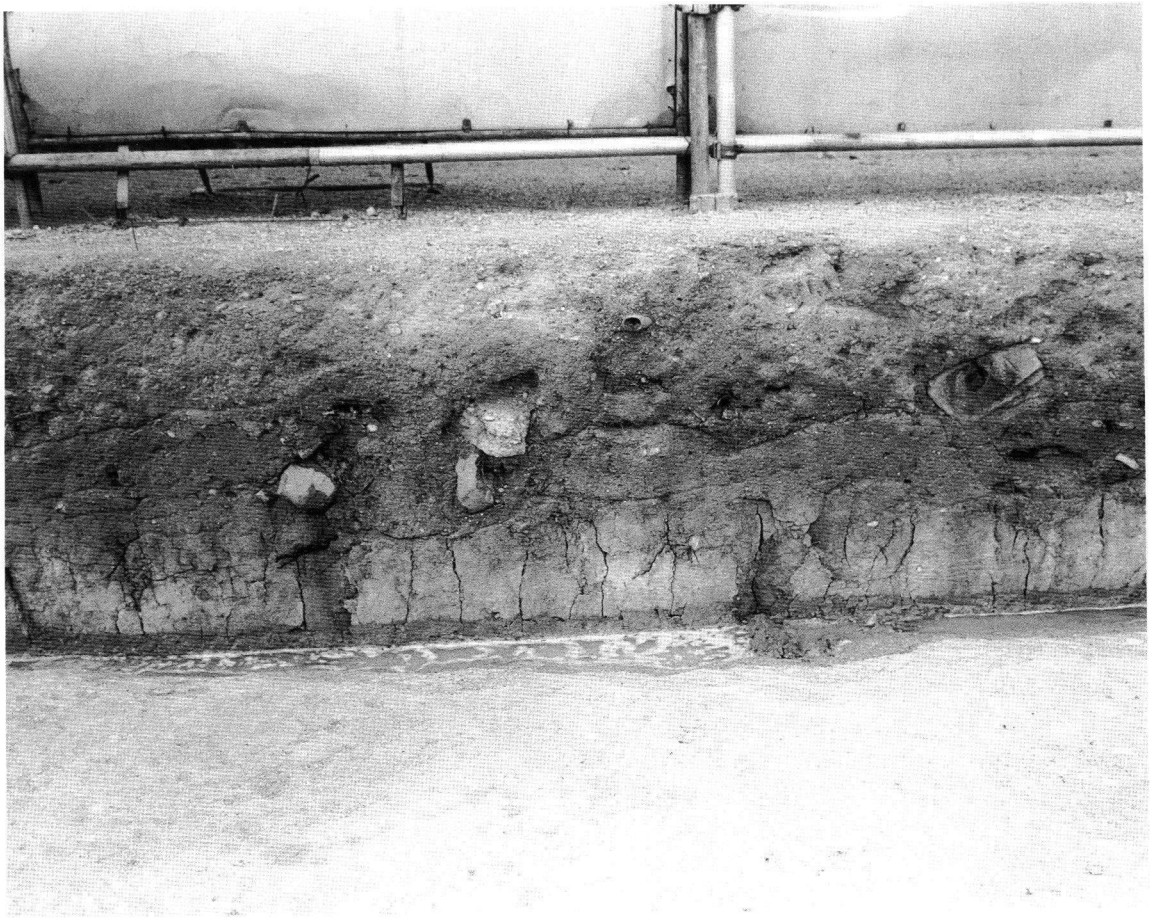
図版第11　東円寺跡94—1区



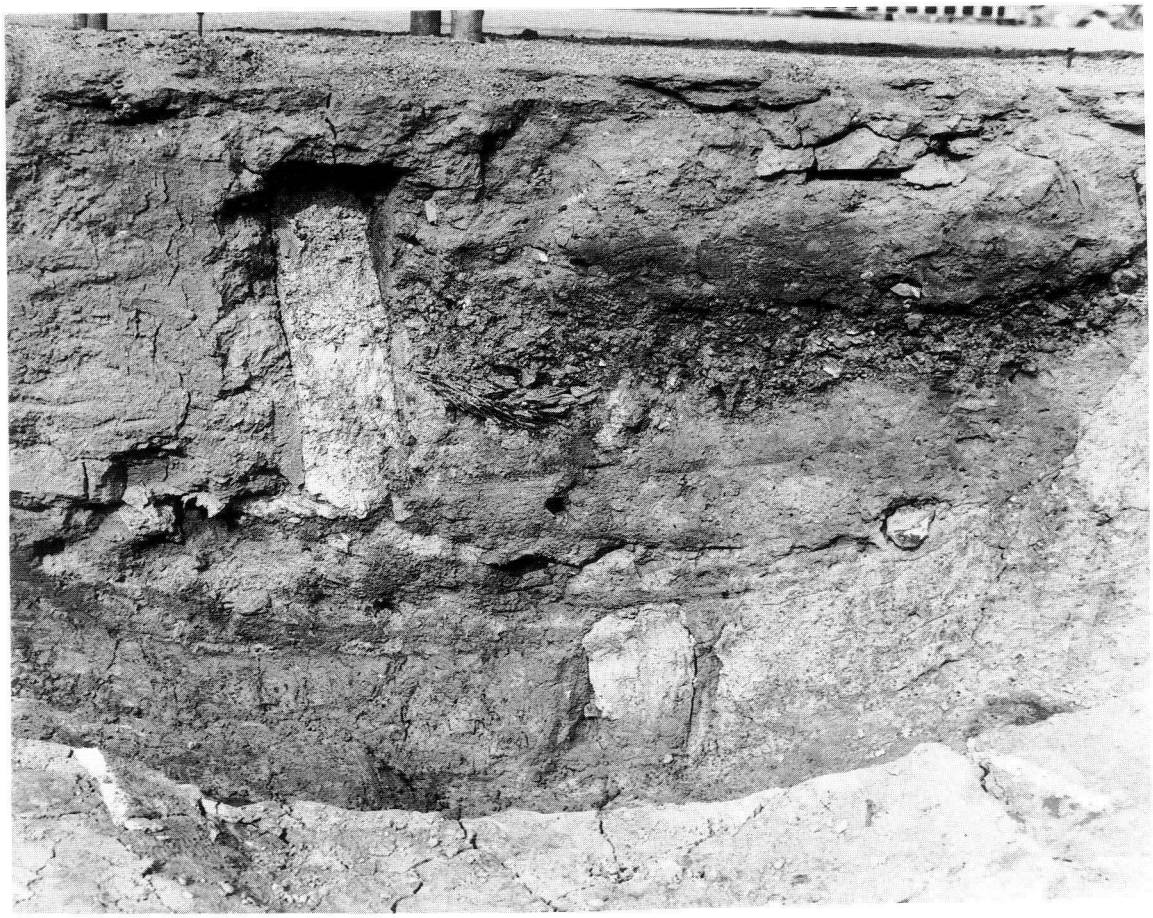
A区南壁

B１区東壁

図版第12　東円寺跡94—1区



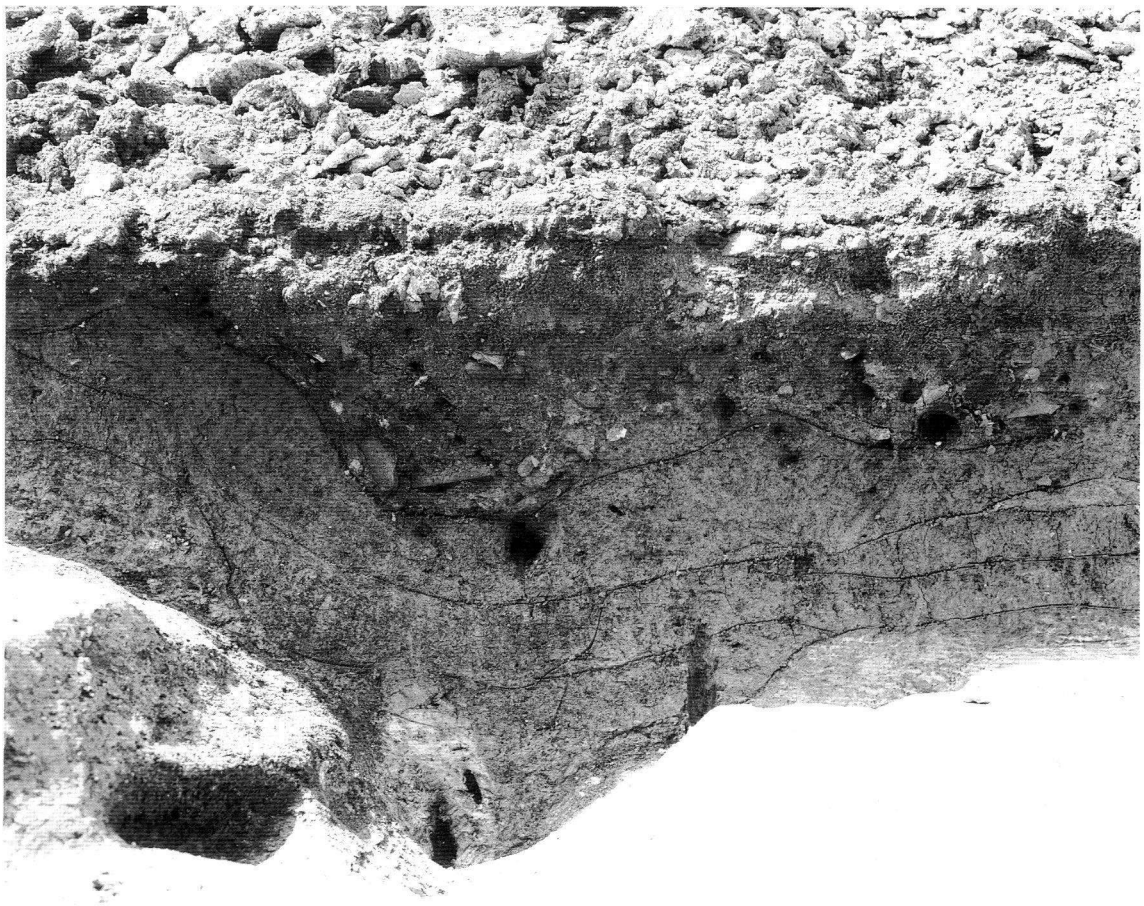
B１区西壁



B２区東壁

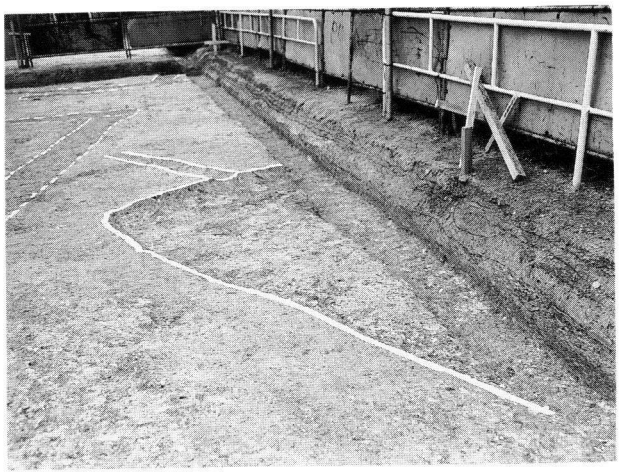
図版第13　東円寺跡94—1区

B２区西壁



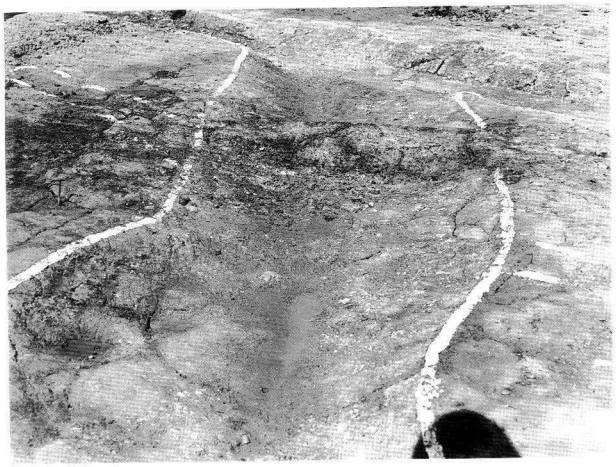
C区南壁

図版第14　東円寺跡94—1区



A区SD1・SK1

B1区SK02

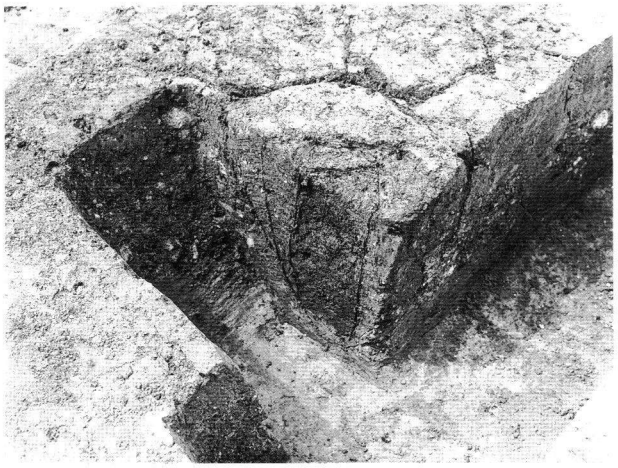


B1区SD2

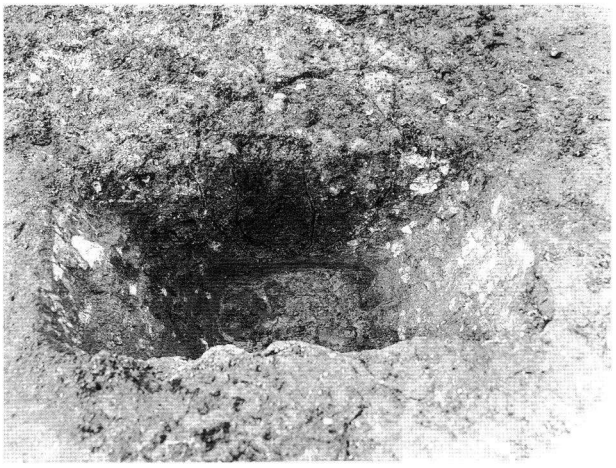
B2区SD5・SD6

C区SD10・SD11

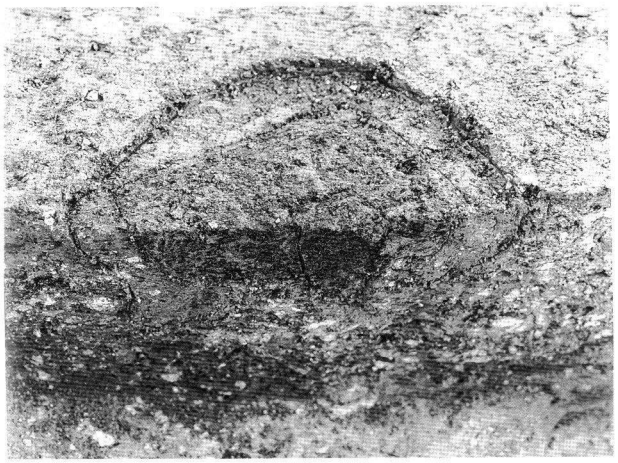
図版第15　東円寺跡94—1区



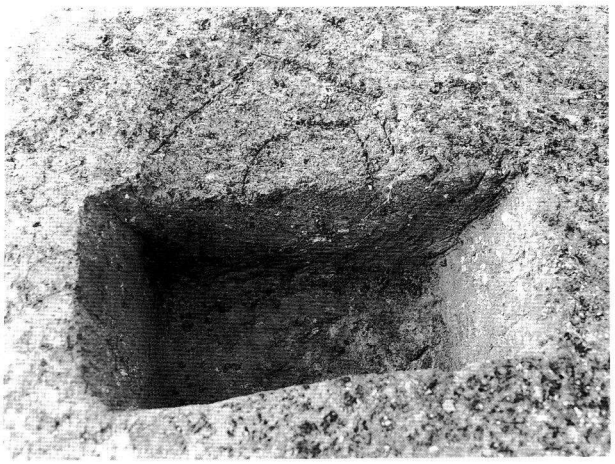
B1区SP57



B1区SP50



B1区SP56

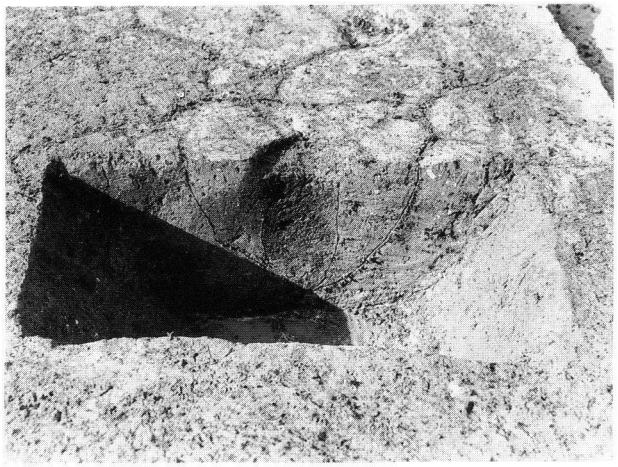


B1区SP34

B1区SP66

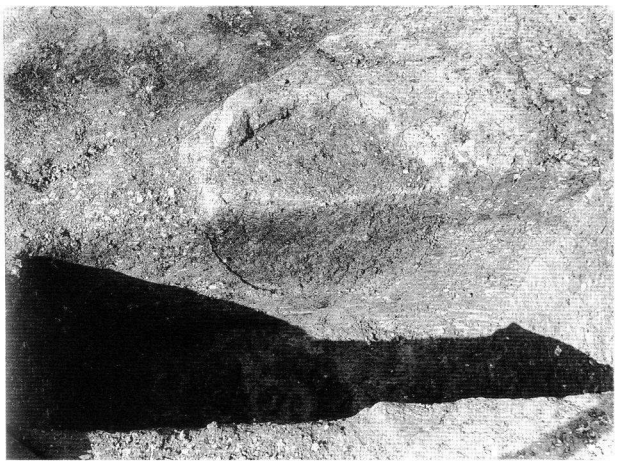
B1区SP36

図版第16　東円寺跡94—1区

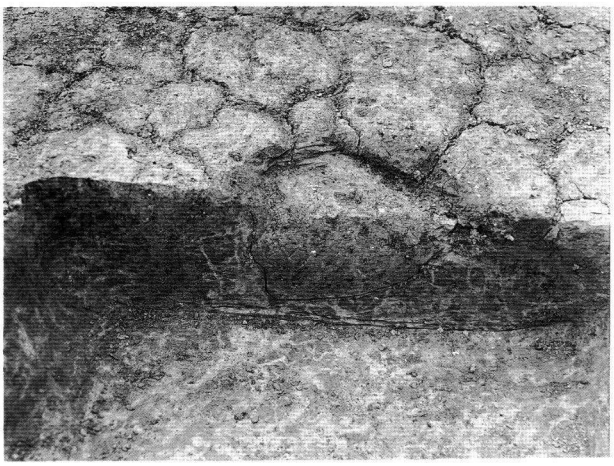


B1区

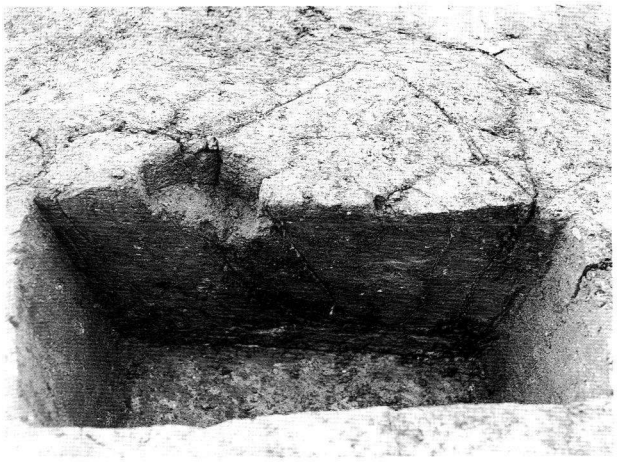
B1区SP66



B1区SP59

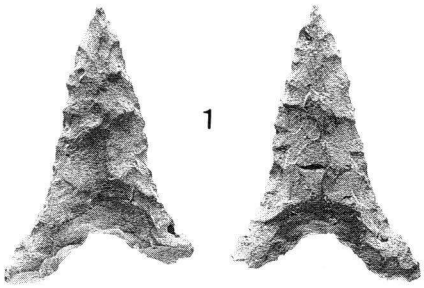


B2区SP100



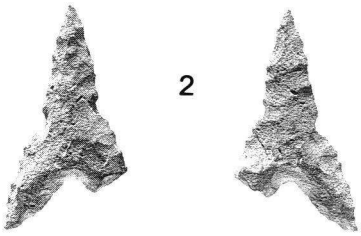
B1区SP25・SP26

図版第17　遺物



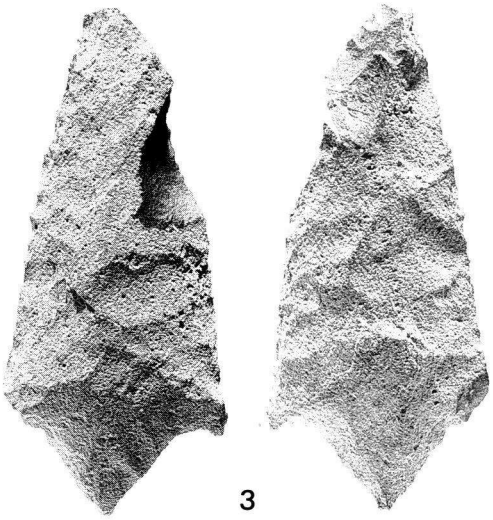
1

石鏃



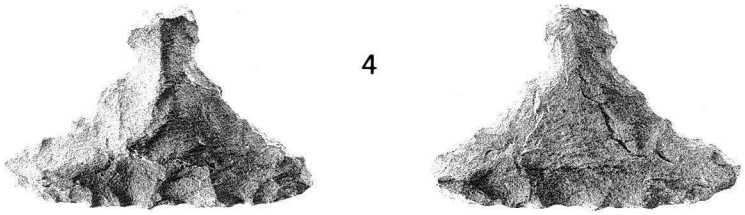
2

石鏃



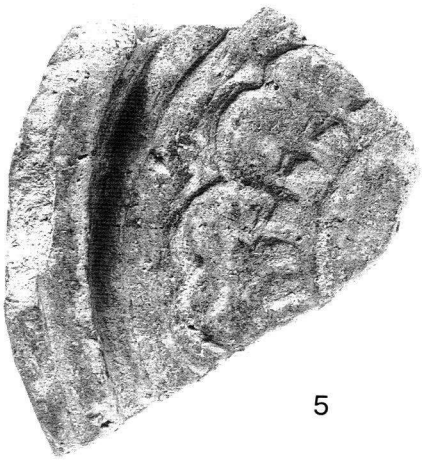
3

有舌尖頭器

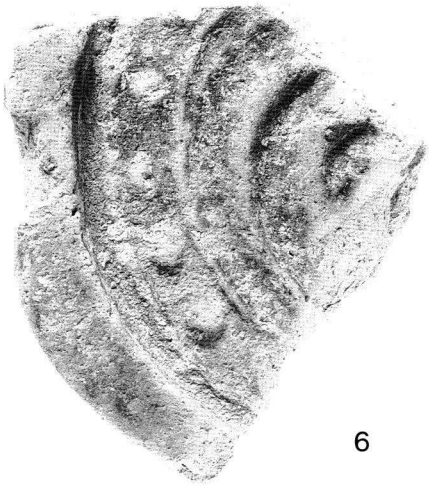


4

石匙



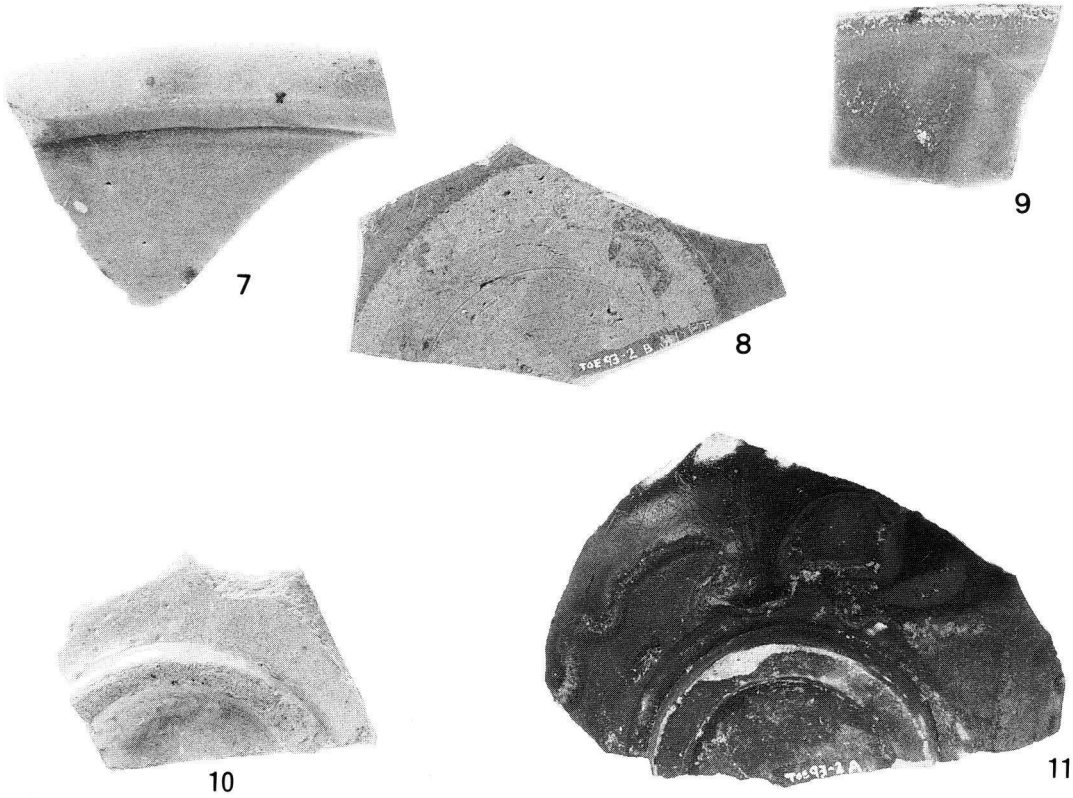
5



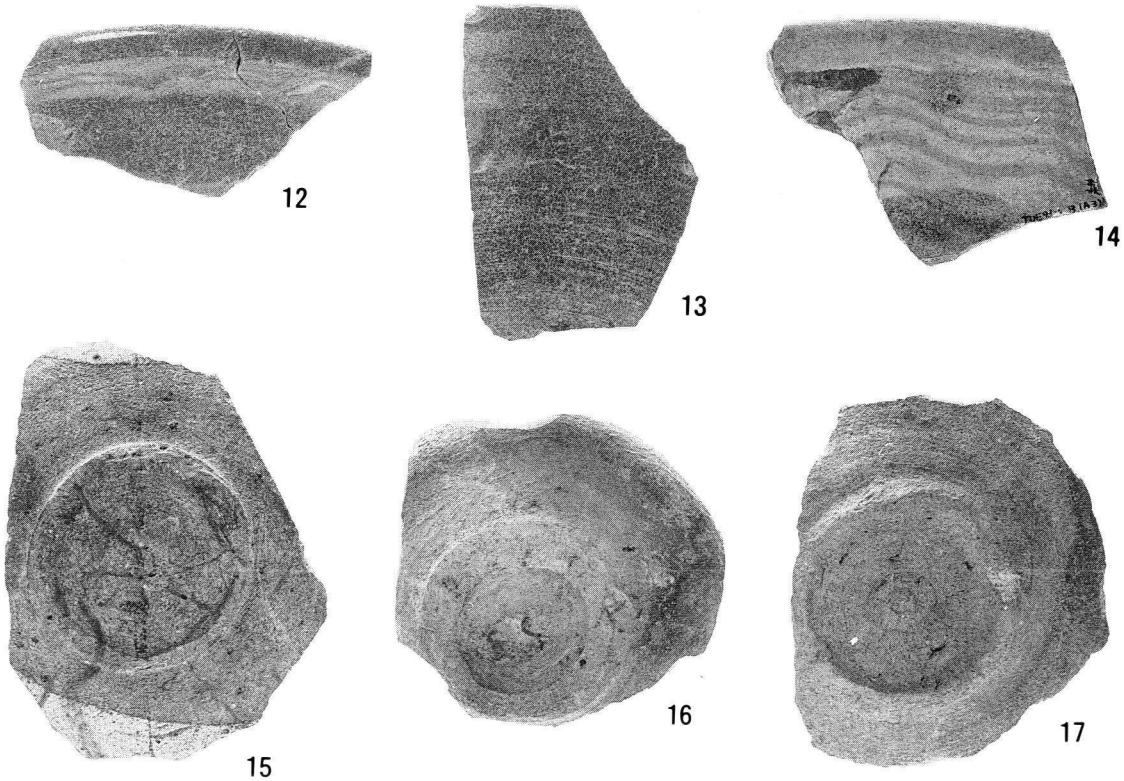
6

左　東円寺跡94-1区　Ｂ２地区　ＳＤ６出土　　右　東円寺跡93-２区　出土

図版第18　遺物

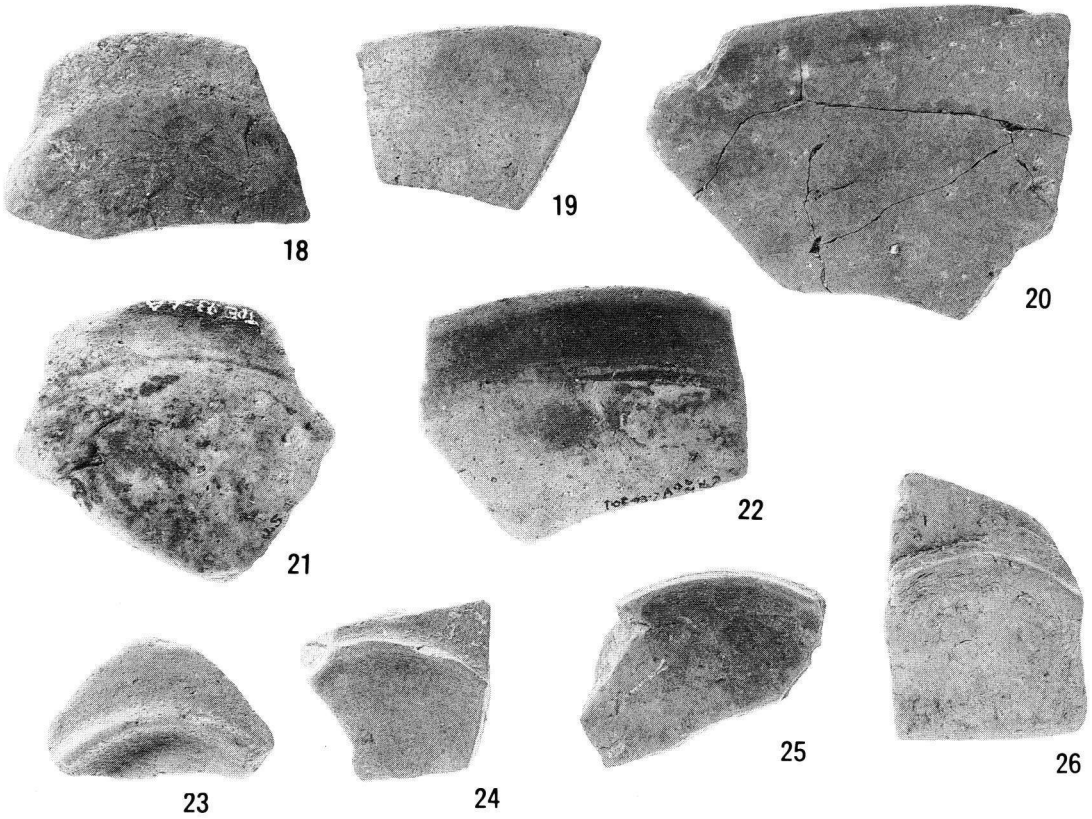


東円寺跡93-2区 出土遺物

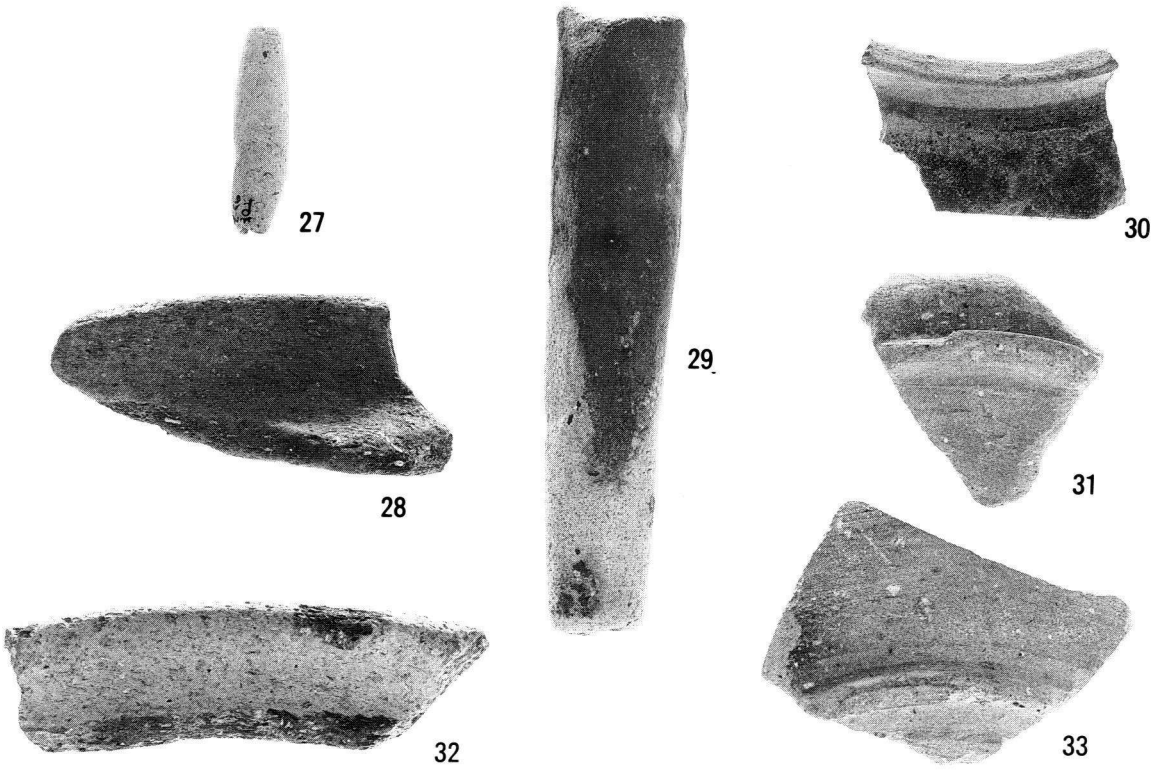


東円寺跡93-2、94-1区 出土遺物

図版第19　遺物

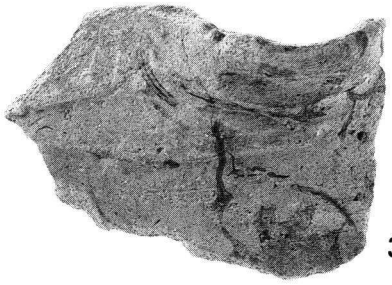


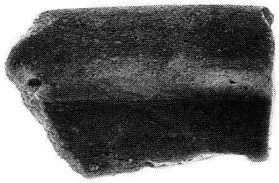
東円寺跡93-2区　出土遺物

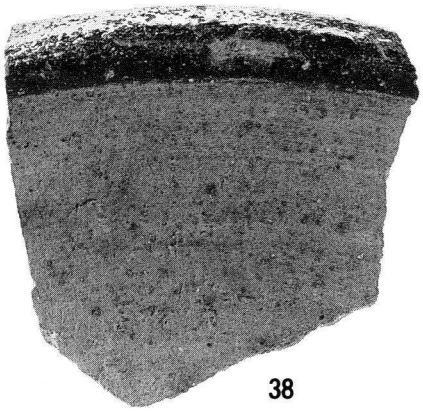


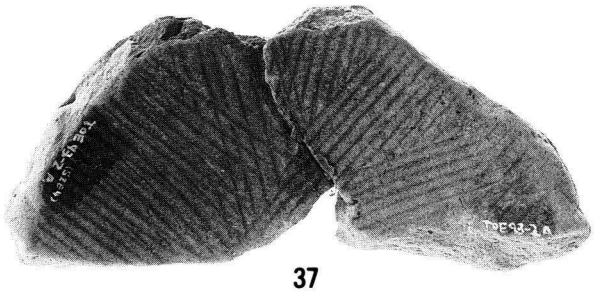
東円寺跡93-2区　出土遺物

34

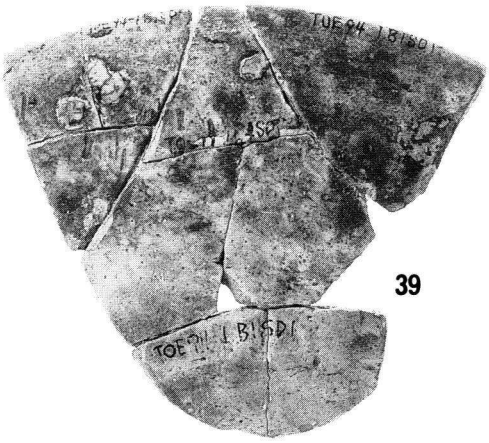

36

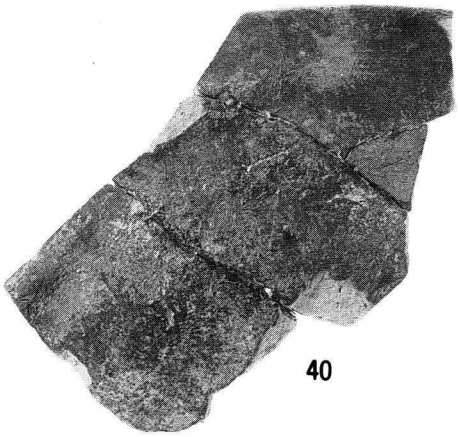

35

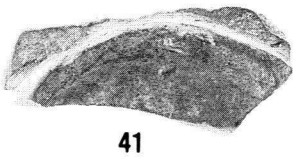

38

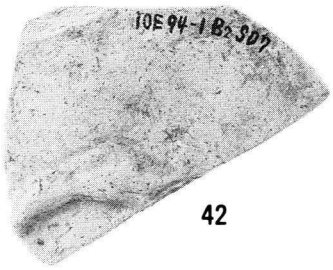

37

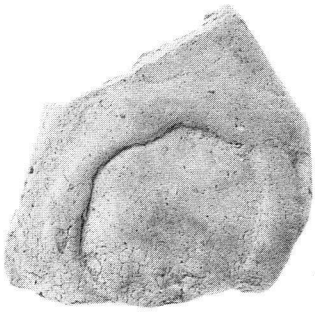
東円寺跡93-2区 出土遺物


39


40

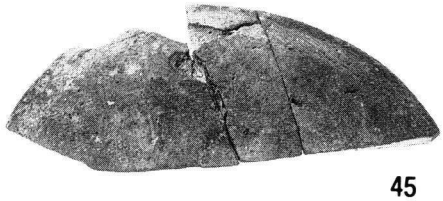

41

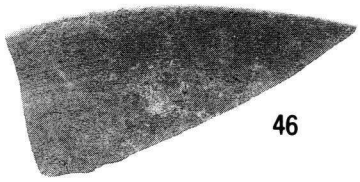

42

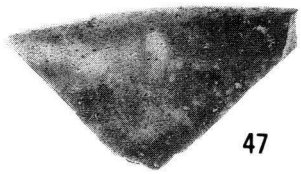

43

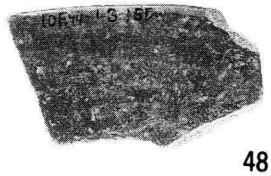
東円寺跡94-1区 出土遺物

44

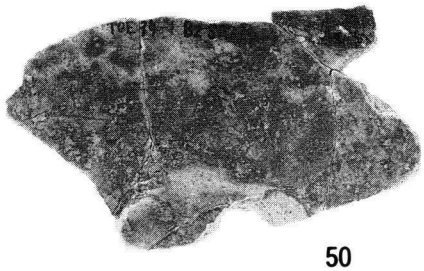

45


46

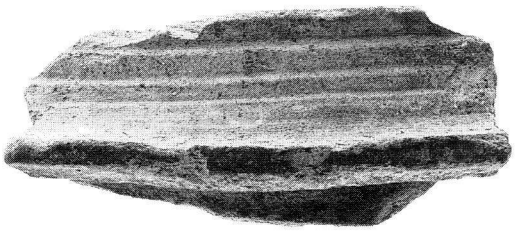

47

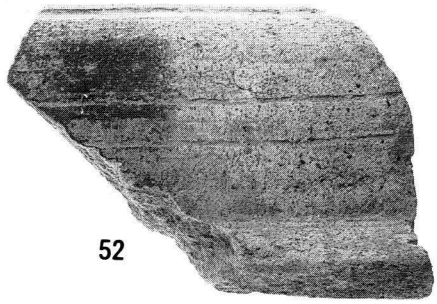

48

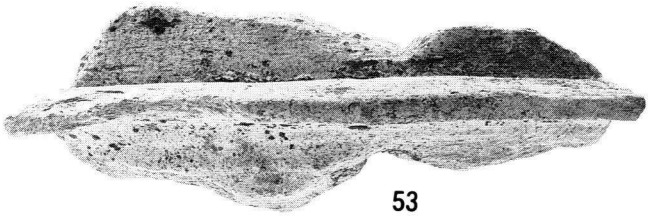
49

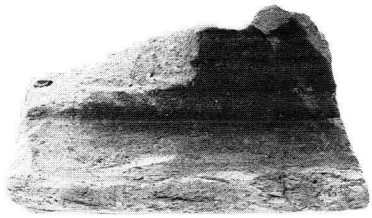

50

東円寺跡94-1区　出土遺物


51


52


53


54

東円寺跡94-1区　出土遺物

報告書抄録

ふりがな	とうえんじあとはっくつちょうさがいようほうこくしょ
書名	東円寺跡発掘調査概要報告書
副書名	
巻次	Ⅸ
シリーズ名	熊取町文化財調査報告書
シリーズ番号	第24集
編著者名	前川　淳
編集機関	熊取町教育委員会
所在地	〒590-04　大阪府泉南郡熊取町大字野田2244　TEL0724-52-1001
発行年月日	1996年　3月

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
とうえんじあと 東円寺跡	おおさかふ せんなんぐん くまとりちょう おあさのだ 大阪府泉南郡 熊取町大字野田2160	27361	90-4	34°23′50″	135°21′32″	90-4区 19900309～ 19900310	225	熊取町立中央小学校給食調理室の改築に伴う緊急発掘調査
			91-4	34°23′48″	135°21′30″	91-4区 19910715～ 19910808	125.4	熊取町立中央小学校下足室の新設工事に伴う緊急発掘調査
			93-2	34°23′48″	135°21′33″	93-2区 19930520～ 19931025	1238	熊取町立中央小学校プール・管理棟工事に伴う緊急発掘調査
			94-1	34°23′47″	135°21′31″	94-1区 19940706～ 19940830	1760	熊取町立中央小学校流域貯留浸透工事に伴う緊急発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
東円寺跡	集落遺跡 寺院遺跡	縄文時代	なし	有舌尖頭器・石鏃・サヌカイト	縄文時代から近世までの複合遺跡
		奈良時代	なし	須恵器	
		平安時代		瓦	
		中世	建物　2棟以上 溝　15条 土壙　多数 水田跡　4枚以上	瓦器・土師器・陶磁器・瓦	
		近世	溝　多数 土壙　多数	陶磁器・瓦	

熊取町埋蔵文化財報告第24集

東円寺跡発掘調査概要・IX

－熊取町立中央小学校における東円寺跡の調査－

発行日　平成８年３月31日

編集・発行　熊取町教育委員会

大阪府泉南郡熊取町大字野田2244番地

印刷　小笠原印刷㈱